仙台市文化財調査報告書第69集

# 仙台市
# 高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ

昭和59年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

仙台市文化財調査報告書第69集

# 仙台市
# 高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ

昭和59年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

# 序　　文

高速鉄道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業は、昭和56年度から開始され、本年度はその３年目をおえた段階であります。主な調査地域は笊川流域にあって、すべての調査地区が沖積低地という環境下で氾濫堆積作用の繰り返しで形成された地形となっていて、重層構造をもつ遺跡群が集積しているところであります。

これまで本線敷を中心に発掘調査を進めてきましたが、中世・奈良・平安・古墳・弥生・縄文と各時代の生活文化層が検出され、沖積平野の開拓史を解明する上で貴重なたくさんの資料が発見されています。

本書は昭和58年度発掘調査事業に関する調査の概要を速報的にまとめたものであります。この発掘調査事業の進行に当っては、各関係機関はもとより、多くの地域住民並びに市民の方々の御理解と御助言、御支援をいただきましたこと、心から感謝を申し上げます。本書が、仙台の歴史を理解するための手だすけとなり、文化財の保護・保存の啓蒙活動の高揚に役立つことを念じてやみません。

最後に、こうした文化財保護行政に対し、なお一層の御協力をお願いして序といたします。

昭和59年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

# 例　　言

1．本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る伊古田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区における昭和58年度の遺跡発掘調査概報である。

2．本概報を作成するにあたり、下ノ内浦遺跡出土石包丁の使用痕鑑定については東北大学文学部助教授須藤隆・同助手阿子島香両氏にお願いした。

3．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　Ⅰ……篠原信彦　　Ⅱ……斎野裕彦
Ⅲ……高橋勝也　　Ⅳ……渡辺忠彦
Ⅴ……成瀬　茂・吉岡恭平　　Ⅵ……荒井　格

遺構トレース　大場拓俊、佐川正敏、藤沢　敦、松木　仁、庄子信広、高橋　博、岡本真紀子、斎藤美弥子

土器実測　斎野、高橋(勝)、藤沢、斎藤美智子、阿部多津子、臼井美津子、吉田康子、菅原恵美、斎藤誠司、高橋りえ、高橋綾子、鈴木和子

土器トレース　藤沢、阿部、斎藤美智子、安喰真由美、鈴木、高橋(綾)、鈴木勝彦

石器実測・トレース　佐川

遺構写真撮影　篠原、吉岡、斎野、高橋(勝)、渡辺(忠)、成瀬、荒井、佐藤裕、渡辺誠

遺物写真撮影　渡辺(忠)、佐藤、成瀬、高橋(勝)、斎野、斎藤信次、庄子

遺物拓影　原　充広、臼井

遺物接合・補修　森　剛男、松木、斎藤美智子、臼井、有路尚子、後藤　修、熱海哲也、星　昌彦、斎藤(信)、石川勝子、松本幸子、松本敦子

ウォーター・セパレーション　古川陸子、佐藤　薫

編集は篠原、吉岡、斎野、高橋(勝)、渡辺(忠)、成瀬、荒井、佐藤(裕)が行った。

4．本書の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970) を使用した。

5．本書中の富沢水田遺跡は、昭和57年度に調査した泉崎前遺跡・中谷地遺跡・鳥居原遺跡などの調査結果及び旧地形を考慮し、昭和58年６月に新遺跡として登録した。

6．調査にあたっては次の方々の御教示と御助言を賜った。(五十音順、敬称略)

阿子島香(東北大学)、書上元博(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、佐々木章(大分短期大学)、星川清親(東北大学)、庄司駒男(東北大学)、庄子貞雄(東北大学)、須藤隆（東北大学)、豊島正幸(東北大学)、畑中建一(北九州大学)、藤下典之(大阪府立大学)、藤原宏志(宮崎大学)、松谷暁子(城西歯科大学)、松本秀明(東北大学)、三好教夫（岡山理科大学)、安田喜憲(広島大学)、山田一郎(東北大学)

# 本 文 目 次


序　文

例　言

Ⅰ．調査経過…… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境…… 4

Ⅲ．伊古田遺跡…… 5

1．遺跡の立地　　2．調査の方法

3．調査の概要　　4．まとめ

Ⅳ．下ノ内遺跡…… 23

1．調査の方法　　2．調査の概要

3．まとめ

Ⅴ．下ノ内浦遺跡…… 43

1．遺跡の立地　　2．調査の方法

3．調査の概要　　4．弥生時代の遺構と遺物

5．下ノ内浦遺跡SK 2土壙出土の石包丁……須藤　隆・阿子島香

Ⅵ．富沢水田遺跡…… 67

1．遺跡の立地　　2．調査の方法

3．層位　　4．調査の概要

5．まとめ


# 挿図・表目次


第1図　調査区位置図…… 2

第2図　遺跡の位置と周辺遺跡…… 3

**伊古田遺跡**

第3図　グリッド配置図…… 6

第4図　遺構配置図…… 7

第5図　礫層平面図…… 8

第6図　14号住居跡実測図…… 10

第7図　出土遺物(1)…… 11

第8図　7号住居跡実測図…… 12

第9図　8号住居跡実測図…… 14

第10図　出土遺物(2)…… 15

第11図　出土遺物(3)…… 16

**下ノ内遺跡**

第12図　グリッド配置図…… 24

第13図　遺構配置図…… 25・26

第14図　12号住居跡実測図…… 27

第15図　15号住居跡実測図…… 29

第16図　19号住居跡実測図…… 30

第17図　出土遺物…… 31

下ノ内浦遺跡

第18図　グリッド配置図…… 43
第19図　遺構配置図・基本層位…… 45・46
第20図　SI 2 竪穴遺構平面図・
　　出土遺物…… 47
第21図　SK 1 ・SK 2 土壙平面図・
　　出土遺物…… 49
第22図　SK 2 土壙出土遺物 …… 50
第23図　SK 3 土壙平面図・出土遺物
　　SD 8 溝跡平面図…… 51
第24図　SK 2 土壙出土石包丁実測図 …… 62
第25図　石包丁光沢分布図…… 63

富沢水田遺跡

第26図　基本層位…… 69・70
第27図　7c層上面平面図…… 69・70
第28図　出土遺物(1)…… 73
第29図　出土遺物(2)…… 74
第 1 表　本調査一覧表…… 1
第 2 表　試掘調査一覧表…… 1

# 写真図版目次

伊古田遺跡

写真 1　調査区全景…… 17
写真 2　 1 号住居跡全景…… 17
写真 3　 5 号住居跡全景…… 17
写真 4　 6 号住居跡全景…… 18
写真 5　 7 号住居跡全景…… 18
写真 6　 8 号住居跡全景…… 18
写真 7　10・11号住居跡全景…… 19
写真 8　10号住居跡全景…… 19
写真 9　12号住居跡全景…… 19
写真10　14号住居跡全景…… 20
写真11　 8 号土壙遺物出土状況…… 20
写真12　礫層検出状況…… 20
写真13　出土遺物(1)…… 21
写真14　出土遺物(2)…… 22

下ノ内遺跡

写真15　Ⅱ区調査区全景…… 33
写真16　Ⅳ区調査区全景…… 33
写真17　11号住居跡全景…… 33
写真18　12号住居跡全景…… 34
写真19　12号住居跡遺物出土状況…… 34
写真20　12号住居跡 1 号カマド…… 34
写真21　14号住居跡全景…… 35
写真22　15号住居跡全景…… 35
写真23　15号住居跡遺物出土状況…… 35
写真24　15号住居跡カマド…… 36
写真25　16号住居跡全景…… 36
写真26　19号住居跡全景…… 36
写真27　20号住居跡全景…… 37
写真28　21号住居跡全景…… 37
写真29　21号住居跡遺物出土状況…… 37
写真30　 9 号掘立柱建物跡全景…… 38
写真31　18号溝全景…… 38
写真32　出土遺物(1)…… 39
写真33　出土遺物(2)…… 40
写真34　出土遺物(3)…… 41
写真35　出土遺物(4)…… 42

下ノ内浦遺跡

写真36　第３層上面水田跡…… 53
写真37　第５層上面小溝状遺構…… 53
写真38　第５層ＳＫ27土壙…… 53
写真39　Ⅱ区第５層上面全景…… 54
写真40　ＳＩ１竪穴住居跡…… 54
写真41　Ⅰ区第７層上面作業風景…… 54
写真42　第７層ＳＫ３土壙…… 55
写真43　第７層ＳＤ８溝跡…… 55
写真44　第８層ＳＫ１土壙…… 55
写真45　第８層ＳＫ２土壙…… 56
写真46　ＳＫ２土壙内遺物出土状況…… 56
写真47　ＳＩ２竪穴遺構…… 56
写真48　出土遺物(1)…… 57
写真49　出土遺物(2)…… 58
写真50　石包丁Ｓ－１の使用痕…… 64
写真51　石包丁Ｓ－２の使用痕…… 65
写真52　ＳＫ２土壙出土石包丁…… 66

富沢水田遺跡

写真53　基本層位……69・70
写真54　７ｃ層上面検出水田跡……69・70
写真55　７ｃ層上面検出水田跡……69・70
写真56　現地説明会風景……69・70

# Ⅰ．調　査　経　過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う発掘調査は、昭和56年度に開始され、本年度は３年目を迎えた。調査の対象地区は仙台市南部の長町・富沢・大野田地区である。この地区には、遺跡が多く分布し、最近の調査によって重層構造の遺跡が多い場所として知られている。

昭和58年度当初の調査計画は、本調査が下ノ内浦遺跡と昨年度から継続の下ノ内遺跡、富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区(本線敷部分)、試掘調査が伊古田遺跡と富沢水田遺跡中谷地地区であった。しかし、工事の都合上、下ノ内遺跡の調査は昭和58年11月で一時中止し、12月より新たに富沢水田遺跡鳥居原地区（変電所部分）の調査が開始された。

試掘調査の結果は、伊古田遺跡では古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が検出されたため、本調査へ移行したが、富沢水田遺跡中谷地地区の試掘調査では遺構は検出されなかった。このため、今年度の本調査は伊古田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区(本線敷部分)、富沢水田遺跡鳥居原地区(変電所部分)の４遺跡５ケ所で行なわれた。

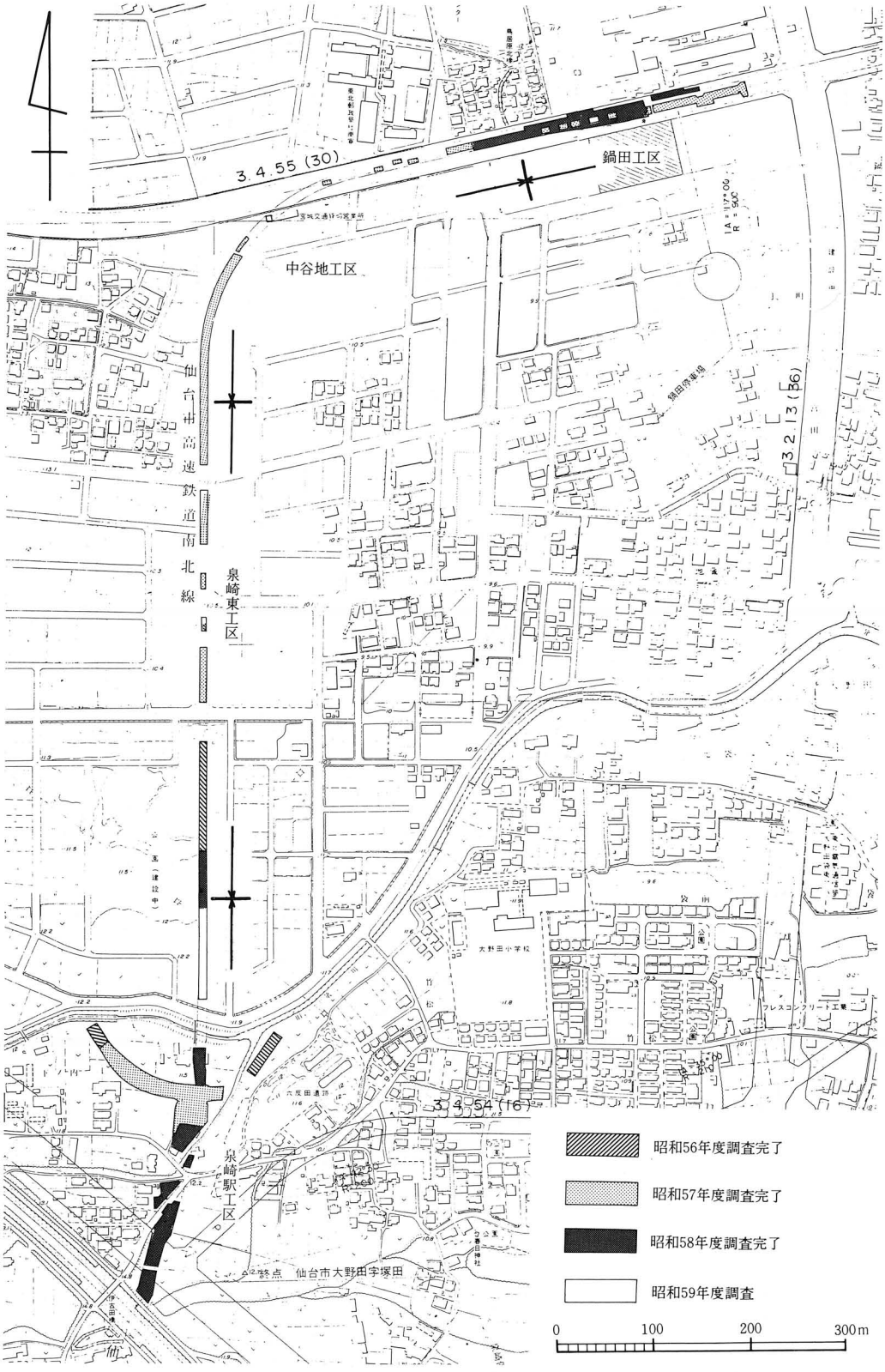
調査にあたっては、仙台市交通局高速鉄道建設本部と度々にわたって協議を行ない、昭和59年３月23日、伊古田遺跡・富沢水田遺跡の調査を最後に本年度分の調査を終了した。

**第１表　本調査一覧表**

| 遺跡名<br>所在地 | 時代<br>種類 | 調査期間 | 調査面積 | 担当職員 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 伊古田遺跡 | 縄文・古墳～平安 | S 58. 4 .15～S 57.12.27 | 1,400㎡ | 篠原信彦・高橋勝也 | 泉崎駅工区 |
| 仙台市大野田字塚田ほか | 集落跡 | S 59. 3 . 5 ～S 59. 3 .23 | | 荒井　格 | |
| 下ノ内遺跡 | 縄文～平安 | S 58. 4 .13～S 58.12. 8 | 2,000㎡ | 篠原信彦・渡辺忠彦 | |
| 仙台市富沢四丁目 | 集落跡 | | | 佐藤　裕 | |
| 下ノ内浦遺跡 | 縄文～中世 | S 58. 4 .13～S 58.12.23 | 970㎡ | 吉岡恭平・成瀬　茂 | 泉崎駅工区<br>泉崎東工区 |
| 仙台市富沢一丁目 | 集落跡・水田跡 | | | | |
| 富沢水田遺跡（鳥居原中谷地地区） | 弥生～中世 | S 58. 4 .13～S 58.12.27 | 2,400㎡ | 斎野裕彦・荒井　格 | 鍋田工区 |
| 仙台市長町南三丁目 | 水田跡 | S 59. 1 . 6 ～S 59. 1 . 9 | | 渡辺　誠 | 中谷地工区 |
| 富沢水田遺跡(鳥居原地区) | 弥生～中世 | S 58.12. 6 ～S 58.12.27 | 700㎡ | 篠原信彦・渡辺忠彦 | 変電所 |
| 仙台市長町南三丁目 | 水田跡 | S 59. 3 . 5 ～S 59. 3 .23 | | 斎野裕彦 | |

**第２表　試掘調査一覧表**

| 遺跡名 | 調査期間 | 試掘面積 | 発見遺構 | 担当職員 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 伊古田遺跡 | S 58. 4 .13～S 58. 4 .19 | 65㎡ | — | 篠原・高橋 | 泉崎駅工区 |
| 富沢水田遺跡 | S 58. 5 .25～S 58. 6 .30 | 36㎡ | — | 荒井・斎野 | 中谷地工区 |


3.4.55 (30)
鍋田工区
中谷地工区
仙台市高速鉄道南北線
泉崎東工区
3.2.13 (86)
3.4.54 (16)
泉崎駅工区
終点 仙台市大野田字塚田
昭和56年度調査完了
昭和57年度調査完了
昭和58年度調査完了
昭和59年度調査
0
100
200
300m

第１図　調査区位置図

| 遺跡番号 | 遺跡名称 | 所属時期 | 遺跡番号 | 遺跡名称 | 所属時期 |
|---|---|---|---|---|---|
| C－196 | 伊古田遺跡 | 縄文(後)、古墳～平安 | C－107 | 芦ノ口遺跡 | 平安 |
| C－299 | 下ノ内遺跡 | 縄文(中・後)、弥生～平安 | C－112 | 大野田遺跡 | 縄文(後)、奈良、平安 |
| C－300 | 下ノ内浦遺跡 | 縄文(後)、弥生～中世 | C－152 | 鍛冶屋敷A遺跡 | 奈良、平安 |
| C－301 | 富沢水田遺跡 | 弥生、奈良、平安、中世 | C－153 | 堀ノ内遺跡 | |
| C－007 | 砂押古墳 | 古墳 | C－155 | 原東遺跡 | |
| C－008 | 裏町古墳 | 古墳 | C－156 | 裏町東遺跡 | |
| C－014 | 教塚古墳 | 古墳 | C－195 | 富沢上ノ台遺跡 | 奈良、平安 |
| C－015 | 金洗沢古墳 | 古墳 | C－197 | 六反田遺跡 | 縄文(中・後・晩)、弥生、古墳、奈良、平安 |
| C－017 | 金岡八幡古墳 | 古墳 | C－198 | 袋東遺跡 | 古墳、奈良、平安 |
| C－031 | 土手内横穴群 | 奈良、平安 | C－201 | 富沢清水遺跡 | 奈良、平安 |
| C－038 | 王の壇古墳 | 古墳 | C－203 | 砂押屋敷遺跡 | 平安 |
| C－039 | 春日社古墳 | 古墳 | C－233 | 山口遺跡 | 縄文(中・後)、弥生、古墳、奈良、平安 |
| C－040 | 五反田古墳 | 古墳 | C－266 | 元袋Ⅱ遺跡 | 縄文(後)、奈良、平安 |
| C－043 | 鳥居塚古墳 | 古墳 | C－427 | 土手内窯跡 | 平安 |
| C－046 | 五反田箱式石棺 | 古墳 | C－520 | 富沢館跡 | 奈良、平安、中世 |
| C－052 | 五反田木棺墓 | 古墳 | C－658 | 元袋古碑群 | |
| C－106 | 三神峯遺跡 | 縄文(早・前・中) | | | |

第２図　遺跡の位置と周辺遺跡

# Ⅱ．遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は、昨年度に引き続き宮城野海岸平野の中の郡山低地において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町一利府線により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸、名取川左岸に見られ、名取川左岸には旧笊川が曲流している。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、富沢水田遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡で行なわれた。富沢水田遺跡は低地西半部ほぼ中央の後背湿地に立地しており、今年度は、その北半の鳥居原・中谷地地区（鍋田工区・中谷地工区）の調査が行なわれた。他の３遺跡は自然堤防上に立地しており、下ノ内浦遺跡（泉崎東工区・泉崎駅工区）は旧笊川の左岸に、下ノ内遺跡と伊古田遺跡（泉崎駅工区）は右岸に位置する。

この郡山低地西半部及びその周辺は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。昭和51～53年度に調査された六反田遺跡では、沖積平野においては県内で最も古い縄文時代中期中葉（大木8b式期）の竪穴住居跡や、後期初頭の竪穴住居跡、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。また昭和53・56・57年度に調査された山口遺跡では、縄文時代早期後半の遺物、中期・後期の土壙等、弥生時代の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居跡、平安時代・中世の水田跡が検出されており、両遺跡とも重層構造の遺跡である。これらのことにより、両遺跡周辺においても同様の遺構・遺物が発見される可能性は高く、かつ重層構造であると考えられる。その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺墳・大野田遺跡・天袋Ⅱ遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には裏町古墳・金洗沢古墳・昨年度調査された砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳、昭和57年度調査された大野田１号・２号古墳等がある。また、富沢水田遺跡の北には金岡八幡古墳が、西北部には教塚古墳がある。奈良・平安時代の遺跡では昨年度調査された下ノ内浦遺跡等がある。中世では新笊川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は旧来自然堤防上に集落や畑が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年土地区画整理が行なわれ、宅地化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

# Ⅲ．伊古田遺跡（C-196）

## １．遺跡の立地

伊古田遺跡は東北本線長町駅の南西約2.2kmに位置し、名取川下流域の自然堤防上に立地する。北側130m程には名取川の一支流である旧笊川が東流し、標高は12.4m前後である。近隣の遺跡としては北東に六反田遺跡(C-197)、北西に下ノ内遺跡(C-299)、新笊川をはさんで西に富沢館跡(C-520)が存在している。

## ２．調査の方法

仙台市高速鉄道、路線中軸線の七北田起点より13K900を基準として、３ｍ×３ｍのグリットを東西軸(１～40)、南北軸(A～F、一部～H)を設定して調査を実施した(第３図)。なお、盛土、耕作土はすべてバックホーにより排除した後に、調査を開始している。

また、東側工事用道路仮設の際、新笊川にかかる仮設橋の橋脚基礎部の試掘調査２ケ所を行なったが、遺構等の存在は確認されなかったことを併せて報告しておく。

## ３．調査の概要

### A．縄文時代の遺構と遺物

今回の伊古田遺跡の調査では縄文時代後期中葉の遺物包含層、河川の影響を受けたと考えられる礫層面が検出されている。

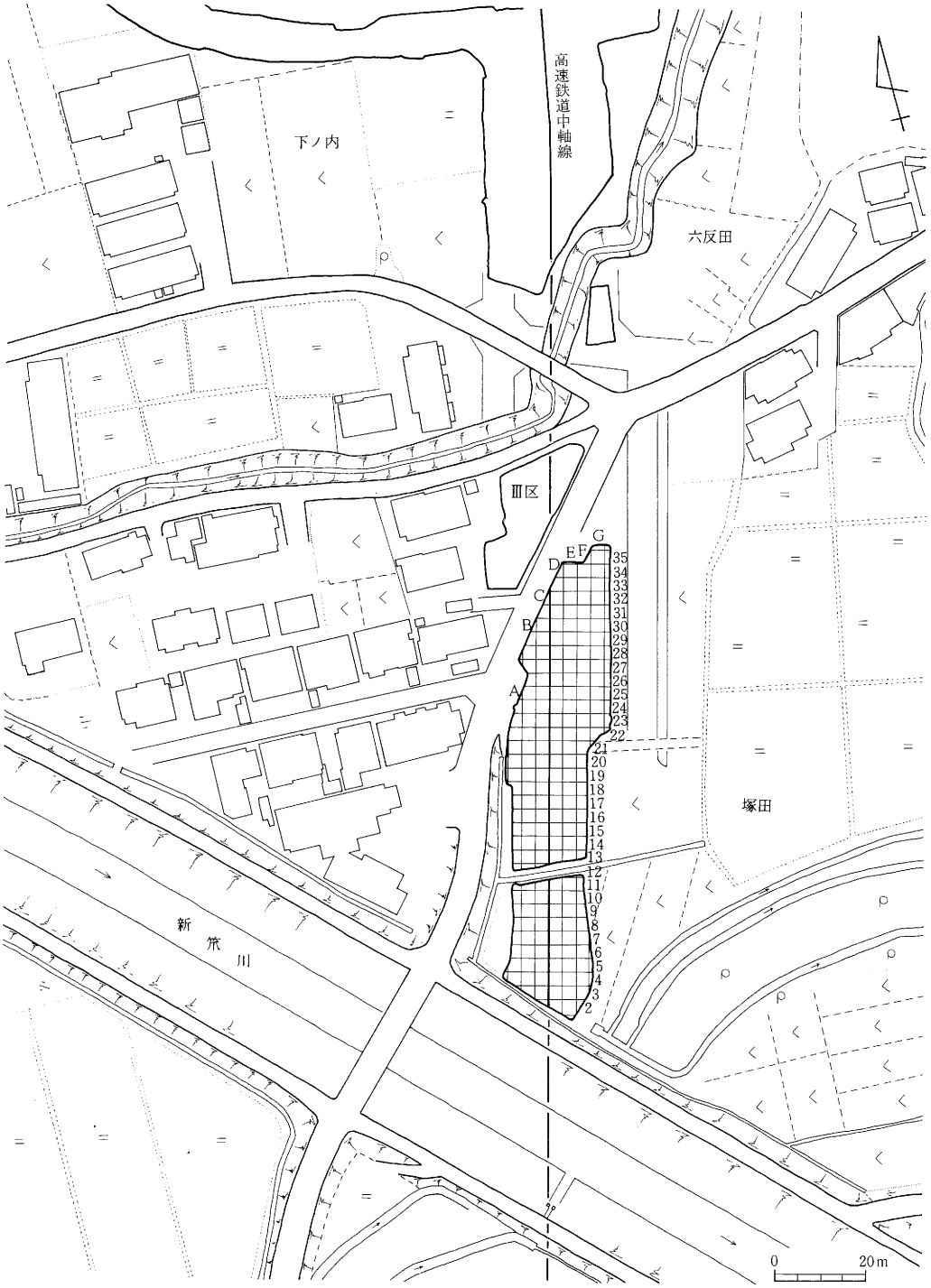
包含層は２個所確認されており、その内の１個所は調査区北部の27ライン以北で確認された。この部分は廃棄物を埋めた攪乱の西側にあたり、さらに西側の道路部分に調査区を一部拡張した調査個所である。

確認面は第Ⅷ層で、堆積土は黒褐色シルト層が主体となっている。包含層の厚さは15cm～35cmを測る。なお、この遺物包含層は多量のまとまった遺物を出土するため、今年度中に包含層全体を掘り下げるまでは至らず、来年度も継続して調査を行なう予定である。

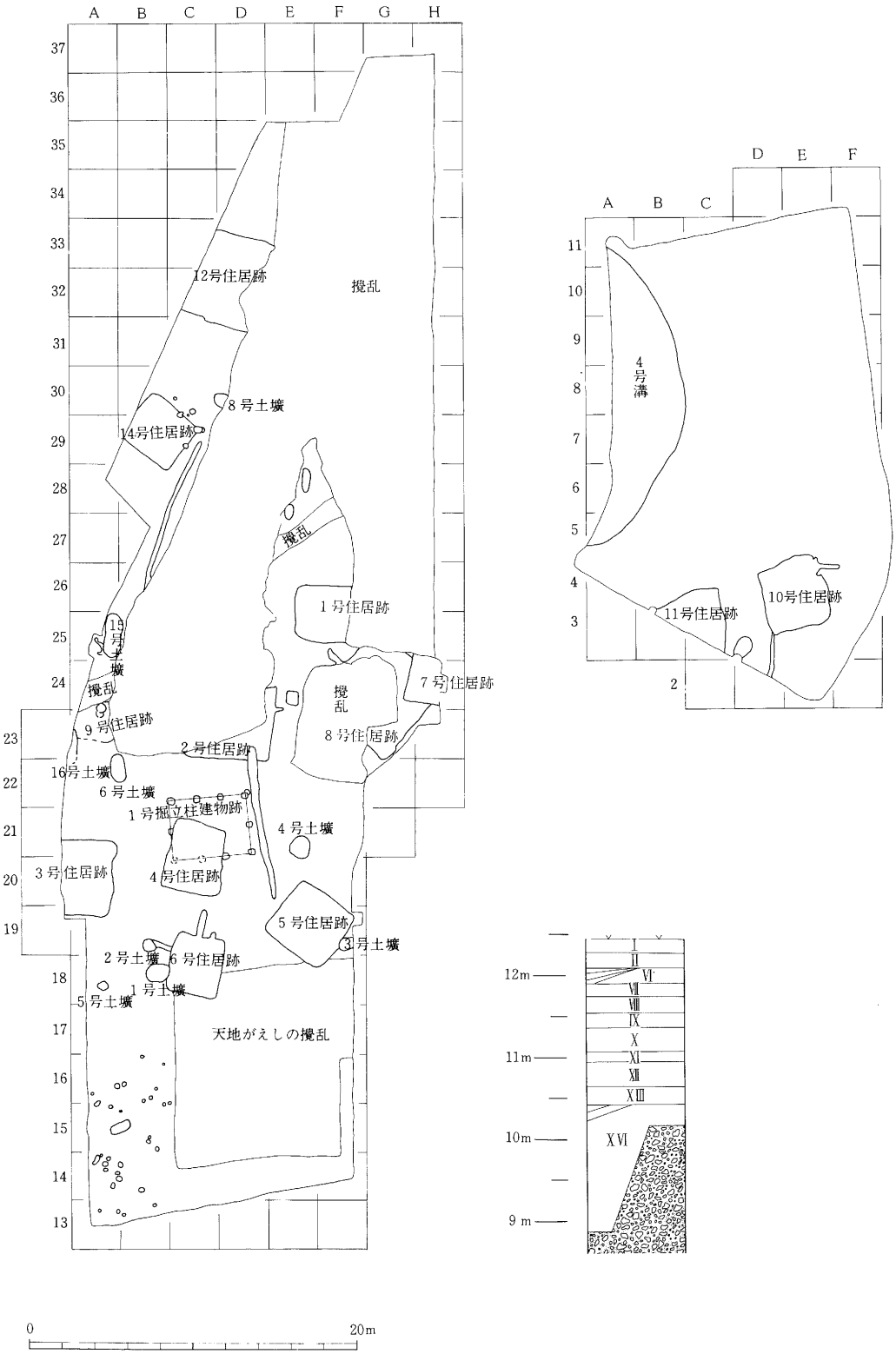
もう１個所の包含層はＢ～Ｄ－15・16ラインで確認された。確認面はⅩⅫ層であるが、前述の包含層と同時期（縄文時代後期中葉）の遺物（第11図４）が出土しているので、同時期の包含層と考えられる。

次に礫層面（第５図）であるが、Ｂ～Ｈ－18～24ラインに位置する。人頭大程度の礫によって形成されており、上部のほぼ平坦な面から縄文土器深鉢の一括土器破片（写真14、No.16）と炭化物が出土している。この土器は文様はなく、外面に撚り糸文しか見られないため時期を断定することはできない。しかし、破片ならびに出土状況から見て流れ込みとは考え難く、この礫層面がこの縄文土器の使用時期の生活面の延長上にあると考えられる。

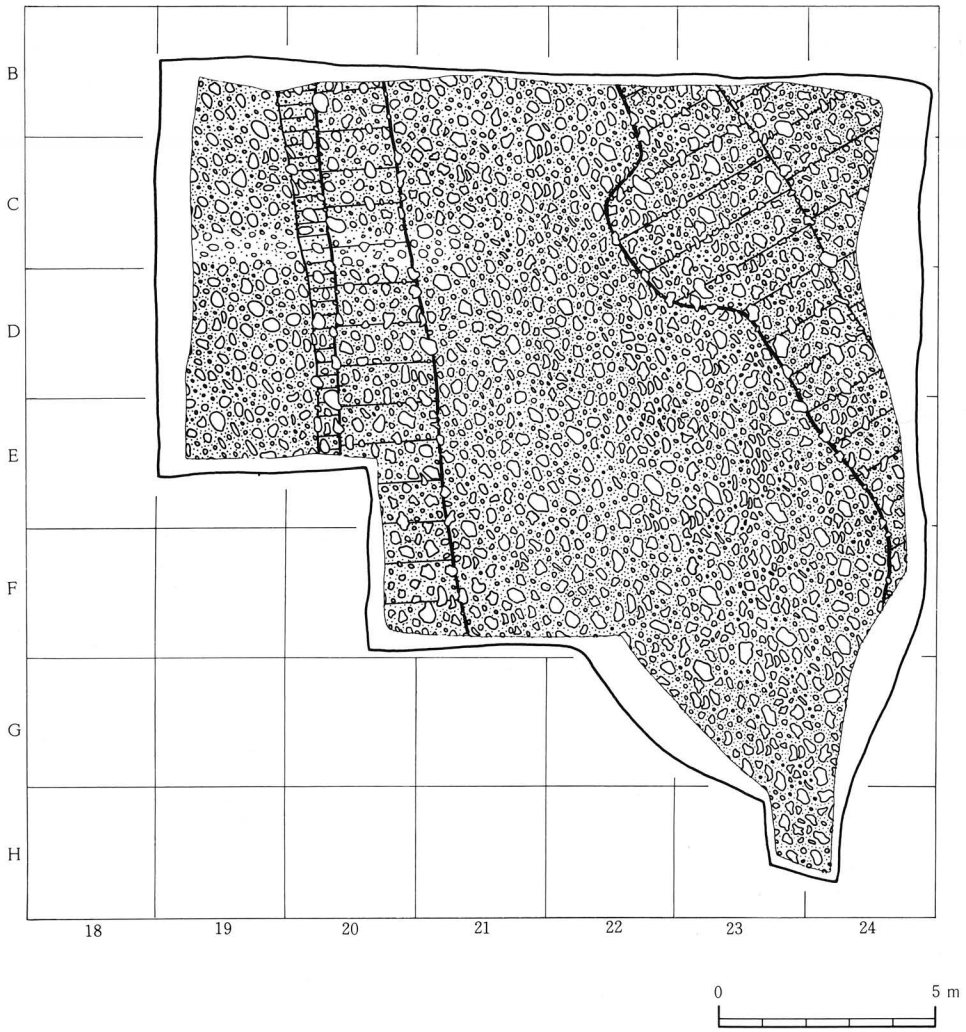
またこの礫層面では、河川の影響を受けたと考えられる起伏が確認された。レベル差は1.5ｍ




第３図　グリッド配置図


A B C D E F G H
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12号住居跡
撹乱
8号土壙
14号住居跡
撹乱
1号住居跡
15号土壙
撹乱
9号住居跡
2号住居跡
7号住居跡
撹乱
8号住居跡
16号土壙
6号土壙
1号掘立柱建物跡
4号土壙
3号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
3号土壙
2号土壙
6号住居跡
1号土壙
5号土壙
天地がえしの撹乱
D E F
A B C
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
4号溝
11号住居跡
10号住居跡
12m
11m
10m
9m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
XIII
XVI
0
20m

第４図　遺構配置図




第５図　礫層平面図

程もあり、底面から約33°で立ち上がる。底面には恒常的な水流による堆積土の状況が認められないことから、持続的な河川ではなく一時的な、激しい水流によって形成された可能性がある。(注１)

注１）東北大学理学部　松本秀明氏の御教示による。

## B．古墳～平安時代の遺構と遺物

### 竪穴住居跡

#### 14号住居跡

〔遺構の確認〕　B.C－28～30グリットの第Ⅲ層（褐色シルト層）

〔重複・増改築〕　小ピットで東側コーナーの一部が、切られている。

〔平面形・規模〕　長軸3.7m、短軸3.4mの長方形を呈する。また、西側コーナーが、調査区を拡張した際に打ち込んだシートパイルによって切られた。長軸方向はN(真北)－32°－Wである。

〔堆積土〕　4層に大別される。

1層（褐色シルト層）　最上層である。住居跡の全体に分布し、炭化物を少量含んでいる。

2層（暗褐色粘土質シルト層）　住居跡全体に分布しているが、炉跡の西側においては炭化物を多量に含んでいる。

3層（黒褐色粘土質シルト層）　住居跡床面を覆うほぼ全体に分布しており、炭化物を多量に含み、中には炭化材も見られる。また南側の一部は多量の焼土粒を含んでいる。

4層（褐色シルト層）　住居跡南壁際にわずかに分布しており、炭化物を少量含んでいる。

〔壁〕　第Ⅳ層を壁としている。壁は西コーナーが、シートパイルのため破壊され、東、南コーナー付近が、攪乱、ピットのため壁上部が、削平されている以外は良好に残存している。壁高は北壁22cm、南壁24cm、東壁26cm、西壁30cmを測り、床面から110°前後で立ち上がる。

〔床面〕　床面には貼り床はなく、ほぼ平坦で比較的堅くなっている。床面上には薄く炭化層が見られ、炭化材も一部検出された。

〔柱穴〕　ピットは床面上より、10個検出された。その中でも柱穴と考えられるものは$P_1$、$P_5$、$P_{13}$、$P_{10}$であるが、住居跡のコーナー付近ではなく壁の中央部に位置するものが多い。よって柱穴と断定できるまでには至らなかった。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔炉〕　炉は住居跡中央部に位置する長軸172cm、短軸114cmの地床炉である。炉の中央部は非常に強く火熱を受け、明赤褐色に焼けており、その周辺は極暗赤褐色に焼けている。炉の中心よりやや南側にピットが1個検出され、土器を置いたピットの可能性がある。

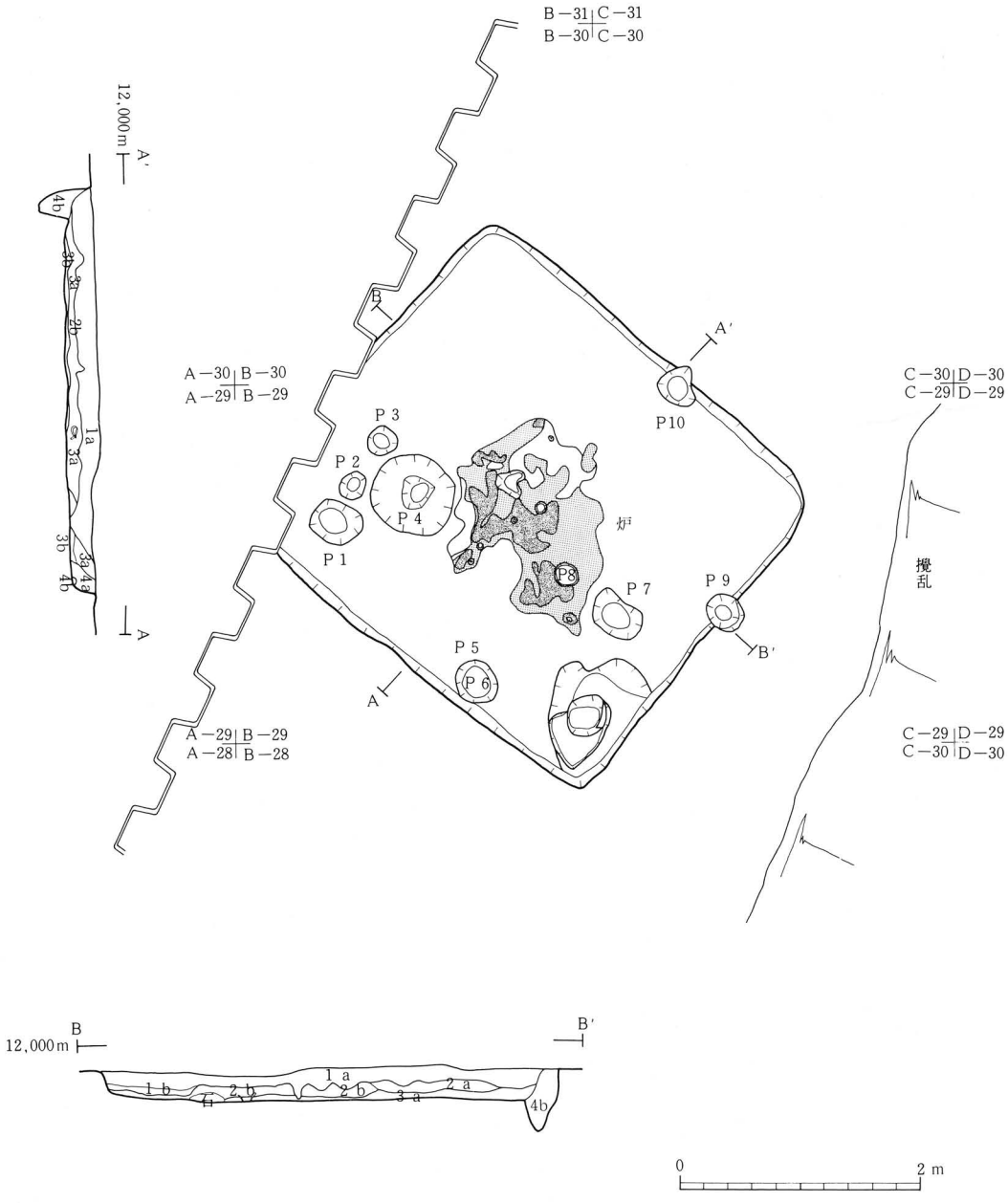
〔遺物の出土状況〕　遺物は炉を中心に北、東、南側に集中して出土している。（第7図）

#### 8号住居跡

〔遺構の確認〕　F～H－22～25グリットの第Ⅳ層（暗褐色シルト層）

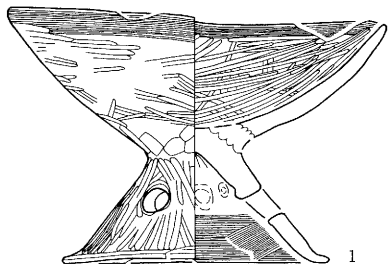
〔重複・増改築〕　認められなかった。

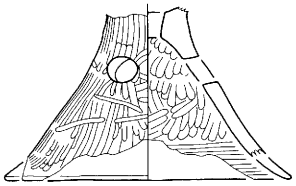
〔平面形・規模〕　長軸6.0m、短軸5.5mの長方形を呈する。住居跡は全体の規模を推定できる程度残存しているが、北コーナーの一部と西コーナーからカマドを含め、中心部の西側まで

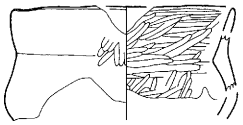


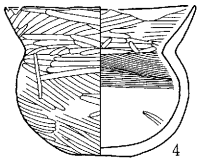

| 層位 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 a | 10ＹＲ¾褐色 | シルト | 炭化物を少量含む |
| b | 10ＹＲ¾褐色 | シルト | 炭化物を少量含む |
| 2 a | 10ＹＲ⅜暗褐色 | 粘土質シルト | 焼土粒、炭化物を含む |
| b | 10ＹＲ⅜暗褐色 | 粘土質シルト | 炭化物を多量含む |
| 3 a | 10ＹＲ⅜黒褐色 | 粘土質シルト | 焼土粒を少量含む、炭化物を多量含む |
| b | 10ＹＲ⅜黒褐色 | 粘土質シルト | 炭化物、焼土粒を多量含む |
| 4 a | 10ＹＲ¾褐色 | シルト | 10ＹＲ⅚褐灰色土を斑点状に含む、炭化物を含む |
| b | 10ＹＲ¾褐色 | 粘土質シルト | 炭化物を含む |

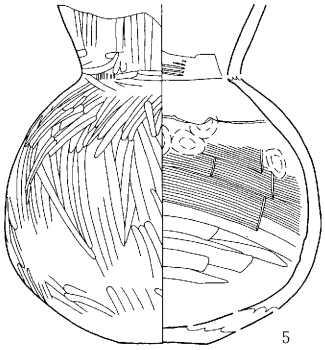
第６図　14号住居跡実測図

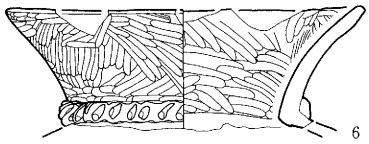

1

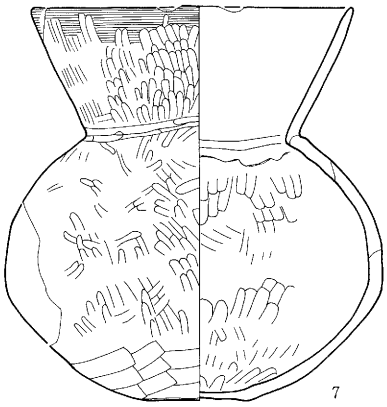

2

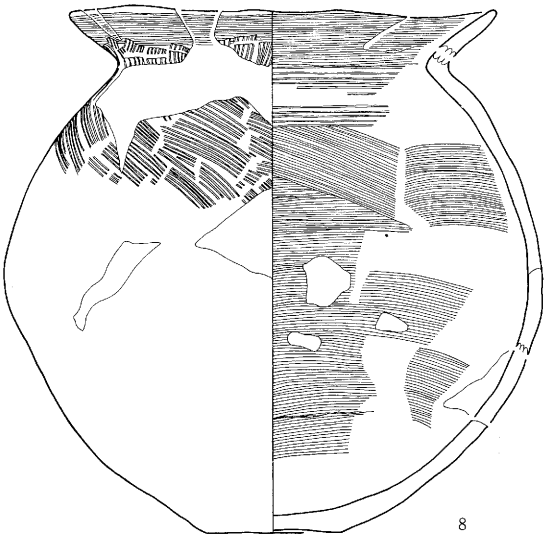

3


4

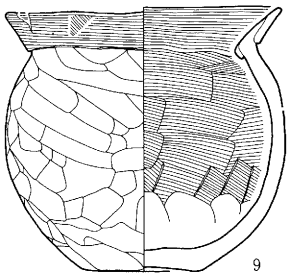

5


6


7

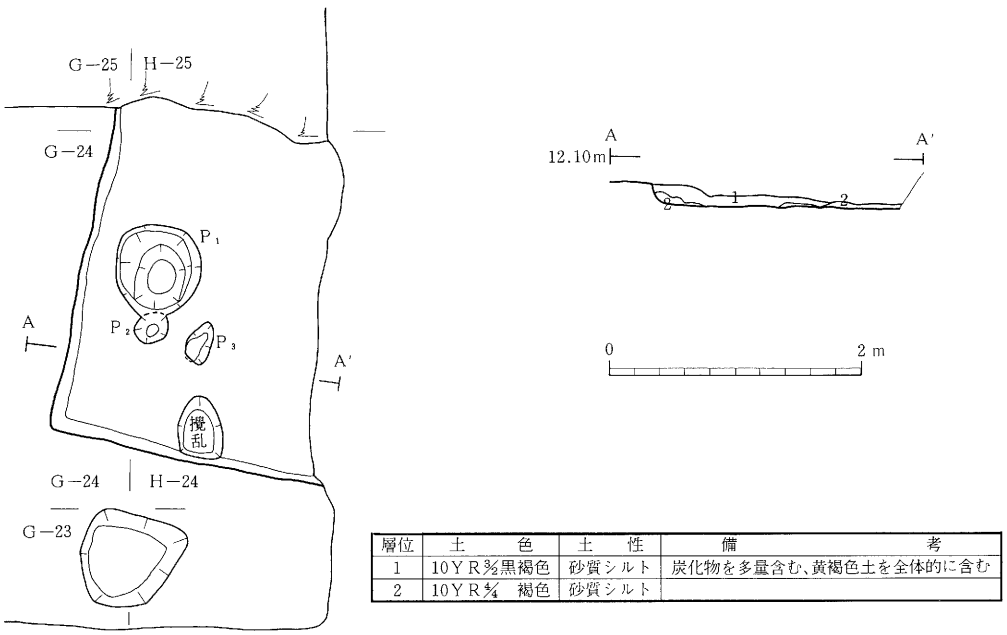

8

0 10cm


9

| 番号 | 遺構 | 種類 | 器種 | 外面調整 | 内面調整 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 14住 床面 | 土師器 | 高坏 | ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、丹塗り | ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ、坏部丹塗り |
| 2 | 14住 2層 | 土師器 | 器台 | ナデ、ヘラミガキ | ナデ、ヘラミガキ |
| 3 | 14住 床直 | 土師器 | 坏 | ミガキ、丹塗り | ミガキ、丹塗り |
| 4 | 14住 床直 | 土師器 | 小形壺 | ヘラミガキ | ヘラミガキ、ヘラナデ |
| 5 | 14住 床直 | 土師器 | 壺 | ハケメ、ヘラミガキ | ハケメ、ヘラナデ、ナデ |
| 6 | 14住 床直 | 土師器 | 壺 | ヘラミガキ、頸部突帯 | ヘラミガキ |
| 7 | 14住3層、8号土壙 | 土師器 | 壺 | ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ | ヘラミガキ |
| 8 | 14住 2層 | 土師器 | 甕 | ヨコナデ、ハケメ、体部中央から底部摩滅 | ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ |
| 9 | 14住床直、8号土壙 | 土師器 | 甕 | ヨコナデ、ナデ、ケズリ | ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ |

第7図　出土遺物(1)




| 層位 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10ＹＲ3/3黒褐色 | 砂質シルト | 炭化物を多量含む、黄褐色土を全体的に含む |
| 2 | 10ＹＲ5/4　褐色 | 砂質シルト | |

第８図　７号住居跡実測図

撹乱で破壊されており、住居跡の遺存状況はかなり悪い。長軸方向はN（真北）－37°－W である。

〔堆積土〕　７層に大別される。

１層（褐色砂質シルト層）　最上層である。住居跡全体に分布し、炭化物を少量含んでいる。また煙道堆積土１層でもある。

２層（黒褐色砂質シルト層）　多量に焼土、炭化物を含む。煙道堆積土２層でもある。

３層（褐色砂質シルト層）　北壁カマド袖の付近に分布し、少量の炭化物と焼土を含む。

４層（褐色砂質シルト層）　多量に焼土、炭化物を含みカマド袖構築土と考えられる。

5a層（褐色砂質シルト層）　住居跡全体に分布し、一部はカマド内にも堆積している。

5b層（褐色砂質シルト層）　焼土、炭化物を含みカマド袖構築土と考えられる。

６層（黒褐色砂質シルト層）　カマド袖東側にわずかに分布し、焼土、炭化物を全体的に多量に含む。

７層（褐色砂質シルト層）　カマド袖東側にわずかに分布し、１㎜～２㎜の砂粒を少量含む。

〔壁〕　壁は北コーナーと西コーナーが撹乱のため破壊されている。壁高は北壁30.5cm、南壁９cm、東壁10cm、西壁２cmを測る。

〔床面〕　床面には貼り床は認められず、ほぼ平坦であるが、残存している南コーナー付近の一部を除き堅くしまっている。

〔柱穴〕　ピットは床面上から$P_1$～$P_4$の４個検出されている。その内$P_2$～$P_4$は攪乱を受け全体を確認するまでには至らなかったが、位置、深さの点から$P_1$と$P_2$は柱穴と考えられる。

〔周溝〕　周溝は南壁、東壁、西壁で確認され、幅は12cm～43cmを測る。床面からの深さは15cm前後である。また東壁から$P_1$に達する溝が確認された。

〔カマド〕　北壁中央部に付設されているが、攪乱によって燃焼部の全部と煙道の一部が破壊されている。残存しているのはカマド東側袖の一部と煙道部だけである。煙道部の底面は殆ど水平で、煙出し部で少しくぼみ、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁からの長さは80cmを測る。カマド袖は２種の褐色土を積み上げ構築している。

〔遺物の出土状況〕　カマド袖付近から東側にかけて土師器甕が出土している。(第11図１、２)

**７号住居跡**

〔遺構の確認〕　G･H－24・25グリットの第Ⅲ層（褐色シルト層）

〔重複・増改築〕　認められなかった。

〔平面形・規模〕　北側が攪乱で破壊され、東側が調査区外へ延びているため全体の規模は不明である。現存する規模は東西2.2m、南北2.8m を測る。

〔堆積土〕　２層に大別される。

１層（黒褐色砂質シルト層）　住居跡全体に分布する。黄褐色土粒を全体的に疎らに含み、炭化物を多く含む。

２層（褐色砂質シルト層）　西側壁際と東側の一部に分布している。

〔壁〕　壁は攪乱と調査区外のため西壁と南壁のそれぞれ一部を検出できただけである。壁高は東壁16cm、西壁20cmを測り、床面から10°前後で立ち上がる。

〔床面〕　床面には貼り床は認められず、全体にほぼ平坦で比較的堅くなっている。

〔柱穴〕　ピットは床面から$P_1$～$P_3$の３個が検出された。その中でも掘り方が認められた$P_1$が柱穴の可能性が高い。

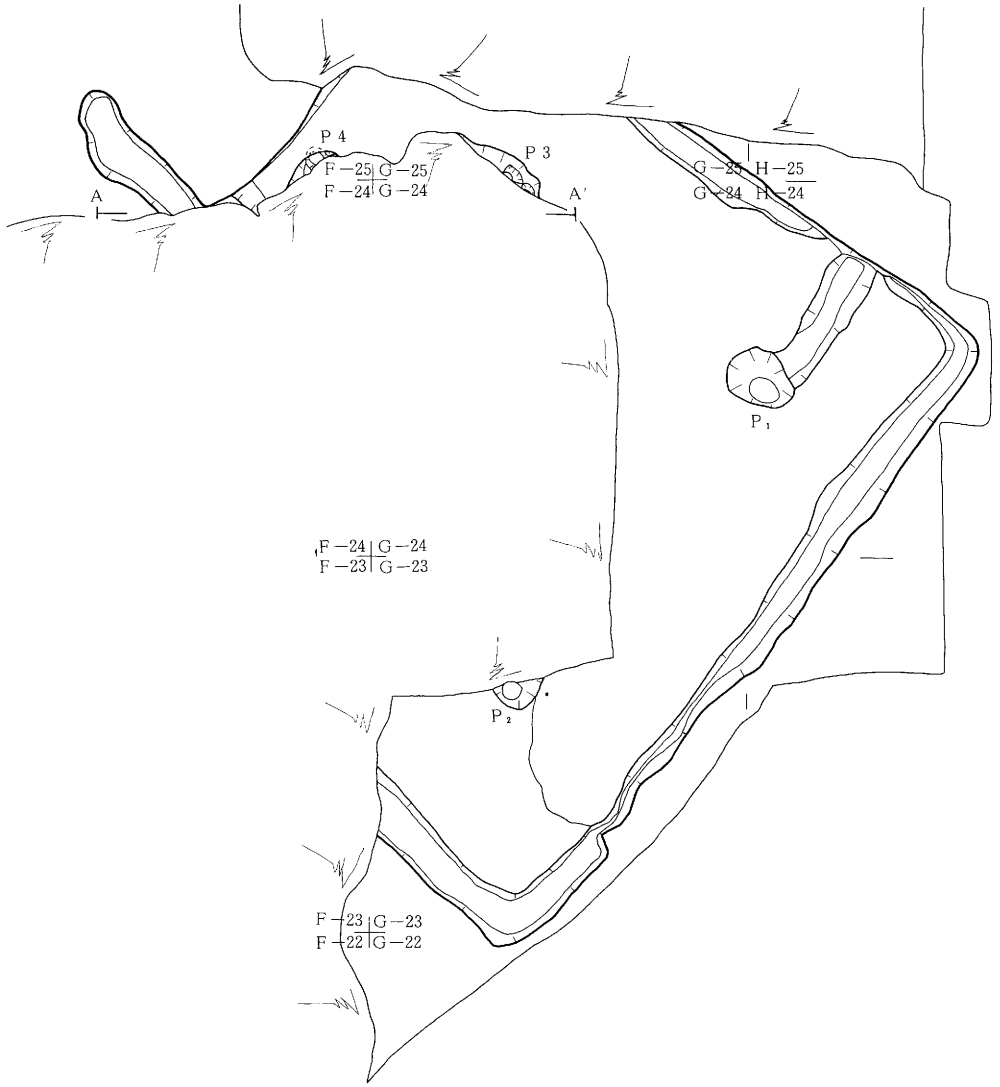
〔周溝〕　検出されなかった。

〔カマド〕　調査範囲内においては検出されなかった。

〔遺物の出土状況〕　床面の$P_3$から土師器甕が出土している。(第11図３)

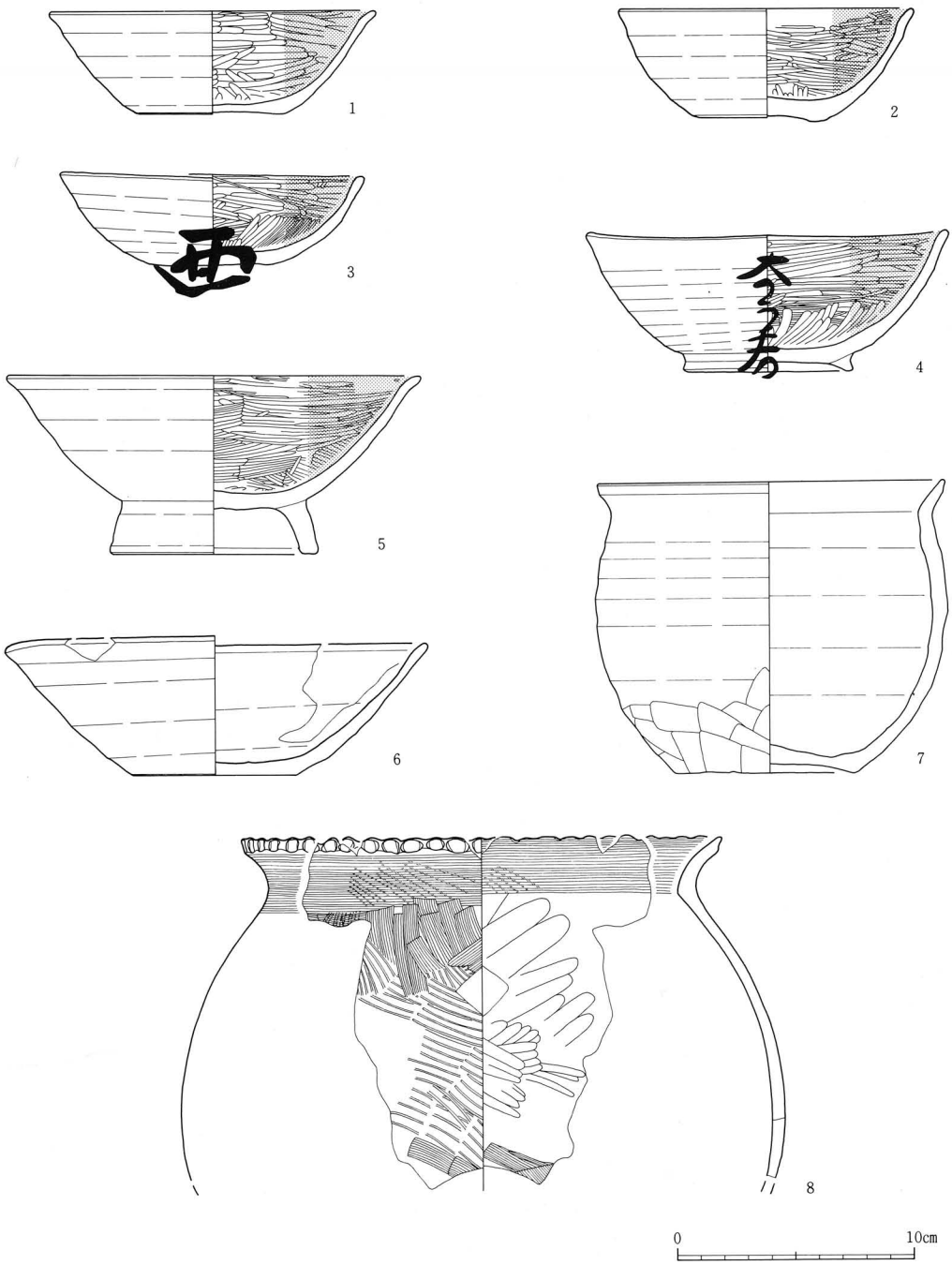
**４．まとめ**

今年度の調査では、縄文時代の遺物包含層、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、河川跡、溝跡、ピット等が検出された。竪穴住居跡は14軒検出され、中でも14号住居跡は塩釜式のまとまった資料が出土した。また縄文時代の遺物包含層からは後期中葉（宝ケ峯式）の土器が多数出土しており、来年度の調査が期待される。



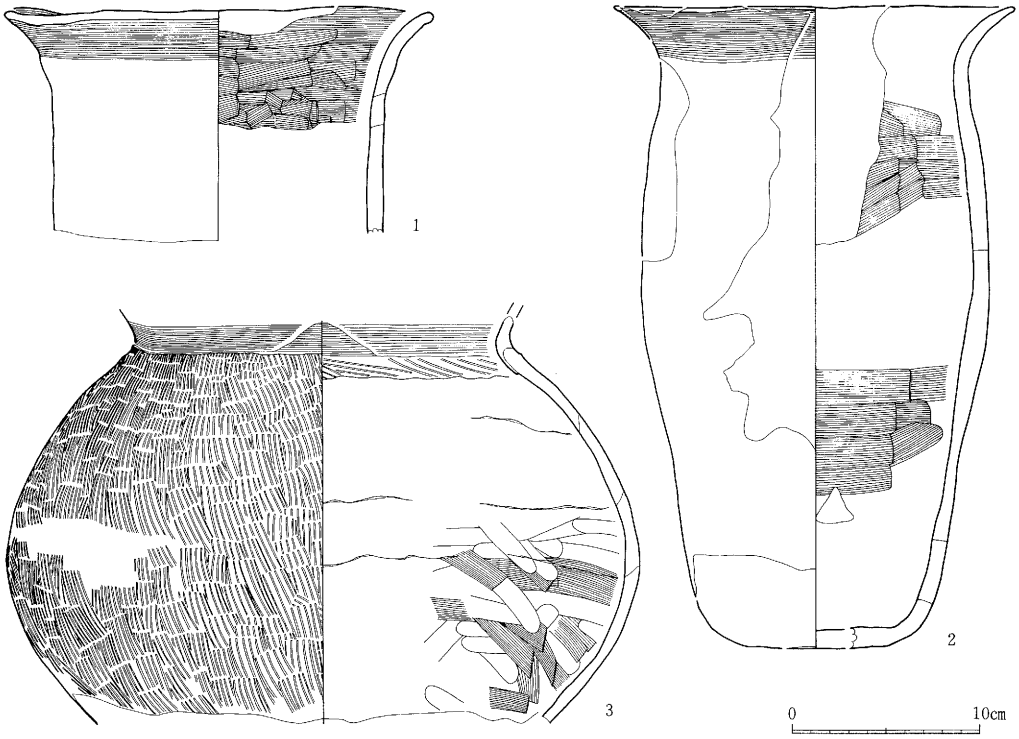

| 層位 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR ¾ 褐色 | 砂質シルト | 炭化物を少量含む |
| 2 | 7.5YR⅔黒褐色 | 砂質シルト | 焼土粘を含む、炭化物を多量含む |
| 3 | 10YR ¾ 褐色 | 砂質シルト | 炭化物、焼土粒を少量含む |
| 4 | 7.5YR¾ 褐色 | 砂質シルト | 炭化物、焼土粒を多量含む |
| 5 a | 10YR ¾ 褐色 | 砂質シルト | |
| b | 10YR ¾ 褐色 | 砂質シルト | 炭化物、焼土粒を含む |
| 6 | 7.5YR⅔黒褐色 | 砂質シルト | 炭化物、焼土粒を多量含む |
| 7 | 10YR ¾ 褐色 | 砂質シルト | 砂礫粒を少量含む |

第９図　８号住居跡実測図

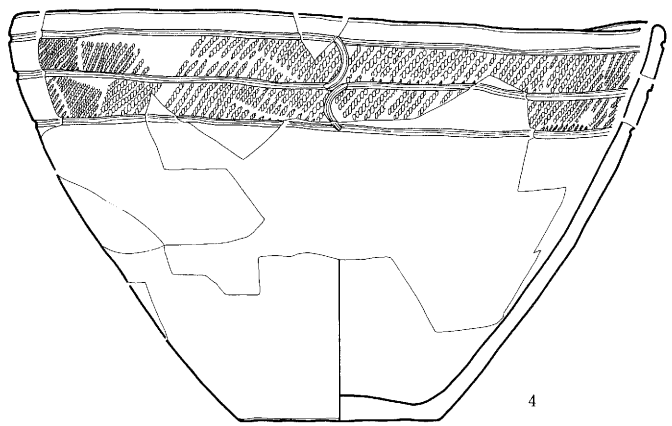



| 番号 | 遺　　構 | 種　類 | 器種 | 外　面　調　整 | 内　面　調　整 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3住　　P1 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ　　回転糸切り | ヘラミガキ |
| 2 | 16号　土　壙 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ　　回転糸切り | ヘラミガキ |
| 3 | 4号溝中央床面 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ　　回転糸切り | ヘラミガキ |
| 4 | 4号溝　8b層 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り、付高台 | ヘラミガキ |
| 5 | 11住　　床面 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ　　付高台 | ヘラミガキ |
| 6 | 11住 | 赤焼土器 | 坏 | ロクロナデ　　回転糸切り | ロクロナデ |
| 7 | 11住　　床面 | 土師器 | 甕 | ロクロナデ、ヘラケズリ、回転糸切り | ロクロナデ |
| 8 | 8住　　1層 | 土師器 | 甕 | ハケメ、ヨコナデ、ヘラナデ、棒状工具による押圧 | ハケメ、ヨコナテ、ヘラミガキ、ナデ |

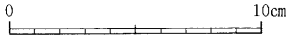
第10図　出土遺物(2)




| 番号 | 遺　構 | 種　類 | 器種 | 外面調整 | 内　面　調　整 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 8 住 | 土師器 | 甕 | ヨコナデ | ヘラナデ |
| 2 | 8 住 床　面 | 土師器 | 甕 | ヨコナデ | ヘラナデ |
| 3 | 7住床面Ｐ３ | 土師器 | 甕 | ヨコナデ、ハケメ | ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ、指ナデ |



| 番号 | 遺　構 | 種　類 | 器　種 |
|---|---|---|---|
| 4 | 包含層 | 縄文土器 | 浅　鉢 |
| 外　面　調　整 | | | 内面調整 |
| ＬＲ縄文、沈線、横位・斜位調整、綱代痕 | | | 横位・斜位調整 |




第11図　出土遺物(3)

写真１　調査区全景
（古墳～平安時代）
（北→南）

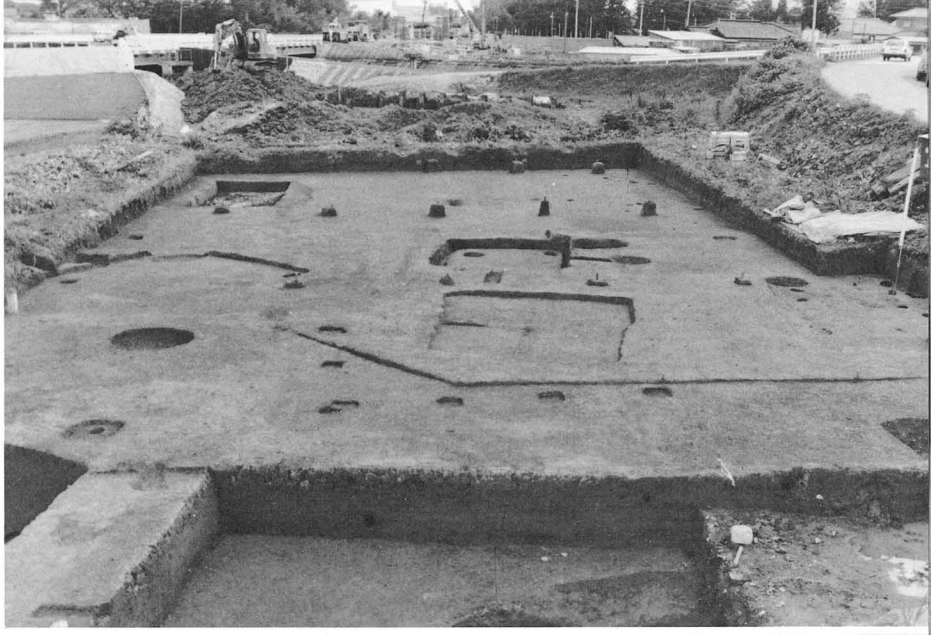


写真２　１号住居跡全景
（東→西）

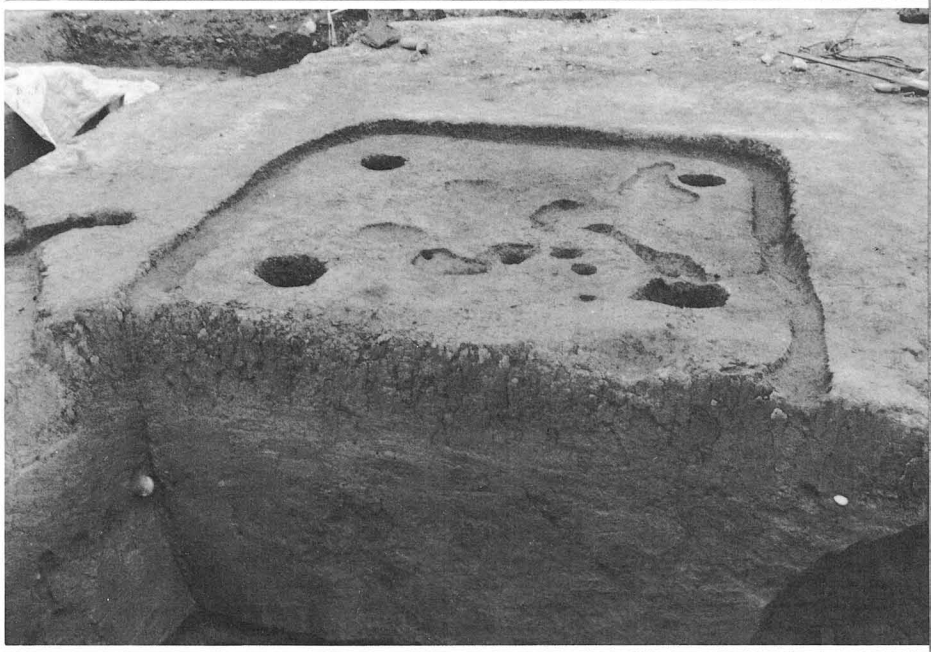


写真３　５号住居跡全景
（南→北）

写真 4　6 号住居跡全景
（南→北）

写真 5　7 号住居跡全景
（南→北）

写真 6　8 号住居跡全景
（南西→北東）

写真７　10・11号住居跡全景
（北→南）

写真８　10号住居跡全景
（西→東）

写真９　12号住居跡全景
（東→西）

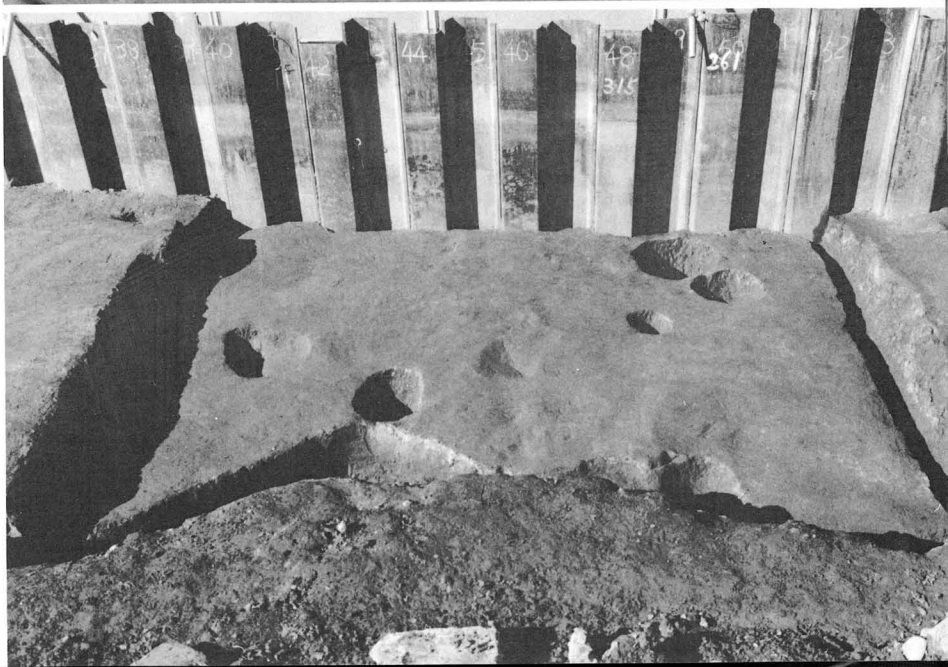


写真10　14号住居跡全景
（南→北）

写真11　8号土壙遺物
出土状況
（西→東）

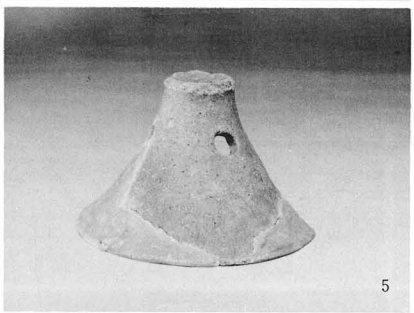
写真12　礫層検出状況
（西→東）

1

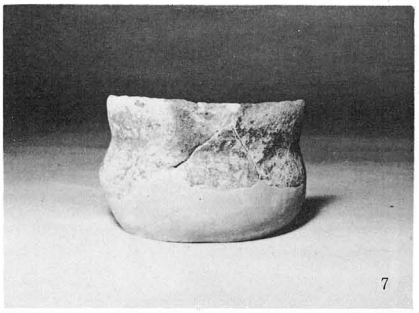
2

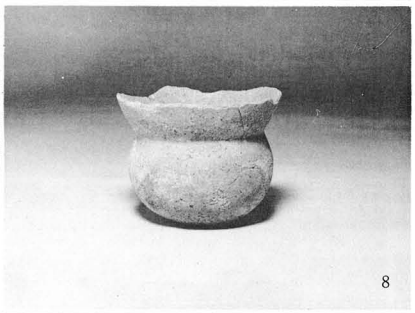
3

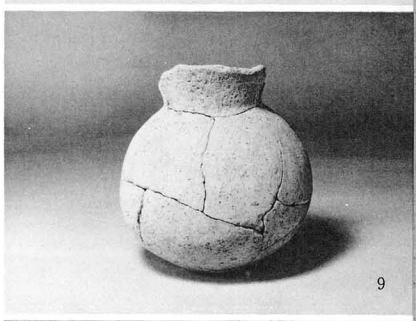
4


5

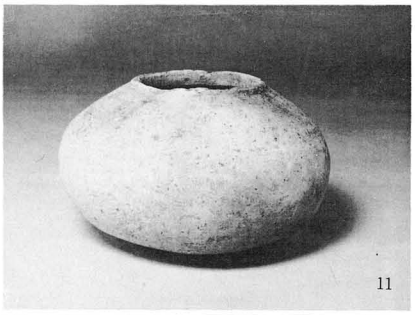
6


7

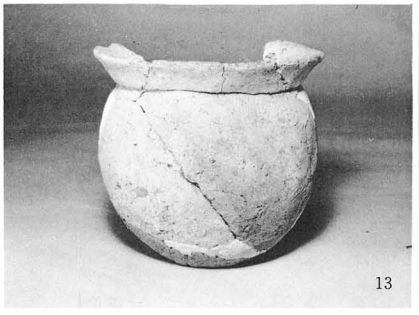

8

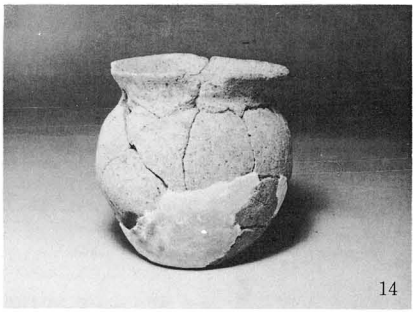

9

10

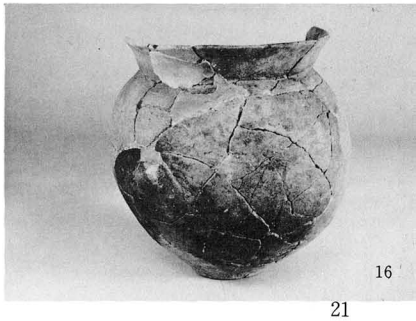

11

12


13


14

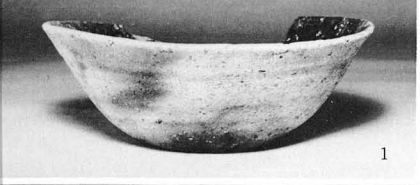
15

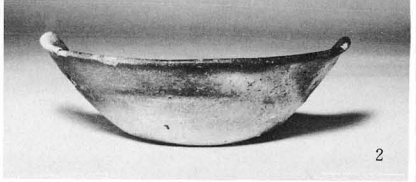

16

1～3……5号住居跡　　4・5・7～9・11・12・15……14号住居跡

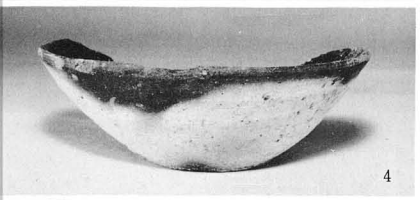
10・13……14号住居跡・8号土壙　　6・14・16……8号土壙

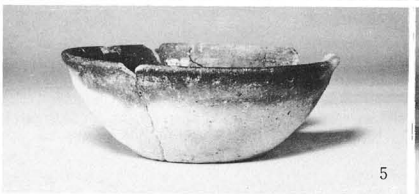
写真13　出土遺物（1）
（土師器）


1

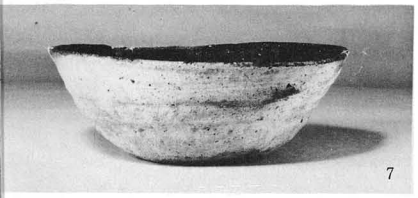

2

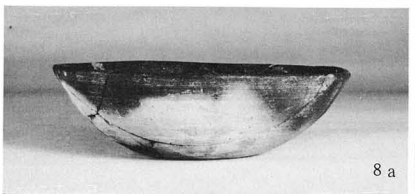
3

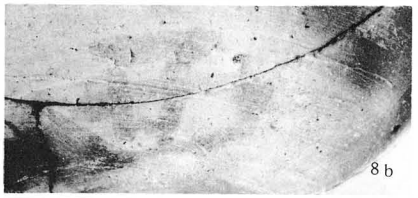

4


5

6


7

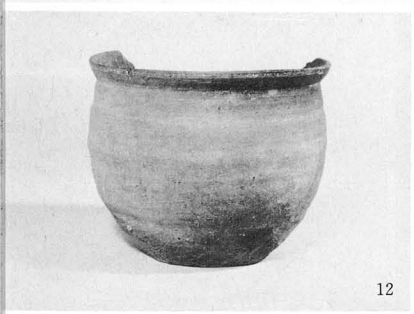

8 a


8 b

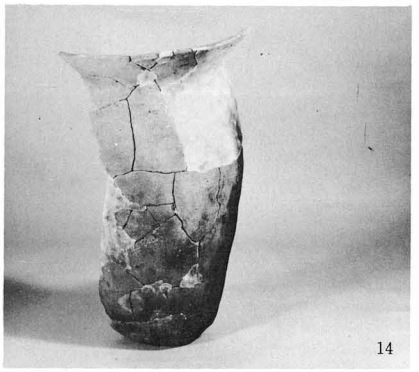
9

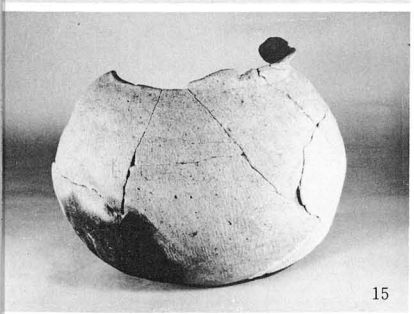
10

11


12

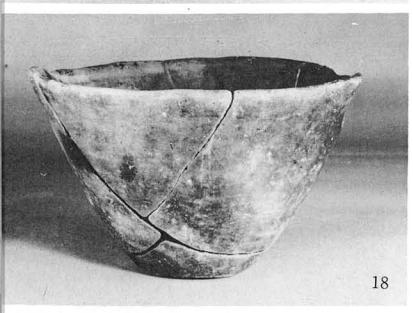
13


14


15

16

17


18

1 ・ 2……3 号住居跡(土師器)
3 ・11・12……11号住居跡(土師器)
4 ……13号住居跡(土師器)
5 ……16号土壙(土師器)
6 ～ 9 ……4 号溝(土師器)
10……11号住居跡(赤焼土器)
13～15……7 ・ 8 号住居跡(土師器)
16……礫層上面(縄文土器)
17・18……遺物包含層(縄文土器)

写真14　出土遺物 (2)

# Ⅳ．下ノ内遺跡（C－299）

## １．調査の方法

３×３ｍのグリッドを基本とし、Ⅱ区は、東西にＡ～Ｊ、南北に１～22、Ⅲ区はⅡ区の南側に位置し、東西にＡ～Ｈ、南北に１～11グリッド、Ⅳ区はⅡ区の北側に接続して東西にＡ～Ｇ、南北に１～15グリッドを設定して調査を実施した。（第12図）

## ２．調査の概要

調査はⅡ～Ⅳ区であるが、Ⅳ区だけ第Ⅵ層上面までの調査で、それ以下は次年度の調査となった。各地区で発見された遺構は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡４棟、小溝状遺構、土壙などがある。（第13図）

### 竪穴住居跡

古墳時代の住居跡２軒(13・16号)、奈良時代の住居跡３軒(11・19・21号)、平安時代の住居跡６軒(12・14・15・17・18・20号)を調査したが、調査区外にのびる５軒の住居跡は完掘できなかった。

**12号住居跡**（第14図、写真18～20）

〔遺構の確認〕　Ⅱ区Ｃ～Ｅ－15～17グリッドの第Ⅴ層上面で検出された。

〔重複・増改築〕　９号河川跡に住居跡の上面が削られている。煙道が２本検出され、カマドの改築が認められる。

〔平面形・規模〕　東西5.2m、南北5.4mの方形を呈する。主軸方向はN－41°－Eである。

〔堆積土〕　４層に大別され、黒褐色・暗褐色の粘土質シルトがレンズ状に堆積する。床面中央部は焼土を混入する粘土質シルトが覆っている。

〔壁〕　第Ⅴ・第Ⅵ層を壁としており、周溝底面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約30～40cmである。

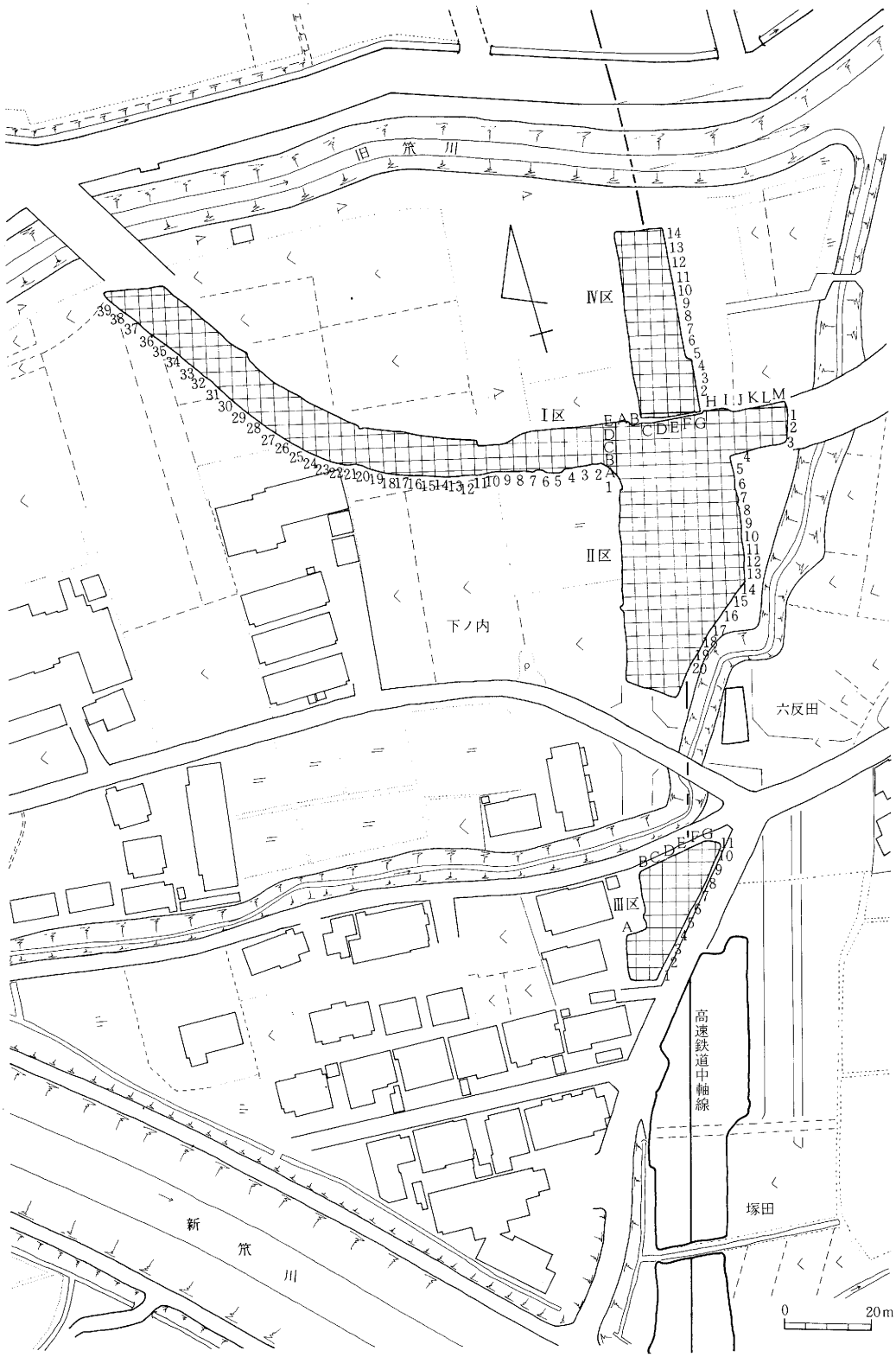
〔床面〕　床面は貼床で、非常に堅く平坦である。特にカマド周辺及び中央部は顕著である。

〔柱穴〕　床面上及び掘り方より24個のピットが検出された。主柱穴は$P_1$～$P_4$の４個で柱痕跡は直径約20cmの円形である。また、東・西・北壁に２個、南壁に４個の壁柱穴が検出されている。

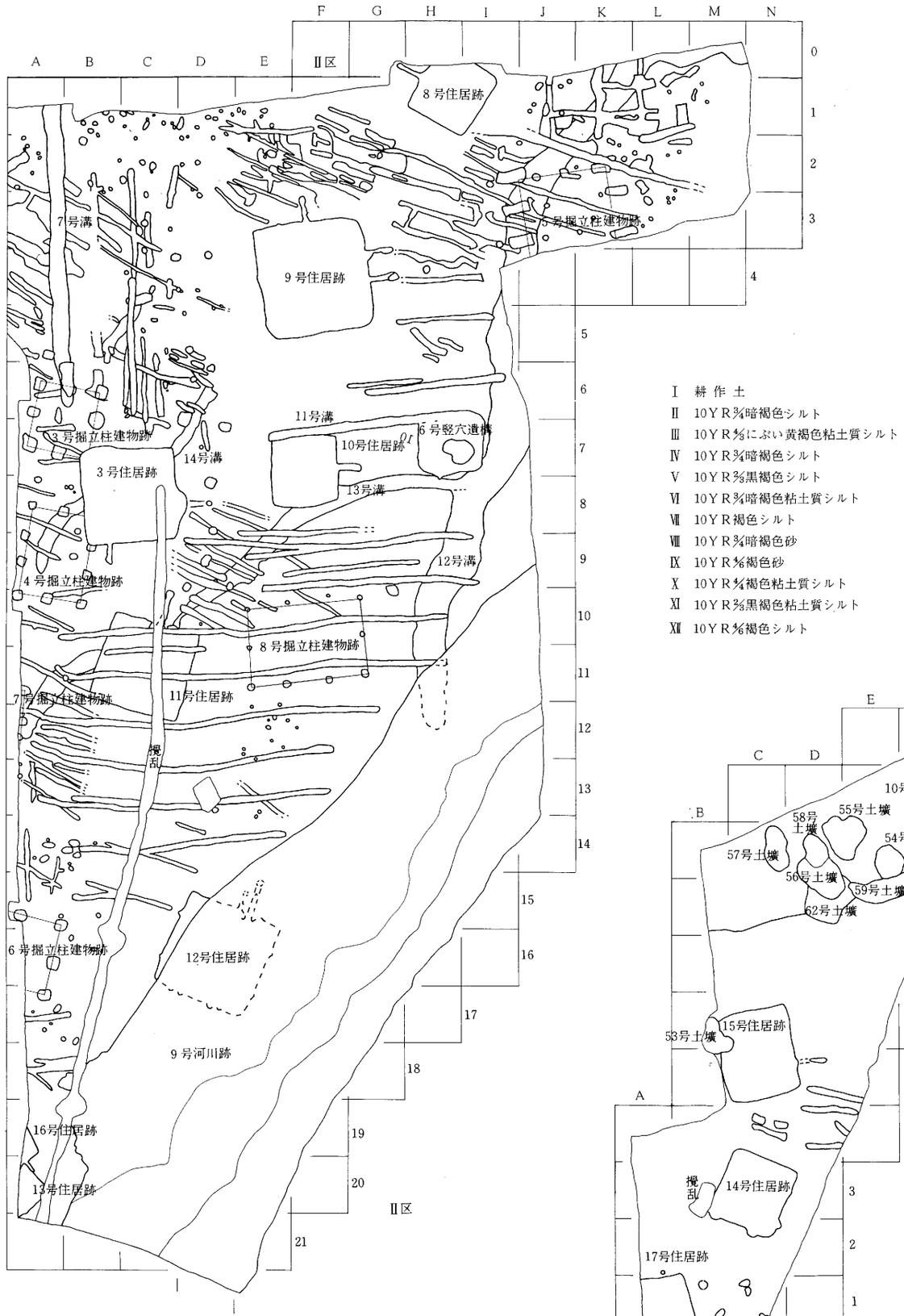
〔周溝〕　カマドを除き、各辺に幅12～20cm、深さ約15cmでめぐっている。

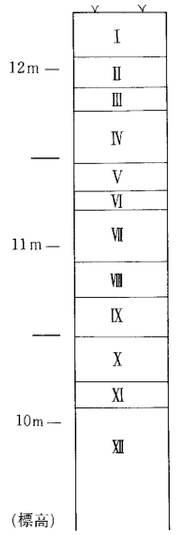
〔カマド〕　北壁中央部と東隣に新旧２基がある。

新カマドは全長2.75mで燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は長さ90cm、幅95cmで、シルトを積み上げて袖部としている。袖の規模は、左袖（長さ×幅×最大高）50×35×23cm、右袖（同）45×30×20cmである。煙道部はトンネル式で、全長1.85m、幅約25cmである。先端は長さ65cm、

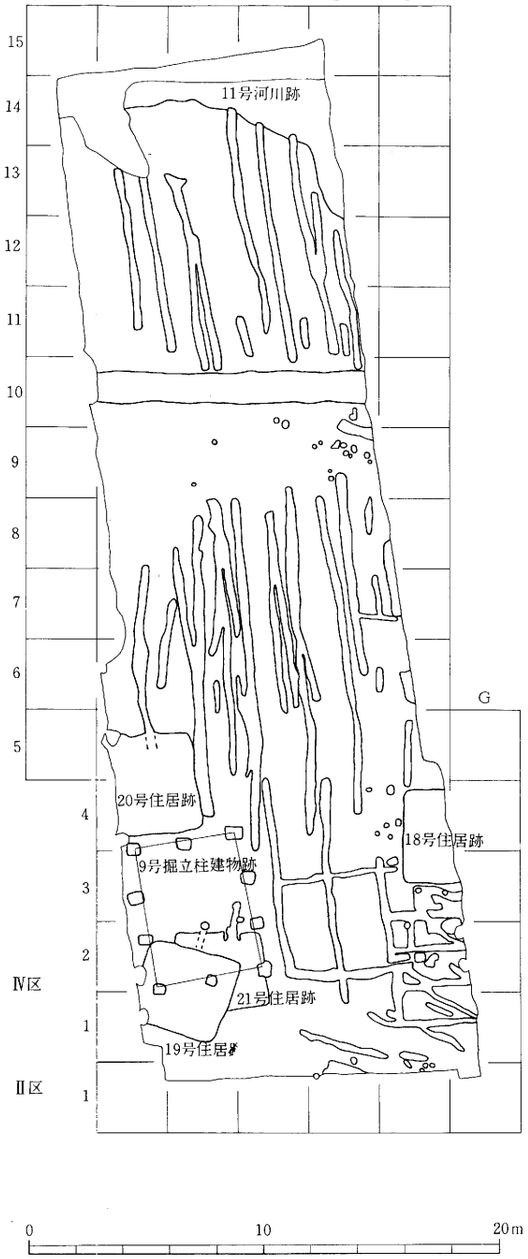


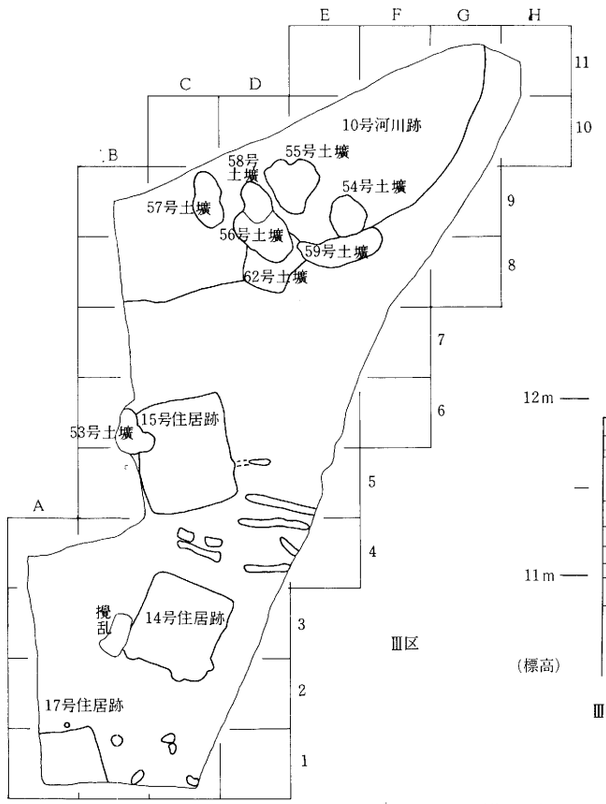

第12図　グリット配置図

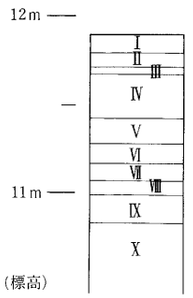



Ⅱ区 Ⅳ区基本層位図



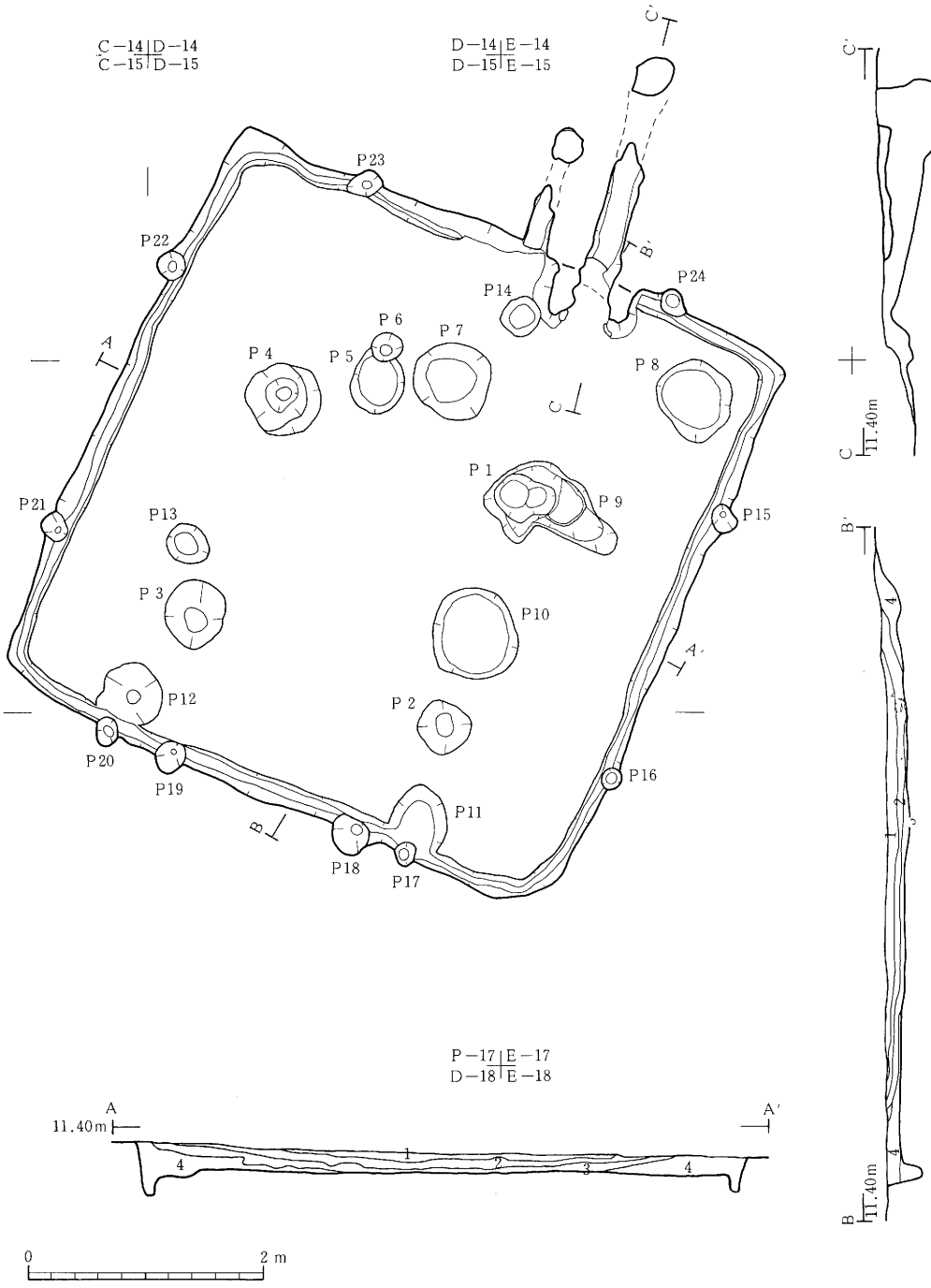




Ⅲ区基本層位図

Ⅰ 耕作土
Ⅱ 10YR⅔暗褐色シルト
Ⅲ 10YR⅔にぶい黄褐色粘土質シルト
Ⅳ 10YR⅔暗褐色シルト
Ⅴ 10YR⅔黒褐色シルト
Ⅵ 10YR⅔暗褐色粘土質シルト
Ⅶ 10YR褐色シルト
Ⅷ 10YR⅔暗褐色砂
Ⅸ 10YR⅔褐色砂
Ⅹ 10YR⅔褐色粘土質シルト
Ⅺ 10YR⅔黒褐色粘土質シルト
Ⅻ 10YR⅔褐色シルト

Ⅰ 耕作土
Ⅱ 10YR⅔にぶい黄橙色シルト
Ⅲ 10YR⅔明黄褐色シルト
Ⅳ 10YR⅔褐色シルト
Ⅴ 10YR⅔にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅵ 10YR⅔褐色砂質シルト
Ⅶ 10YR⅔褐色砂
Ⅷ 10YR⅔暗褐色粘土質シルト
Ⅸ 10YR⅔暗褐色粘土質シルト
Ⅹ 10YR⅔暗褐色粘土質シルト

第13図 遺構配置図




| 層位 | 土　　色 | 土　　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/2灰黄褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、焼土を含む |
| 2 | 10YR4/4　褐　色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガン粒、焼土を含む |
| 3 | 10YR3/4　暗褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガン粒、焼土、炭化物を含む |
| 4 | 10YR3/3　黒褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガン粒を含む、焼土、炭化物を多量に含む |

第14図　12号住居跡実測図

幅40cmのピット状の煙り出しとなる。天井部は煙道中央より煙り出しまで残存している。

旧カマドは、北壁中央部分にあり、煙道部が残っている。煙道部はトンネル式で、長さ1.05m、幅20cmで、先端は直径30cmのピット状の煙り出しとなる。天井部は一部残っている。

〔遺物の出土状況〕　カマド内及びその周辺や床面などから表杉ノ入式の土師器甕、坏、須恵器坏、鉄製品などが出土した。

**15号住居跡**（第15図、第17図7～10・13、写真22～24）

〔遺構の確認〕　Ⅲ区B～D－5・6グリッドの第Ⅲ層上面で検出された。

〔重複・増改築〕　53号土壙に切られている。

〔平面形・規模〕　東西4.7m、南北4.0mの隅丸方形で、主軸方向はE－8°－Sである。

〔堆積土〕　4層に大別され、明黄褐色シルト、褐色及び暗褐色粘土質シルトが堆積している。床面を覆っている2・3a層は焼土・炭化物を多く混入し、土器片が多く出土している。

〔壁〕　壁高は25～34cmで、床面よりやや傾斜して立ち上がる。

〔床面〕　黄褐色の砂を床面とし、中央付近にやや凹凸があるものの、ほぼ平坦である。カマド付近及び中央付近は特に堅くなっている。

〔柱穴〕　ピットは15基検出されたが、柱穴となるものは$P_8$があるだけである。その他は貯蔵穴状のピットが4基ある。

〔カマド〕　東壁中央部南寄りに付設され、全長2.2mで燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は長さ80cm、幅1.25mで、壁を30cm掘り込んで奥壁としている。袖はシルト、砂質シルトを積み上げ、石を入れている。袖の規模は左袖（長さ×幅×高さ）60×40×20cm、右袖（同）45×35×25cmである。煙道部はトンネル式で、長さ1.4m、幅27cmである。先端は長さ40cm、幅25cmのピット状の煙り出しとなる。天井部は奥壁から煙道中央まで残存している。

〔遺物の出土状況〕　カマド内及びピット、床面、堆積土から多くの表杉ノ入式の土師器坏（底部回転糸切り無調整）・甕、須恵器坏、赤焼土器坏が出土している。

**19号住居跡**（第16図、第17図4、写真26）

〔遺構の確認〕　Ⅳ区B～D－1・2グリッドの第Ⅴ層上面で検出された。

〔重複・増改築〕　21号住居跡を切り、9号掘立柱建物跡に切られている。

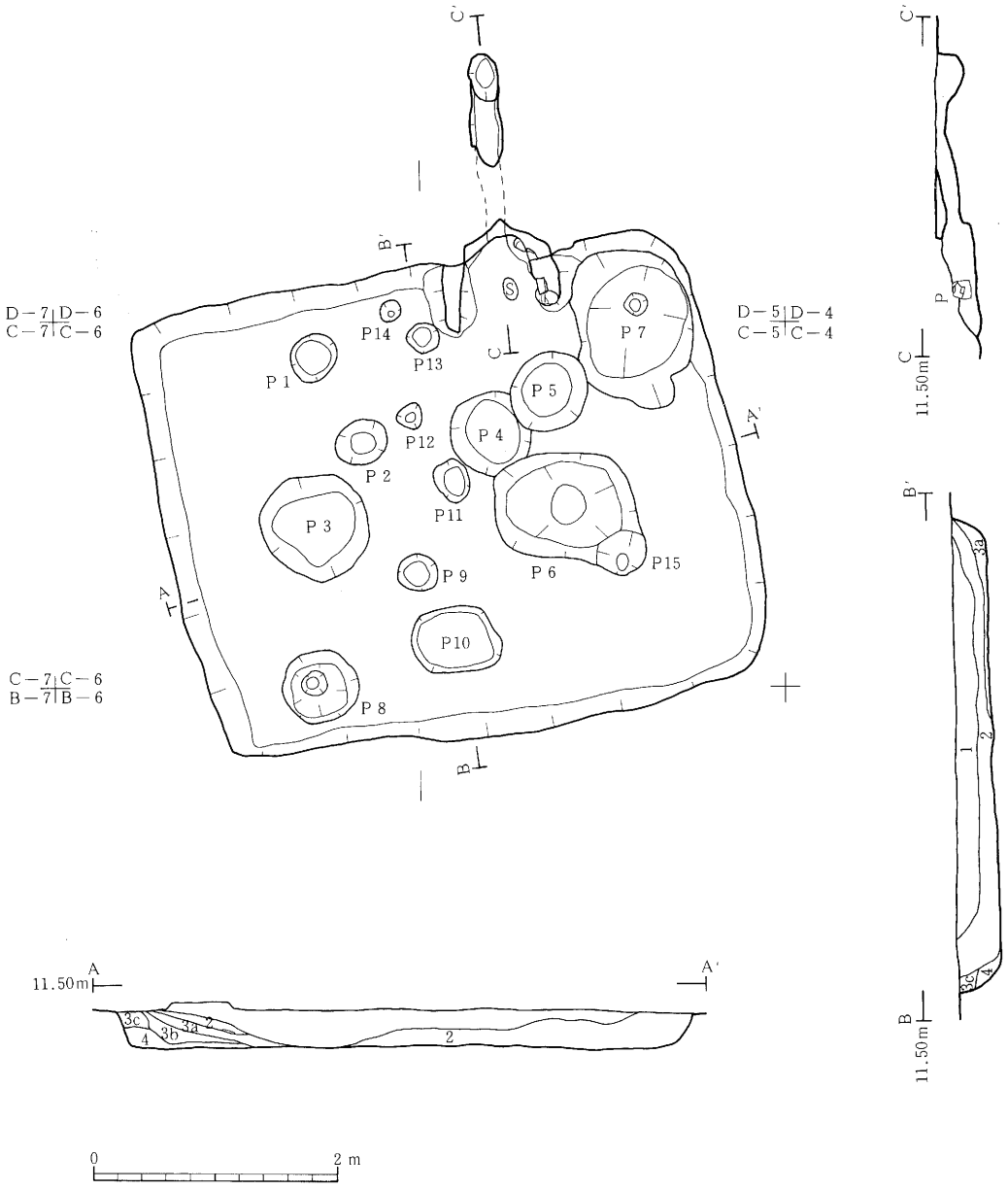
〔平面形・規模〕　東西3.5cm、南北3.5cmの方形で、主軸方向はN－37°－Eである。

〔堆積土〕　4層に分けられる。第1層は中央部に、2・3層は住居全域に、4層は床面上に薄く堆積している。

〔壁〕　第Ⅵ層を壁としており、周溝底面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は40～45cmである。

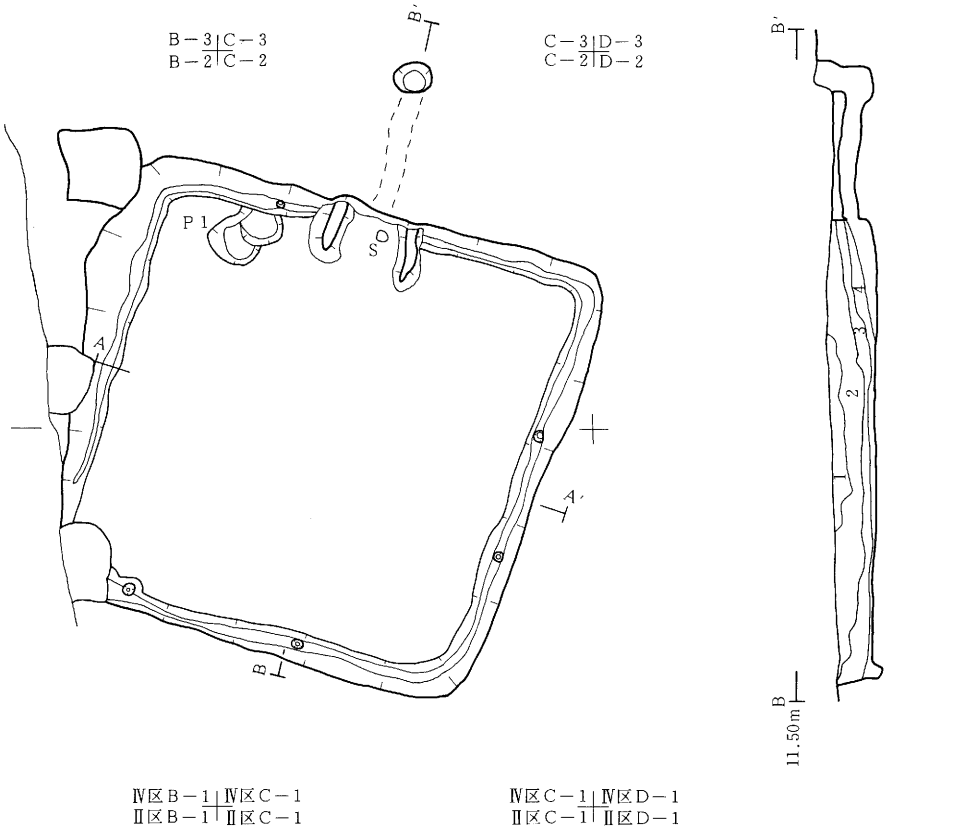
〔床面〕　床面は貼床であり、平坦である。床面上に多量の炭化物が堆積している。

〔柱穴〕　カマド袖付近に浅いピット1個が検出されただけである。柱穴は認められなかった。



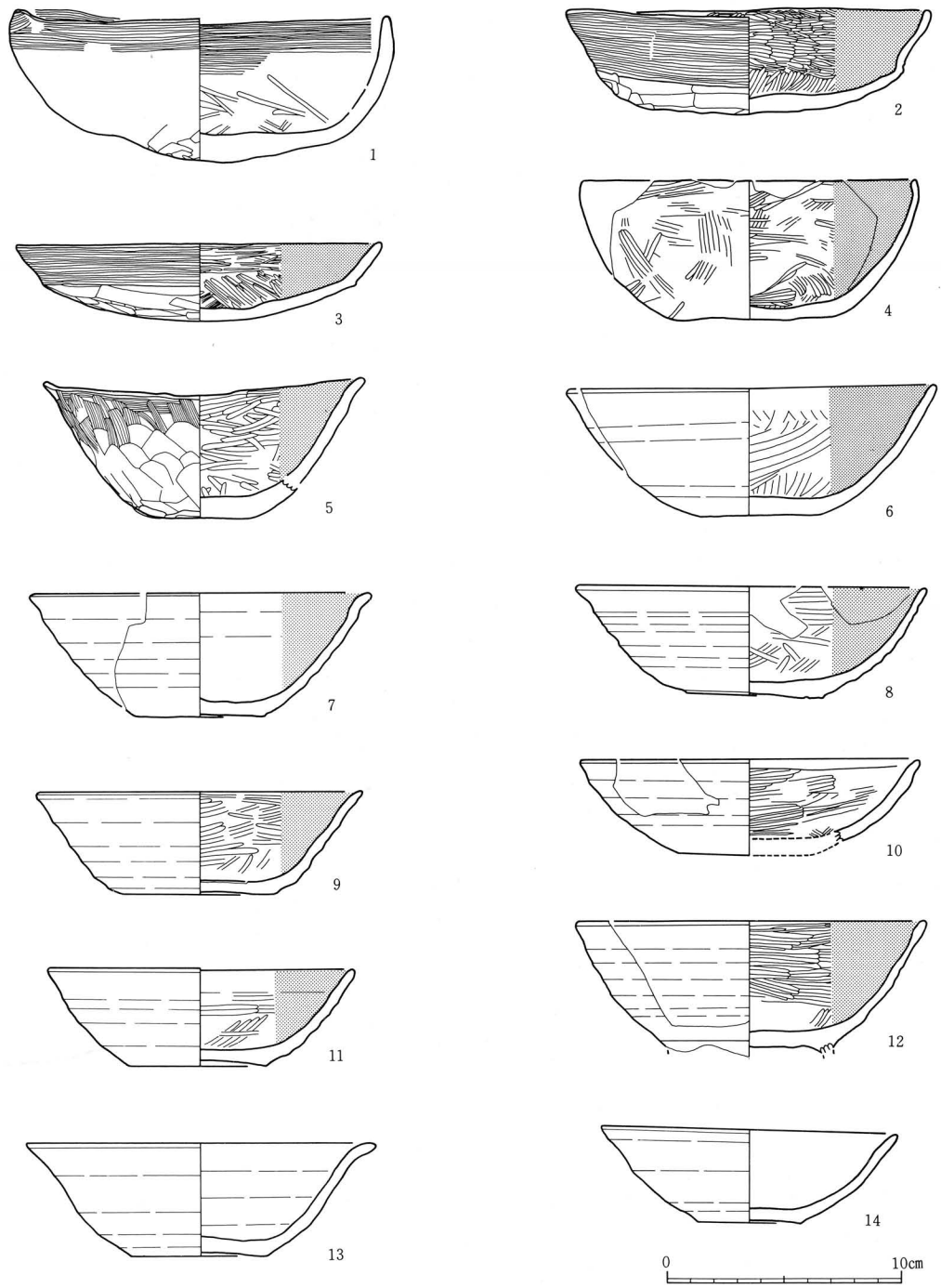

| 層位 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/6明黄褐色 | シ　ル　ト | マンガン粒を多量、土師器片を含む |
| 2 | 10YR3/4　褐　色 | 粘土質シルト | 炭化物、焼土、マンガン粒、土師器片を含む |
| 3 a | 10YR3/4　暗褐色 | 粘土質シルト | 焼土、炭化物を多量に含む |
| b | 10YR3/4　暗褐色 | 粘土質シルト | 焼土、炭化物を若干含む |
| c | 10YR3/4　暗褐色 | 粘土質シルト | 10YR5/6黒褐色土をブロック状に含む |
| 4 | 10YR4/6　褐　色 | 砂質シルト | 10YR5/1褐灰色土をブロック状に含む |

第15図　15号住居跡実測図




| 層位 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5ＹＲ3/2黒褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガン粒、土師器片を含む |
| 2 | 7.5ＹＲ3/4暗褐色 | 粘土質シルト | 粘土、10ＹＲ5/8浅黄橙色土ブロック状、土師器片を含む |
| 3 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | 粘　土 | 酸化鉄、焼土を含む |
| 4 | 10ＹＲ4/6　褐　色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、焼土を含む、炭化物を多量に含む |

第16図　19号住居跡実測図




| 番号 | 遺　構 | 種　類 | 器種 | 外　面　調　整 | 内　面　調　整 | 番号 | 遺　構 | 種　類 | 器種 | 外　面　調　整 | 内　面　調　整 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 16住カマド | 土師器 | 坏 | ヨコナデ、ヘラケズリ | ヨコナデ、ヘラミガキ | 8 | 15住　2層 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ヘラミガキ |
| 2 | 21住　3層 | 土師器 | 坏 | ヨコナデ、ヘラケズリ | ヘラミガキ | 9 | 15住　3層 | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ヘラミガキ |
| 3 | 21住カマド | 土師器 | 坏 | ヨコナデ、ヘラケズリ | ヘラミガキ | 10 | 15住カマド | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ヘラミガキ |
| 4 | 19住カマド | 土師器 | 坏 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 11 | 17住　P３ | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ロクロナデ,ヘラミガキ |
| 5 | 11住　5層 | 土師器 | 坏 | ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ | ヘラミガキ | 12 | 17住P３ | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り,付高台 | ヘラミガキ |
| 6 | 14住　P２ | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ヘラミガキ | 13 | 15住　2層 | 赤焼土器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ロクロナデ |
| 7 | 15住　P６ | 土師器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ロクロナデ | 14 | 14住　1層 | 赤焼土器 | 坏 | ロクロナデ、回転糸切り | ロクロナデ |

第17図　出土遺物

〔周溝〕　カマドの部分を除き各辺に幅約10cm、深さ約10cmでめぐる。

〔カマド〕　北壁中央部に付設され、全長1.8mで燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は長さ50cm、幅90cmで、粘土質シルトを積み上げて袖部としている。左袖（長さ×幅×高さ）50×27×14cm、右袖（同）52×21×15cmである。煙道部はトンネル式で、長さ1.3m、幅20cmで、先端部は直径50cmのピット状の煙り出しとなる。

〔遺物出土状況〕　カマド、床面より国分寺下層式の土師器坏、甕片が出土している。

**掘立柱建物跡**

4棟の建物跡が検出されたが、全体の規模がわかる建物跡は2棟（8号・9号）だけで、他は調査区外に延びる。

9号建物跡は桁行3間、梁行2間の南北棟の建物跡である。柱間寸法は桁行東辺で北より2.0＋2.0＋1.7mで総長5.7m、梁行北辺で西より2.0＋2.2mで総長4.2mである。掘り方は大きさ40～60cmの方形ないし長方形で、柱痕跡は直径15～20cmである。19・21号住居跡を切っている。

8号建物跡は桁行3間、梁行2間の東西棟の建物跡である。柱間寸法は桁行南辺で西より1.9＋2.1＋1.9mで総長5.9m、梁行西辺で2.0m等間で総長4.0mである。掘り方は大きさ20～40cmの円形で、柱痕跡は直径約15cmである。

その他の遺構としては、土壙、溝跡、小溝状遺構、河川跡などが発見された。縄文時代の遺構・遺物では、Ⅲ区第Ⅴ層で縄文土器片が少量出土しているだけで、昨年度調査で第Ⅹ～Ⅶ層から検出された遺構・遺物はほとんど検出されなかった。

9号河川跡では平安時代に降下したと考えられる灰白色火山灰のブロックが下層の堆積土に見られた。また最下層付近より土師器坏、赤焼土器坏が出土しており、平安時代の河川跡である。

**3．まとめ**

今年度の調査では、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡、小溝状遺構、河川跡などが検出された。

竪穴住居跡は11軒検出され、塩釜式期(13号)、南小泉式期(16号)、国分寺下層式期3軒（11・19・21号)、表杉ノ入式期6軒（12・14・15・17・18・20号）である。

掘立柱建物跡は4棟検出され、9号建物跡は重複関係から、国分寺下層式期の住居跡が埋没後に建てられており、平安時代の建物跡である。

写真15　Ⅱ区調査区全景
（古墳～平安時代）
（南→北）

写真16　Ⅳ区調査区全景
（北→南）

写真17　11号住居跡全景
（南→北）

写真18　12号住居跡全景
（南→北）

写真19　12号住居跡
遺物出土状況
（南→北）

写真20　12号住居跡
1号カマド
（南→北）

写真21　14号住居跡全景
（西→東）

写真22　15号住居跡全景
（北→南）

写真23　15号住居跡
遺物出土状況
（西→東）

写真24　15号住居跡カマド
(西→東)

写真25　16号住居跡全景
(北→南)

写真26　19号住居跡全景
(南→北)

写真27　20号住居跡全景
(南→北)

写真28　21号住居跡全景
(西→東)

写真29　21号住居跡
遺物出土状況
(西→東)

写真30　9号掘立柱
建物跡全景
(東→西)

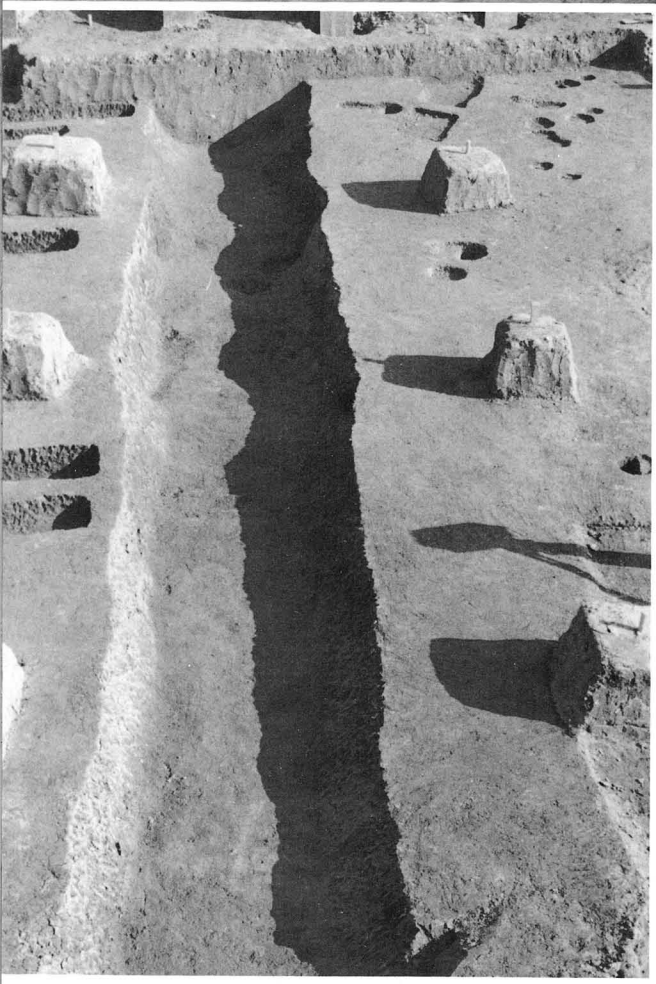
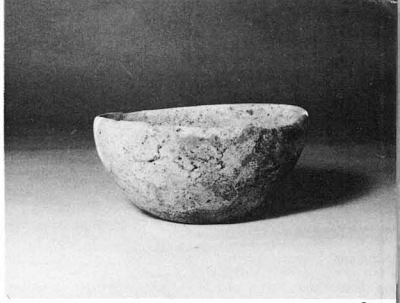


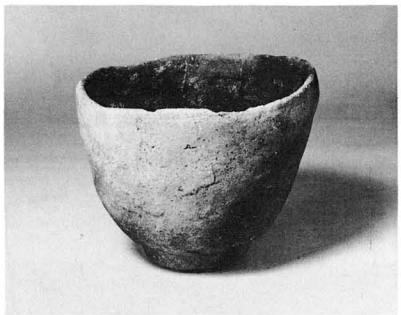
写真31　18号溝全景
(西→東)

1

2

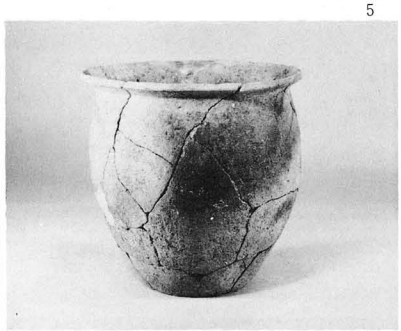

3

4


5

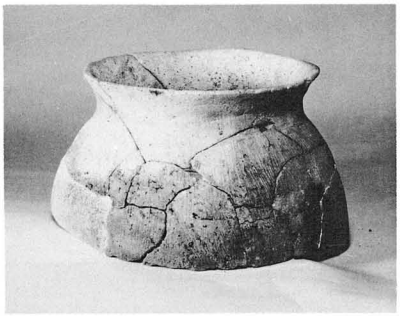
6

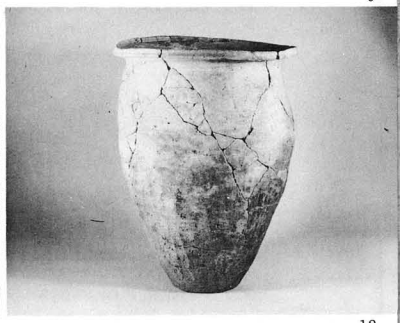
7

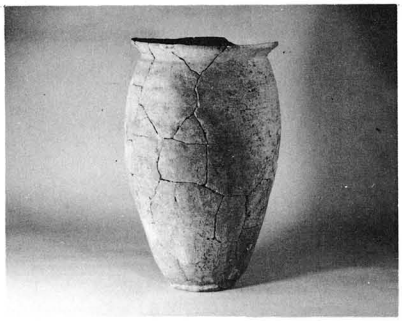

8

9

10


11


12


13

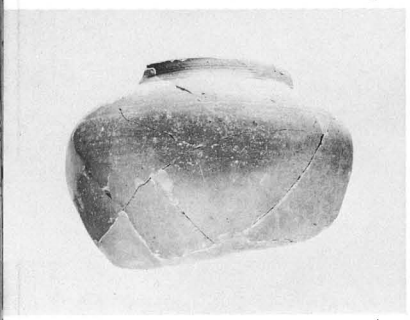
1．16号住居跡　　2．16号住居跡
3．16号住居跡　　4．16号住居跡
5．16号住居跡　　6．同左底部外面
7．16号住居跡　　8．12号住居跡
9．12号住居跡　　10．16号住居跡
11．18号溝　　12．12号住居跡
13．12号住居跡

写真32　出土遺物（1）

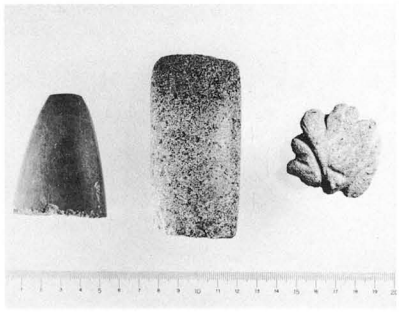
1

2

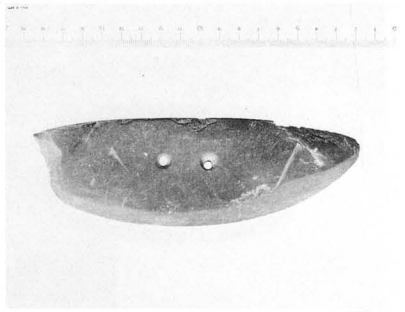
3



4

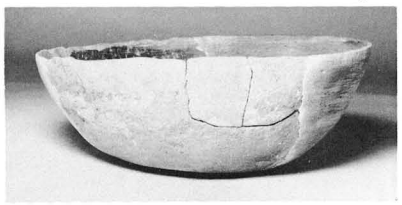


5

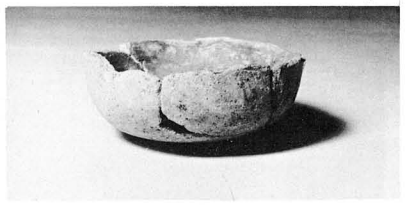


6

7

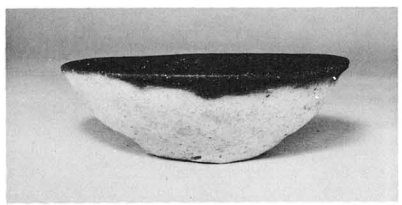


8

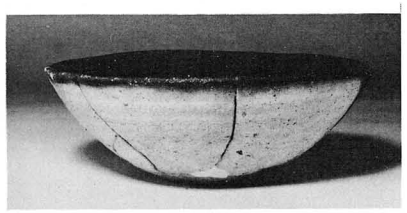


9

10

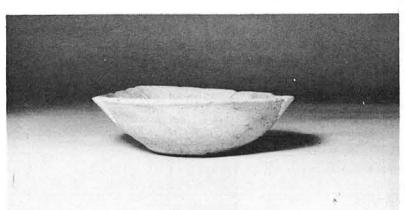


11



12

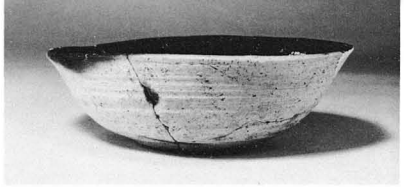
13



14

1．12号住居跡　2．12号住居跡　3．12号住居跡
4．11号住居跡　5．Ⅲ区遺物包含層　6．15号住居跡
7．11号住居跡(第17図５)　8．11号住居跡　9．13号住居跡
10．13号住居跡　11．14号住居跡　12．14号住居跡(第17図６)
13．14号住居跡(第17図14)　14．14号住居跡

## 写真33　出土遺物 (2)



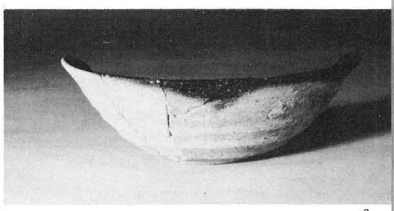
1

2

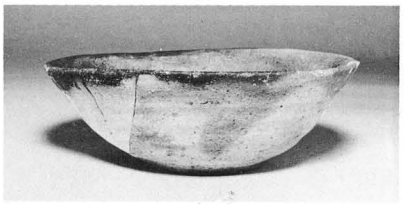
3

4

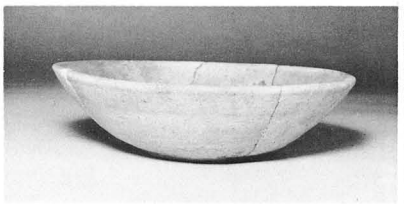
5



6



7

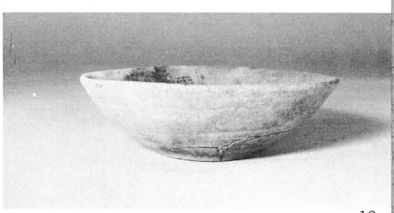


8

9

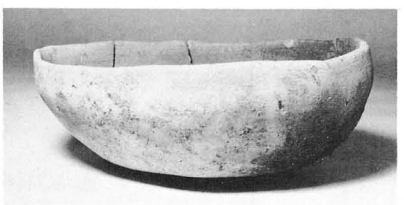
10

11



12

13



14

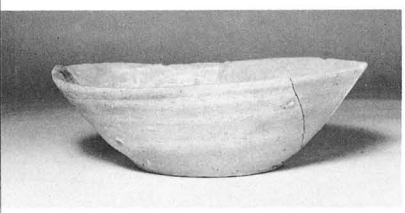
1．15号住居跡
2．15号住居跡(第17図９)
3．15号住居跡(第17図８)
4．15号住居跡
5．15号住居跡(第17図７)
6．15号住居跡
7．15号住居跡
8．15号住居跡
9．15号住居跡(第17図10)
10．15号住居跡(第17図13)
11．15号住居跡
12．15号住居跡
13．16号住居跡
14．16号住居跡(第17図１)

## 写真34　出土遺物 (3)

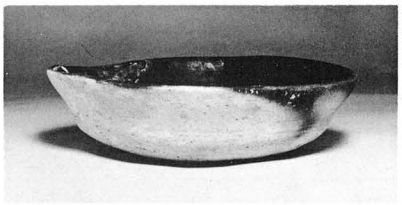
1

2

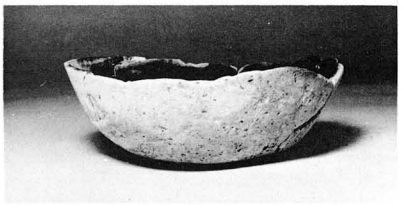
3



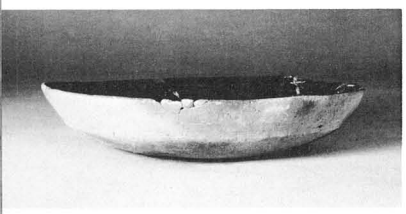
4



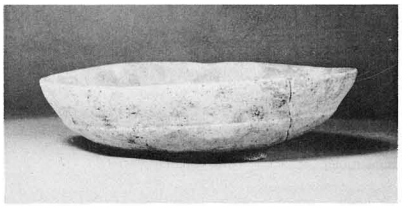
5



6

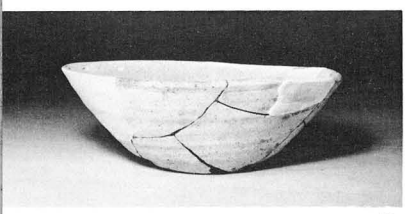


7



8

9



10

11

12

13

1．17号住居跡(第17図12)
2．17号住居跡(第17図11)
3．19号住居跡(第17図４)
4．15号住居跡
5．21号住居跡(第17図２)
6．21号住居跡
7．21号住居跡(第17図３)
8．Ⅳ区
9．15号住居跡
10．15号住居跡
11．15号住居跡
12．15号住居跡
13．Ⅳ区E－１、４層

## 写真35　出土遺物 (4)

# V．下ノ内浦遺跡（C－300）

## 1．遺跡の立地

下ノ内浦遺跡[注1]は、国鉄長町駅から西南西へ約1.5km、仙台市体育館の真東に位置し、名取川、及びその支流である旧笊川とにより形成された自然堤防とその後背湿地とに立地する。周辺には、山口遺跡や六反田遺跡、下ノ内遺跡、泉崎浦遺跡などの縄文時代から中・近世にかけての遺跡が多数存在している。また、富沢水田遺跡では、弥生時代の水田跡が検出されている。遺跡周辺は、盛土以前には大部分が水田、一部畑地として利用されていた。標高は10.3～12.3mで、南の旧笊川側と西側が高い傾向にある。

## 2．調査の方法

調査区は、高速鉄道南北線の起点である七北田から13.528～13.686kmの部分にあたる。北側からⅠ～Ⅳ区とし、3×3mグリッドを設定した。本年度調査終了箇所は、Ⅰ区とⅡ・Ⅳ区の一部で、他は来年度調査予定箇所である。

## 3．調査の概要

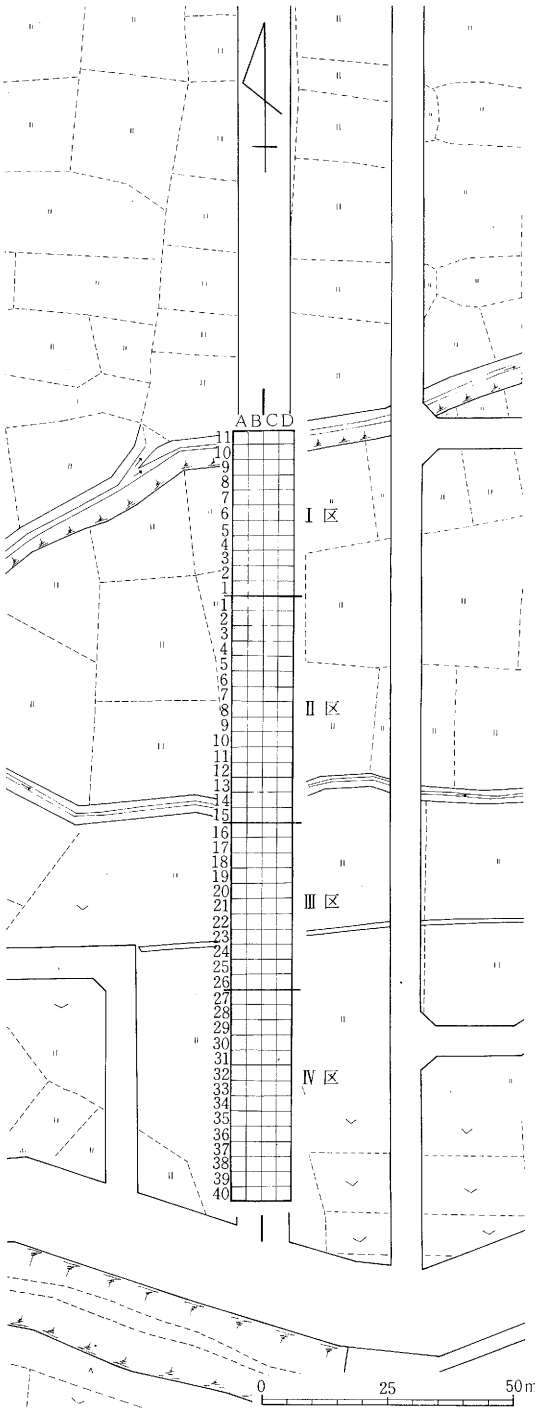
今回の調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物が検出されている。以下各時代について概述し、次項で特に弥生時代についてとりあげたい。

〈基本層位〉（第19図3）

基本層は1～20層まで確認された。第13層以下はグライ化層で、第20層は礫層である。

〈平安時代〉

平安時代の遺構は、第3層上面で水田跡（写




第18図　グリット配置図

真36)、第４・５層上面で竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟、柱列２列、溝跡３条、小溝状遺構群が検出されている(第19図１)。ＳＩ１・４竪穴住居跡(注2)の全貌は不明である。ＳＩ１住居跡(写真40)は南北約６ｍ、東西3.8m以上の方形のプランである。ＳＩ４住居跡は南東隅が検出されたのみである。ＳＢ１建物跡は梁行２間、桁行３間の東西棟である。ＳＡ1・2柱列(写真39)は南北方向にのびる柱列で、５間分が並行している。ＳＤ３溝跡は南東から北西へのびＡ４グリッドで南西へ曲流する。小溝状遺構(写真37・39)は、東西と南北方向のものがあり、南北方向のものが東西方向のものを切っている。東西方向のものが多数であり間隔が狭小である。小溝状遺構は他のすべての遺構に切られている。

〈平安～弥生時代〉

第６・７層上面で多数の小溝状遺構とピットが検出されている(写真41)。第５層が平安時代の面、第７層が弥生時代後期の包含層であるので、その時間幅に位置付けられるべきものである。小溝状遺構は東西・南北方向があり一定間隔で並行する傾向がある。畑跡の可能性(注3)が指摘される。

〈弥生時代〉

弥生時代の遺構は、第7c～８層上面で竪穴遺構２基、土壙３基、溝跡１条、多数のピット群が検出されている(第19図２)。SI ２竪穴遺構は１辺約３ｍの方形のもので堆積土からアメリカ式石鏃や管玉、炭化米等が出土している。SK ２土壙は長軸2.7m、短軸1.2m の規模をもち、石包丁、太型蛤刃石斧を出土している。SK １・３土壙からは壺の一括土器が出土している。また、多数のピット群は、その壁面や断面に凹凸がはげしく不整形であることから人為的とは判断し難いものである。

遺物包含層は第７層で、弥生時代後期の十三塚式(注4)や天王山式に比定できる土器や紡錘車、管玉などの遺物が出土している。

〈縄文時代〉

第11～13層にかけてピット群や落ち込み状のもの、倒木痕などが検出されたが、いずれも人為的なものではないと考えられる。第11・12層が遺物包含層で後期前葉（南境式期）の遺物が出土している。遺物の分布は南へ向かい密になる傾向がある。

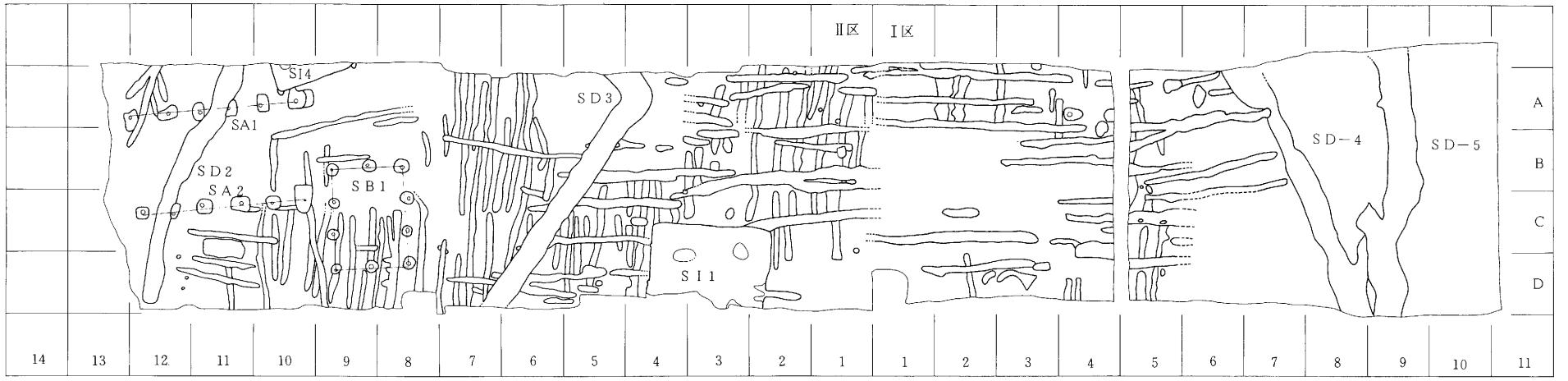
## ４．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は第7c層・第８層上面で検出されている(第19図２)。以下にSI ２竪穴遺構、SK １～３土壙、SD ３溝跡、および遺物包含層について概述する。

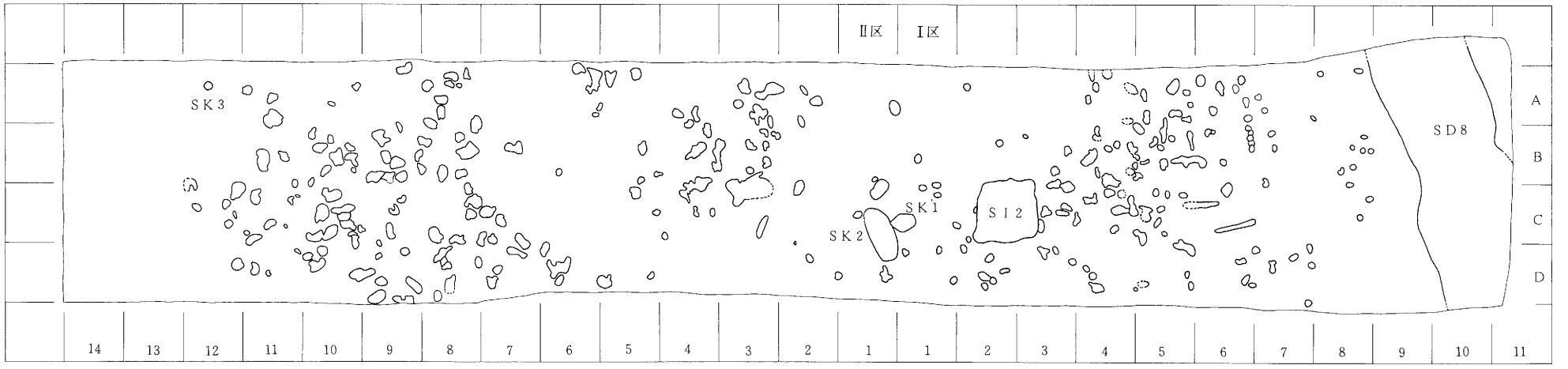
### (1) ＳＩ２竪穴遺構（第20図、写真47～49）

〔遺構の確認〕　Ｉ区のＣ２・３グリッドの第８層上面で検出された。(注5)

〔重複〕　８層上面のピット群を切っている。

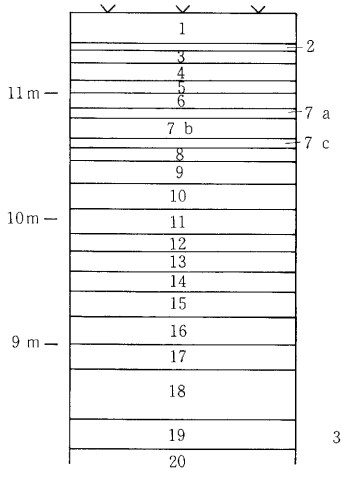



1．平安時代の遺構配置図




2．弥生時代の遺構配置図

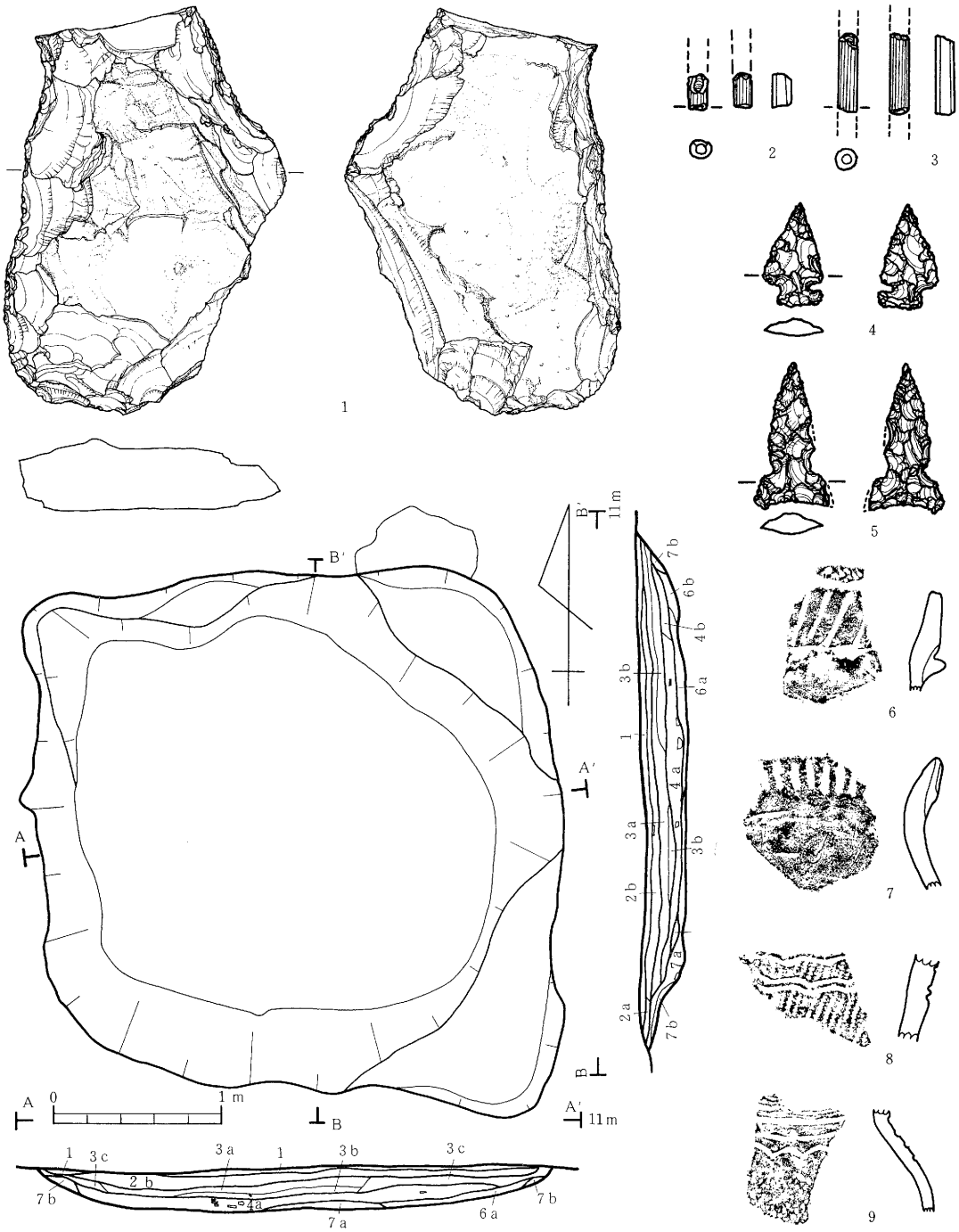
0 5 10m




3．基本層位図

| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 | 層位 | 色調 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 10YR 5/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 旧水田作土 | 10 | 10YR 3/1 黒色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 7.5YR5/4 鈍い橙色 | 粘土質シルト | 旧水田床土 | 11 | 10YR 3/4 暗褐色 | 粘土質シルト | |
| 3 | 10YR5/4鈍い黄褐色 | 砂質シルト | 灰白色火山灰を含む | 12 | 10YR 3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | |
| 4 | 10YR5/4鈍い黄褐色 | シルト | | 13 | 10YR5/3鈍い黄褐色 | 粘土質シルト | 13層以下はグライ化層 |
| 5 | 10YR 5/4 褐色 | 砂質シルト | | 14 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | |
| 6 | 10YR5/4鈍い黄褐色 | 粘土質シルト | | 15 | 5Y 5/1 灰色 | 粘土質シルト | |
| 7a | 10YR 3/3 暗褐色 | 粘土 | | 16 | 5GY5/1暗オリーブ灰色 | 粘土質シルト | |
| 7b | 10YR 2/2 黒褐色 | 粘土 | | 17 | 7.5GY5/1 暗緑灰色 | 粘土質シルト | |
| 7c | 10YR 3/2 黒褐色 | 砂質シルト | 南に向かい粘土質になる。 | 18 | 5G 5/1 緑灰色 | シルト質粘土 | しまり強く硬い。 |
| 8 | 10YR 5/4 褐色 | 粘土 | | 19 | 5G 3/1 緑灰色 | シルト質粘土 | かなり硬い。 |
| 9 | 10YR 3/2 黒褐色 | 粘土 | | 20 | | 礫層 | 3～25cmの円礫 |

第19図　遺構配置図・基本層位




| 層位 | 土　色 | 土　性 | 備　考 | 層位 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | 砂質シルト | | 4b | 10YR3/1 黒 褐 色 | 粘土質シルト | マンガン粒を含む |
| 2a | 10YR 2~3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | | 5 | 10YR3/2 黒 褐 色 | 粘土質シルト | |
| 2b | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | | 6a | 10YR4/1 褐 灰 色 | 粘土質シルト | マンガン粒を含む |
| 3a | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | マンガンを少量含む | 6b | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | マンガン粒を含む |
| 3b | 10YR 2~3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | | 7a | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | マンガン粒を含む |
| 3c | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | | 7b | 10YR5/2 灰黄褐色 | 砂質シルト | マンガン粒を含む |
| 4a | 10YR2/1 黒　色 | 粘土質シルト | マンガンを少量含む | | | | |

第20図　ＳＩ２竪穴遺構平面図・出土遺物（縮尺１－1/4、２・３－1/1、４・５－1/3、６～９－1/2）

〔平面形・規模〕　上端の平面形は南東隅がややふくらむ隅丸方形であるが、下端は不整円形である。東西約3.2m、南北約３ｍの規模で、南北軸はほぼ磁北方向である。

〔堆積土〕　７層に大別される。１～５層は黒褐色シルトでほぼ全域に堆積している。４層に遺物が多く含まれる。６・７層は黄褐色シルトで東半部に堆積している。

〔壁〕　第８層を壁としている。壁高は約20cmで緩く立ち上がる。北東・南東隅に平場がある。

〔底面〕　第８層・第９層が底面となり、軟弱である。ほぼ平坦であるが、北側がやや高くなっている。ピットが約20基検出されているが、柱穴・炉・周溝等の住居に付属する施設は確認されていない。

〔遺物の出土状況〕　遺物は堆積土各層から出土しているが４層に多く出土している。鉄石英の管玉(第20図２・３)、アメリカ式石鏃(第20図４・５)、石鏃(第20図１)、炭化米、弥生土器（第20図６～９）などが出土している。

(2)　ＳＫ１土壙(第21図、写真44・48)

Ⅰ・Ⅱ区のＣ１グリッドの第８層上面で検出された。(注５)ＳＫ２土壙を切っている。平面形は不整楕円形で、長軸1.3m、短軸0.9mである。断面形は舟底形を呈し、深さ約15cmを測る。堆積土は１層で黒褐色(10YR 3/1)粘土質シルト層である。底部に籾痕のある大型の壺（第21図１、写真48－18・19）が出土している。

(3)　ＳＫ２土壙（第21・22図、写真45・48・49）

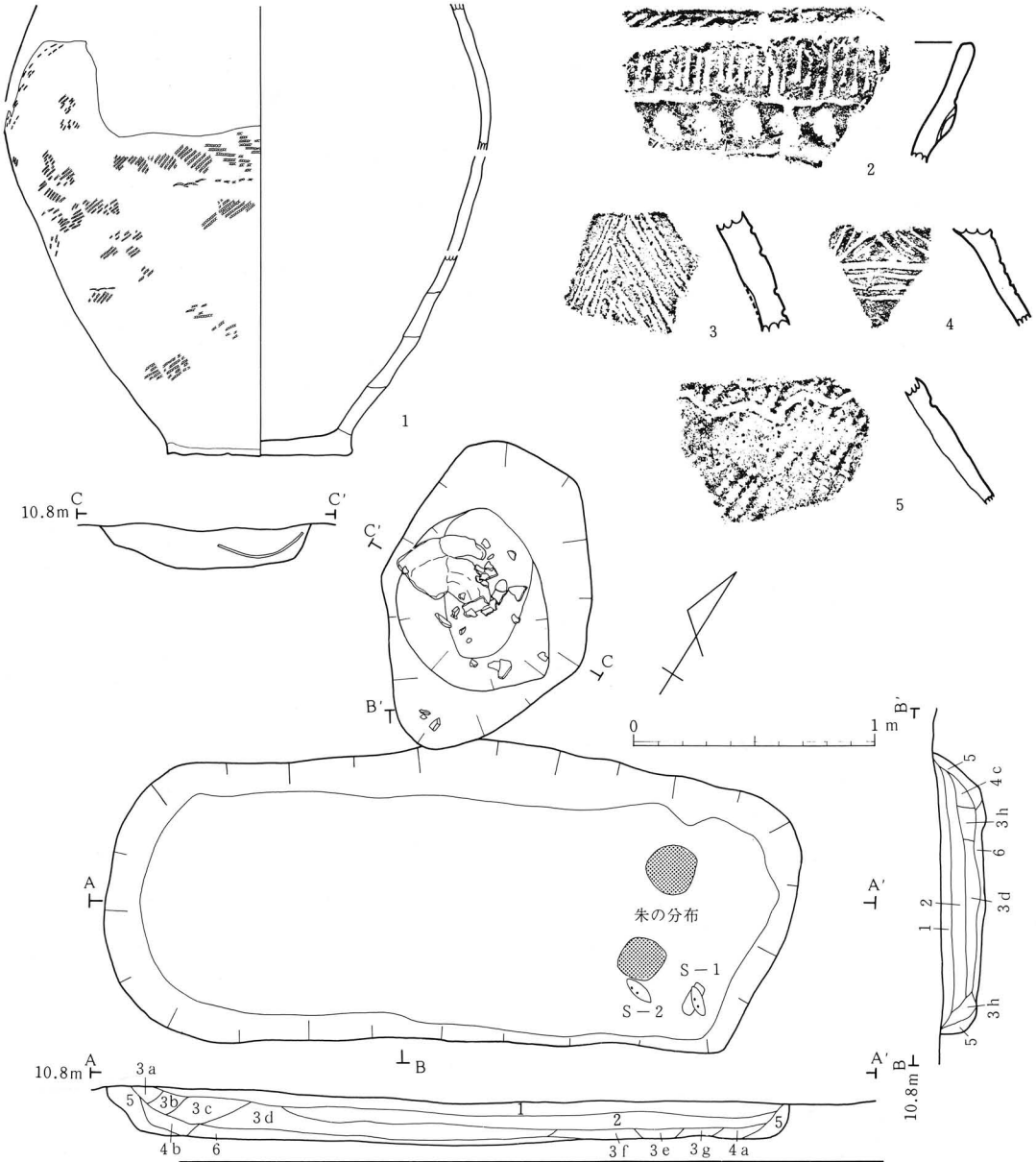
Ⅱ区のＣ・Ｄ１グリッドの第８層上面で検出された。(注５)ＳＫ１土壙に切られる。平面形は隅丸長方形で長軸2.7m、短軸1.2mを測る。長軸方向はN－75°－Eである。壁の残存高は15～20cmで、底面はほぼ平坦である。堆積層は６層に大別され、１～３・６層が黒褐色、４・５層が黄褐色系のシルトおよび粘土層である。堆積土３層上面で東壁寄りに径20cmの朱の分布が２カ所検出され、それに近接して石包丁２点、太型蛤刃石斧(第22図、写真46)が出土した。土壙の性格を直接決定づけるような内部施設(木棺等)は検出されていない。堆積土中からアメリカ式石鏃や石鏃(第22図３・４)や弥生土器(第21図２～４)が出土している。

(4)　ＳＫ３土壙（第23図、写真42・48）

Ⅱ区Ａ12グリッドの7c層上面で検出された。平面形は径約40cmのほぼ円形で、断面形は逆台形を呈し、深さは約17cmである。堆積土は１層（10YR 2/2、黒褐色シルト質粘土）である。底部を欠損した壺(第23図１、写真48－17)が倒立して出土した。この壺は天王山式に比定される。

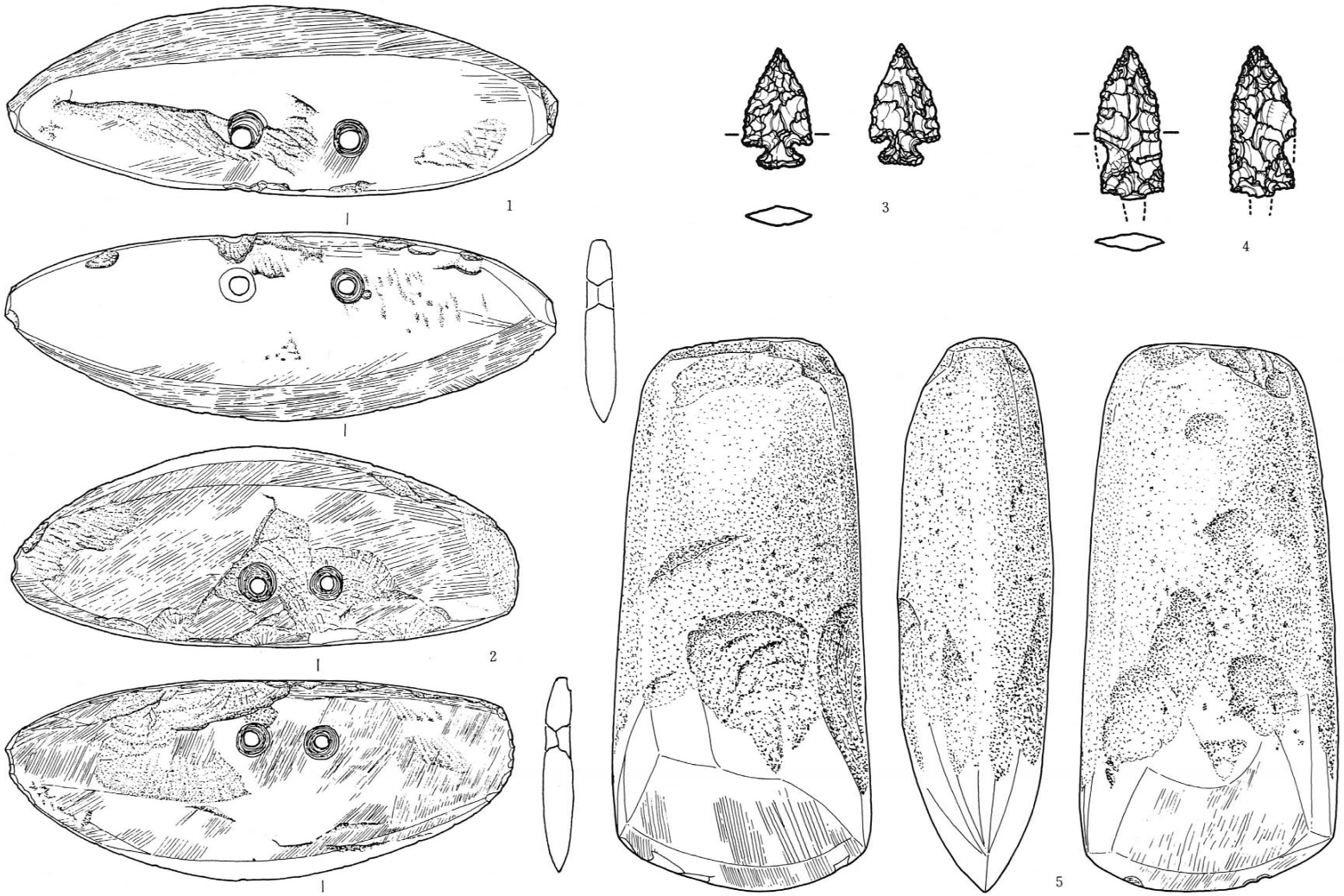
(5)　ＳＤ８溝跡（第23図３、写真42）

Ⅰ区９・10列の８層上面で検出された。上幅約５ｍ、下幅約４ｍ、深さ約30cmで東北東の方向にのびる。北岸の東半部はトレンチ外のため不明である。底面はほぼ平坦で東へ傾斜する。堆積土は４層で堆積土２層から遺物が多く出土した。

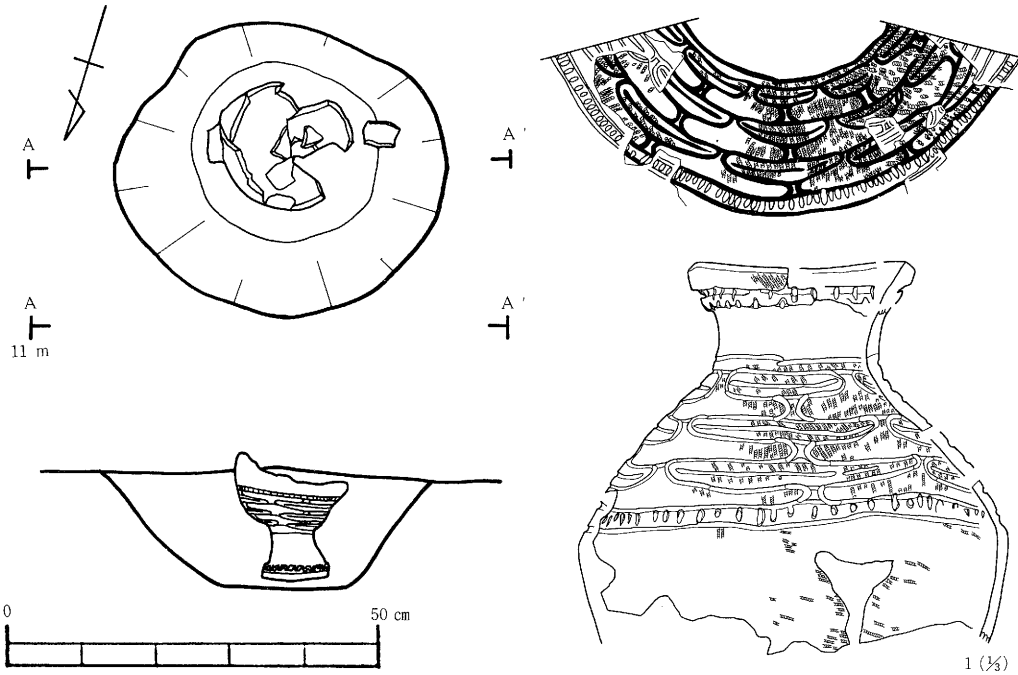



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 白色パミス、マンガン含有 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 1層より多少明るい |
| 3a | 10YR3/3 黒褐色 | 粘土質シルト | 焼土粒、炭化物少量含有 |
| 3b | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 焼土粒炭化物多量含有 |
| 3c | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 6層より多少暗い、焼土粒少量含有 |
| 3d | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 2層より多少暗い、炭化物、焼土粒を少量含有 |
| 3e | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | |
| 3f | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 6層よりやや明るい |
| 3g | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | |
| 3h | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 6・15層より暗い |
| 4a | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物、焼土粒少量含有 |
| 4b | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物、焼土粒少量含有 |
| 4c | 10YR5/3にぶい黄褐色 | シルト | |
| 5 | 10YR5/4 褐色 | シルト質粘土 | マンガン、白色パミス含有 |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 焼土炭化物含有 |

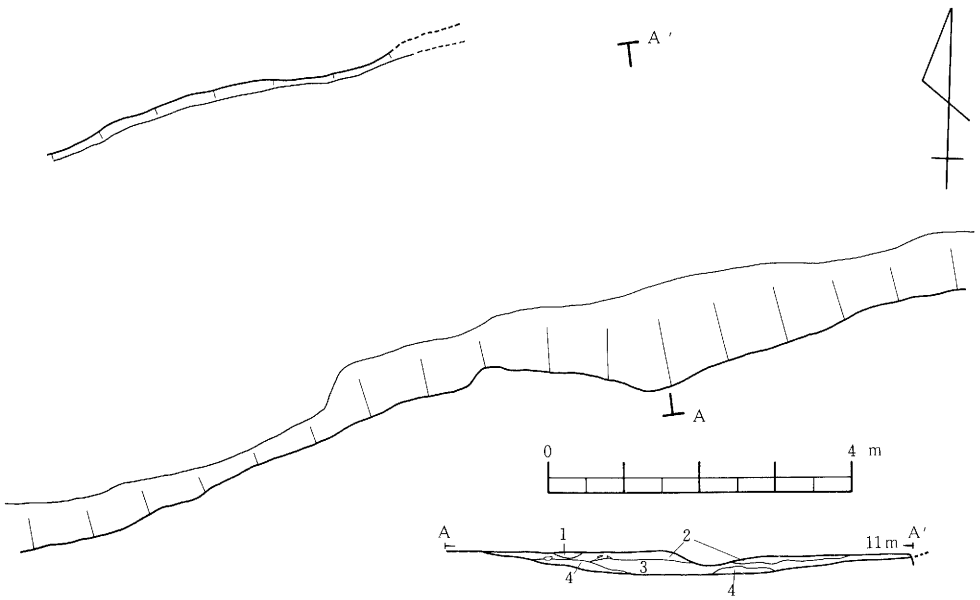
第21図　ＳＫ１・ＳＫ２土壙平面図・出土遺物（縮尺１－¼、２～５－½）




第22図　ＳＫ２土壙出土遺物（縮尺１．２．５－⅗、３・４－⅕）




| 図 | 遺構 | 器形 | 法量 | cm | 文様 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SK 3 | 壺 | 口径 | 9 | 口縁部 — 有段口縁、RL縄文、粘土貼付 → 沈線 → 交互刺突 |
| | | | 残存高 | 15.7 | 頸部 — ヨコナデ |
| | | | 最大径 | 17 | 胴部 — RL縄文 → 沈線による王字状文、胴部中央に沈線後刺突 |




| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR ⅜ 黒褐色 | 砂質シルト | サンドパイプ、マンガン粒を含む。 |
| 2 | 5YR ⅜ 黒褐色 | 砂質シルト | 遺物を含む、サンドパイプ、マンガン粒を含む |
| 3 | 7.5YR ⅝ 褐灰色 | 粘土質シルト | サンドパイプ、マンガン粒を含む |
| 4 | 10YR ⅜ 黒褐色 | 粘土質シルト | サンドパイプ、マンガン粒を含む。 |

第23図　ＳＫ３土壙平面図・出土遺物、ＳＤ８溝跡平面図

### (6) 遺物包含層

基本層第７層が弥生時代の遺物包含層である。第７層は7a、7b、7c層に細別され、とくに7b層に遺物が集中している。第７層は調査区全域に分布するが、遺物はⅡ区のＣ列を境に北側に多く分布する。弥生土器は、細い沈線を２本ないし３本同時に施文する平行沈線文系土器群（十三塚式比定）と、交互刺突に特徴づけられる土器群（天王山式比定）とが存在する。両者は7a～7c各層に混在している。石器（写真49）は石鏃、アメリカ式石鏃、管玉(鉄石英製)、石錐などがある。土製品（写真48）は紡錘車などがある。

### (7) まとめ

○SI ２竪穴遺構については、その性格を決定づける条件（炉、周溝、柱穴の存在）が不明であるので、現段階では積極的な判断はさけ、本遺跡の今後の調査で類例が増加することに期待したい。所属時期は、堆積土中の遺物や包含層の遺物が弥生後期のものに限定されていることから、弥生時代後期と考えられる。

○SK １土壙は、完形ではないが大型の壺（同一個体も多数あり）が出土していることから、壺棺墓であった可能性も考えられる。所属時期はSI ２と同様に弥生時代後期と考えられる。

○SK ２土壙は、土壙の形態や副葬品と考えられる石包丁、太型蛤刃石斧の出土状況、朱の分布などから、土壙墓であった可能性がかなり高いといえる。所属時期は、SI ２、SK １同様に弥生時代後期と考えられる。

○SK ３土壙での壺の出土状況は意図的なものと考えられる。この土壙も壺棺墓の類列に属するものかもしれない。

○遺物包含層である7a～7c層には十三塚式比定土器群と天王山式比定土器群とが混在している。同様な状況は隣接する山口遺跡においても確認されている(注６)。両者が共存関係にあるものかどうかは重要な問題である。今後の詳細な検討に待ちたい。

## 注

注１）　下ノ内浦遺跡と山口遺跡とは密着した遺跡である。調査区は両遺跡を縦断しているが、遺構・遺物が一連のあり方を示していることや調査時の混乱をさけるために「下ノ内浦遺跡」として取扱った。

注２）　次の記号で遺構を表す。

SI：竪穴住居跡、竪穴遺構　SA：柱列　SB：掘立柱建物跡　SK：土壙　SD：溝跡

注３）　田中則和　1981『六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第34集

注４）　伊東信雄　1957「古代史」宮城県史１

注５）　7c上面でも土色の違いは確認し得たが、不明瞭なためプラン確定には至らなかった。

注６）　佐藤甲二　1984「３．弥生時代の遺構と遺物　土器」『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集　P.P.256～282

写真36
第３層上面水田跡
（南→北）

写真37
第５層上面小溝状遺構
（西→東）

写真38
第５層ＳＫ27土壙
（東→西）

写真39
Ⅱ区５層上面全景
（南→北）

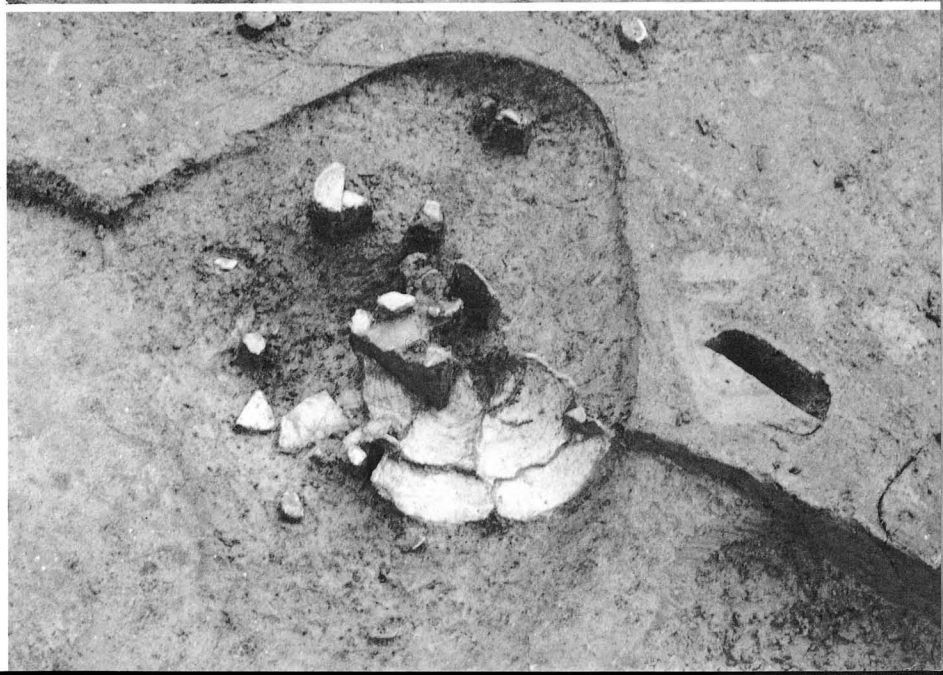
写真40
ＳＩ１竪穴住居跡
（南→北）

写真41
Ⅰ区第７層上面
作業風景

写真42
第７層 SK ３土壙
（北→南）

写真43
第７層 SD ８溝跡
（東→西）

写真44
第８層 SK １土壙
（北→南）



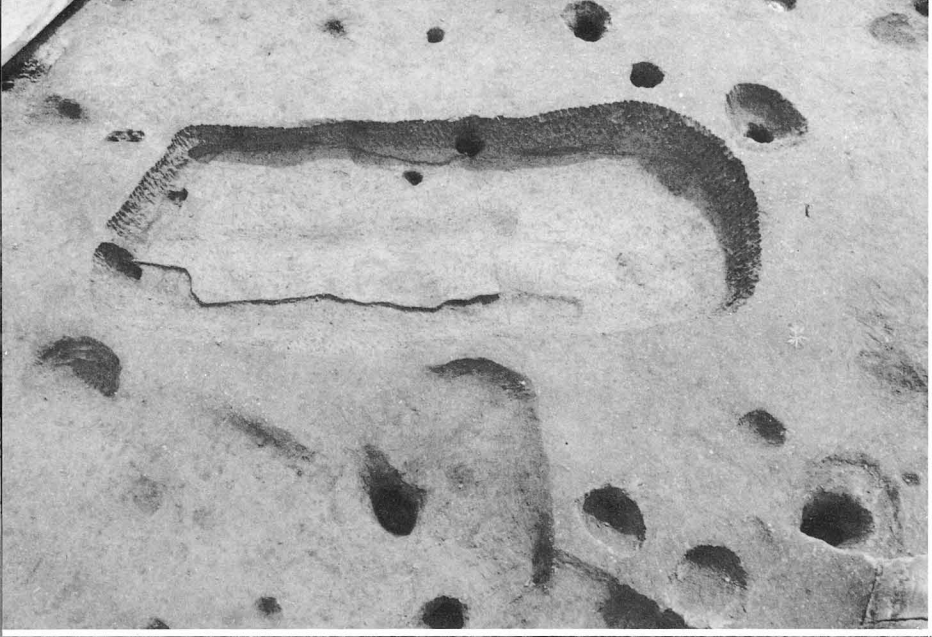
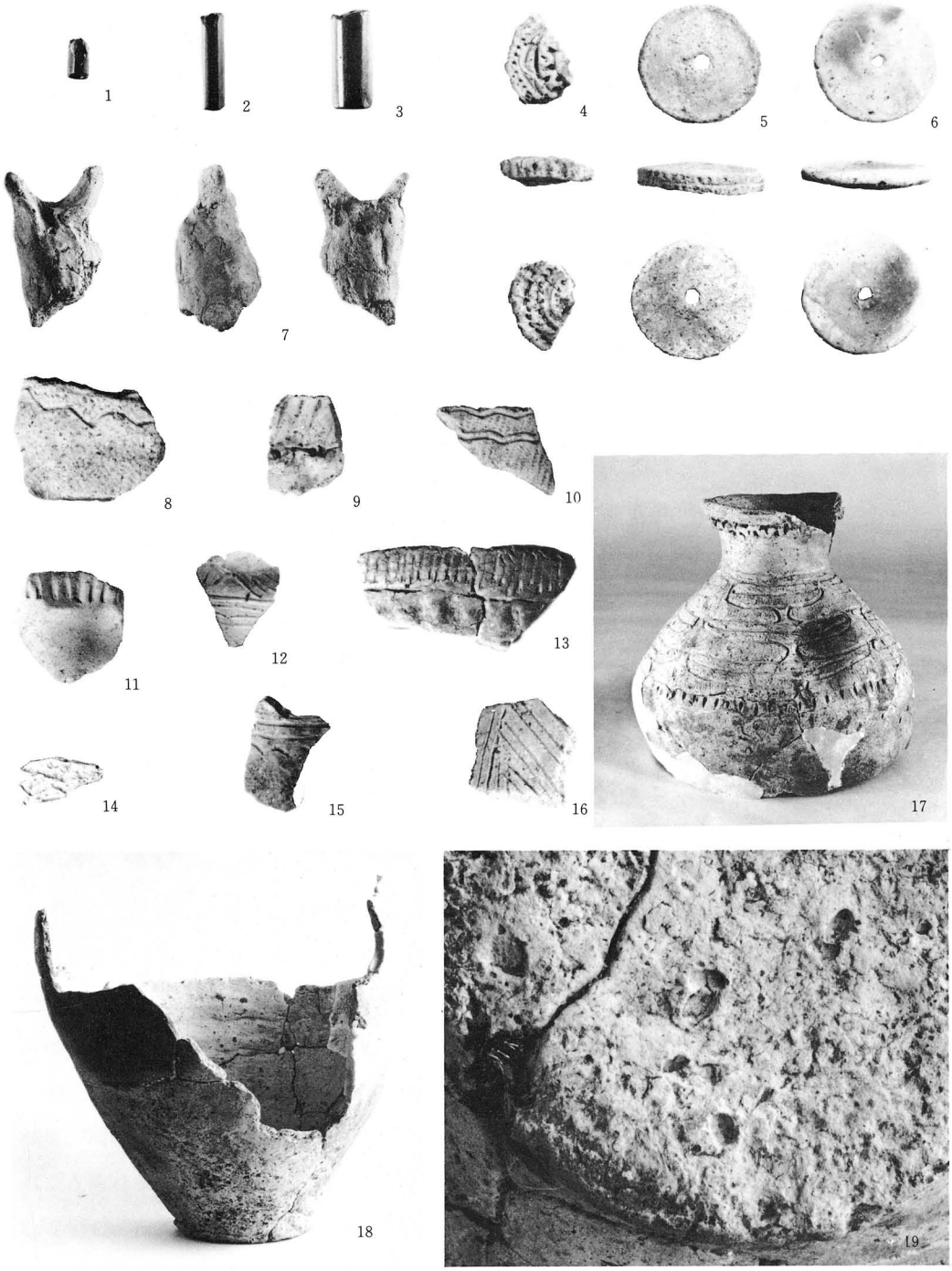


写真45
第８層 SK ２土壙
（北→南）

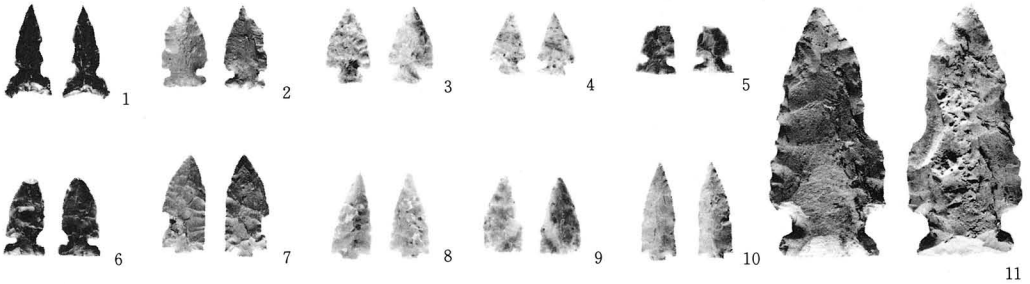
写真46
SK ２土壙内
遺物出土状況

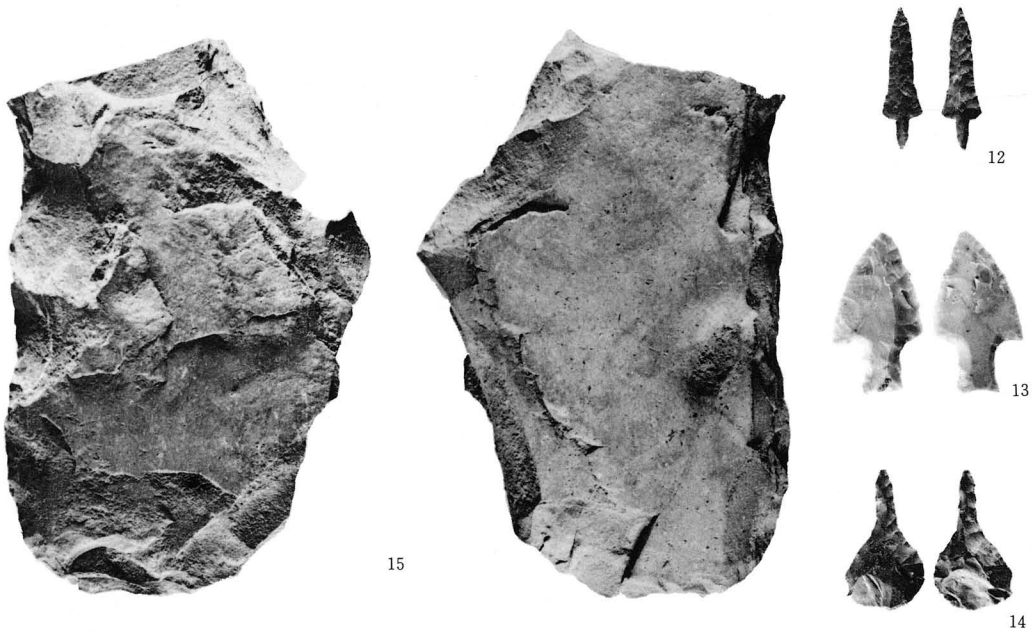
写真47
SI ２竪穴遺構
（北→南）




SI　2竪穴遺構出土　　1・2・9・10・11・15
SK　1土壙出土　　18・19(18の底部にある籾痕)
SK　2土壙出土　　8・12・13・16
SK　3土壙出土　　17
弥生時代の包含層出土　3・4・5・6・7

**写真48　出土遺物 (1)**



ＳＩ２竪穴遺構出土　　１・４・15
ＳＫ２土壙出土　　３・７・16
弥生時代の包含層出土　２・５・６・８～14

写真49　出土遺物（2）

## 5．下ノ内浦遺跡ＳＫ２土壙出土の石包丁

須藤　隆・阿子島　香

東北地方では名取・広瀬川流域の沖積平野において多くの石包丁が出土している。明治41年、坪井正五郎によって名取市館腰村植松山囲、愛島笠島出土の２点の石包丁がこの地方で初めて学界に紹介された（坪井　1908　陸前名取郡地方に於ける見聞　人類学雑誌　23-267　PP.323-328.)。その後、昭和14、５年に仙台市南小泉遺跡から17点が蛤刃石斧などとともに出土し、この地方における弥生文化の様相が明確にされた（伊東　1950　南小泉石器時代遺跡　仙台市史３PP.13-31)。この地域、阿武隈川下流域・白石川流域において、現在その資料は、51遺跡100点に達する。この石包丁については、類例の収集が行われてきたが、その原産地、製作方法、使用方法など石包丁そのものの研究はほとんどなされていない。わずかに、福島県相馬市天神沢出土一括資料の分析が貴重なデータである（竹島国基編　1983　天神沢)。筆者の１人である須藤は、南小泉遺跡出土資料などについて、その観察を行ってきた。しかし、資料そのものがすでに長い期間人の手にさらされ、多くの損傷を被っており、使用痕、研ぎの様子などを観察するには限界があった。

本遺跡において埋葬土壙に副葬品として石包丁が埋納されていたことは、このような研究の限界にあった筆者らにとって、稀有な機会であった。この資料は明らかにその出土状態から埋納後の器面損傷をあまり被っておらず、包含層出土資料の場合などに比べ、より使用時に近い状態の使用痕観察が行えると判断された。このような観点のもとにこの重要資料の観察と使用痕分析を行った。

### (1)　出土石包丁の特徴

ＳＫ２土壙からは太型蛤刃石斧１点とともに２点の石包丁が出土した。

**石包丁Ｓ－１**　粘板岩、あるいは砂岩製。長さ141㎜、幅58㎜、厚さ７㎜である。紐穴間隔は28㎜、穴の径は４㎜ある。この地域の石包丁としては小型品である。刃部は大きく外弯し、背部は緩やかに外弯して紡錘形を呈する。両面ともに丁寧に研磨されている。背部よりに前段階の剝離の痕跡が認められる。この凹凸中にも研ぎによる荒い擦痕が認められる。刃部は幅１cm程度が両面から研がれている。この部分の擦痕は横方向に顕著である。刃部には細かな刃こぼれがみられるが、いずれも磨耗している。紐穴は両面からの回転穿孔である。この石包丁は黒色を呈し、白いすじが４㎜程の間隔でのびている。この原石は、次にふれるＳ－２と同様に北上山系南部起源の可能性が極めて強いと判断された。

**石包丁Ｓ－２**　灰色の粘板岩、あるいは砂岩製。長さ130㎜、幅51㎜、厚さが９㎜ある。紐穴間隔は17㎜で、穴の径は４㎜ある。その形態はＳ－１と共通する。剝離の痕跡は紐穴周辺と背部に大きく残っている。しかし、両面ともよく研磨されており、あらい擦痕が見られる。刃部

は両面が丁寧に研がれている。この刃部にも細かな刃こぼれが認められるが、いずれも磨耗している。紐穴はやはり両面からの回転穿孔である。

(2) 使用痕の観察

ポリッシュの分類法は、梶原・阿子島（1981　考古学雑誌　67-1　PP.1-36.）の設けた基準に基づく。洗浄にはブラシ類は用いず、① 石けんと水道水（指で洗う）②超音波洗浄（150W、5分)、③石けんと水道水（指)、④超音波洗浄(150W、2分)、⑤アルコール綿(観察時)の順で行なった。金属顕微鏡を使用して100倍と200倍で観察した。

2点ともに明瞭なコーングロス（ポリッシュタイプA）が広く認められたので、全面をくまなく観察してその強弱と分布状況を記録して「光沢分布図」を作成した。このポリッシュは、明るくなめらかで、表面は丸味を帯びて平坦であり、コーングロスの特徴をよく示している。

発達状況を弱から強へと比較して考察すれば、まず未使用部分は研磨にかかわらずポリッシュは認められず、微粒状の構造を呈して、顕微鏡下でしばしば白くもやがかって見える（微凹凸と光の反射のためと思われる)。コーングロスの発達は、まず極小の（10ミクロン以下）輝く点状光沢が現われ、それから、発達する部分が次第に面的広がりを呈してくる。ある程度発達すればパッチ(PATCH）が並ぶようになるが、コーングロスパッチの大きさは石器の同一部分でも一様ではなく、大・小・微が併存している。均質に発達しない要因の一つは石器表面自体の性質であることがパッチ周囲の観察から知られる。また、パッチは微凹凸の高所により多く生じていることが、ピントの上下による観察から確認される。今回の例の場合、光沢が発達する現象とは、パッチの数が増加することおよび併存するパッチのうち大形の部類の大きさが拡大することであって、個々の光沢のパッチの明るさ自体が増す現象ではない。パッチが多数視野内に認められる発達した状態の部分においても、光沢パッチ部分と背景の部分ははっきりと区別され、前者の明るさ自体はパッチの大小にかかわらず一様である。

以上の変化は連続的なものであるが、光沢の分布を検討するために、基準を設けて、無・微弱・弱・中・強の段階に分けて図示する。

「無」光沢が認められない状態

「微弱」光沢が所々にわずかに点状に形成し始めている状態。各パッチ径は10ミクロン以下。200～400倍でようやくコーングロスらしい特徴が認められる。

「弱」パッチが点在している状態。接眼鏡スケールで石器表面に1000×70ミクロンのわくを作ると、その中に数個程度、径約20ミクロン以上のパッチが分布する状態。パッチの大きさは大形の部類でも径50ミクロン程度に達しない。コーングロスとしての特徴は100倍でも認められる。

「中」パッチが群在している状態。同上のスケールわく内に、10～20個程度、径約20ミクロン

以上のパッチが分布する状態。大形のパッチは径50～100ミクロン程度、あるいはそれ以上になる。

「強」頁岩による実験では、コーングロスが発達すると、一面にポリッシュがおおいつくす状態に至る。今回の例ではここまで発達した部分はなかった。

**石包丁S－1**　両面に同様の強さで光沢が広がる。刃部では体部に比較して著しく弱く、認められない部分が大きい。刃縁を垂直にみると「微弱」に若干分布してはいる。体部は刃部との境付近で最も強い。体部で「中」と「弱」が縞模様状を呈しているが、これは石材の質と強く対応している。石質は黒白の縞状構造を持っているが、縞の白い部分で光沢が強くなっており、この場合「中」と「弱」は連続的変化ではなくて境界が明瞭である。光沢の強さは左右対称ではなく、図のｂ面での左側にやや片寄る。紐穴の周辺部から背部にかけてはほとんど発達していない。

**石包丁S－2**　両面ともに同程度に光沢が広がる。やはり体部の内側に最も強く、刃部自体には比較的弱い。刃部にも部分的に「中」が分布している。図ａ面で体部右側に特に広がっている部分がある。紐穴の周辺から背部にかけてはほとんど認められない。ａ面左端に近く背部にかけて「中」の領域が存在している。

**(3)　結語**

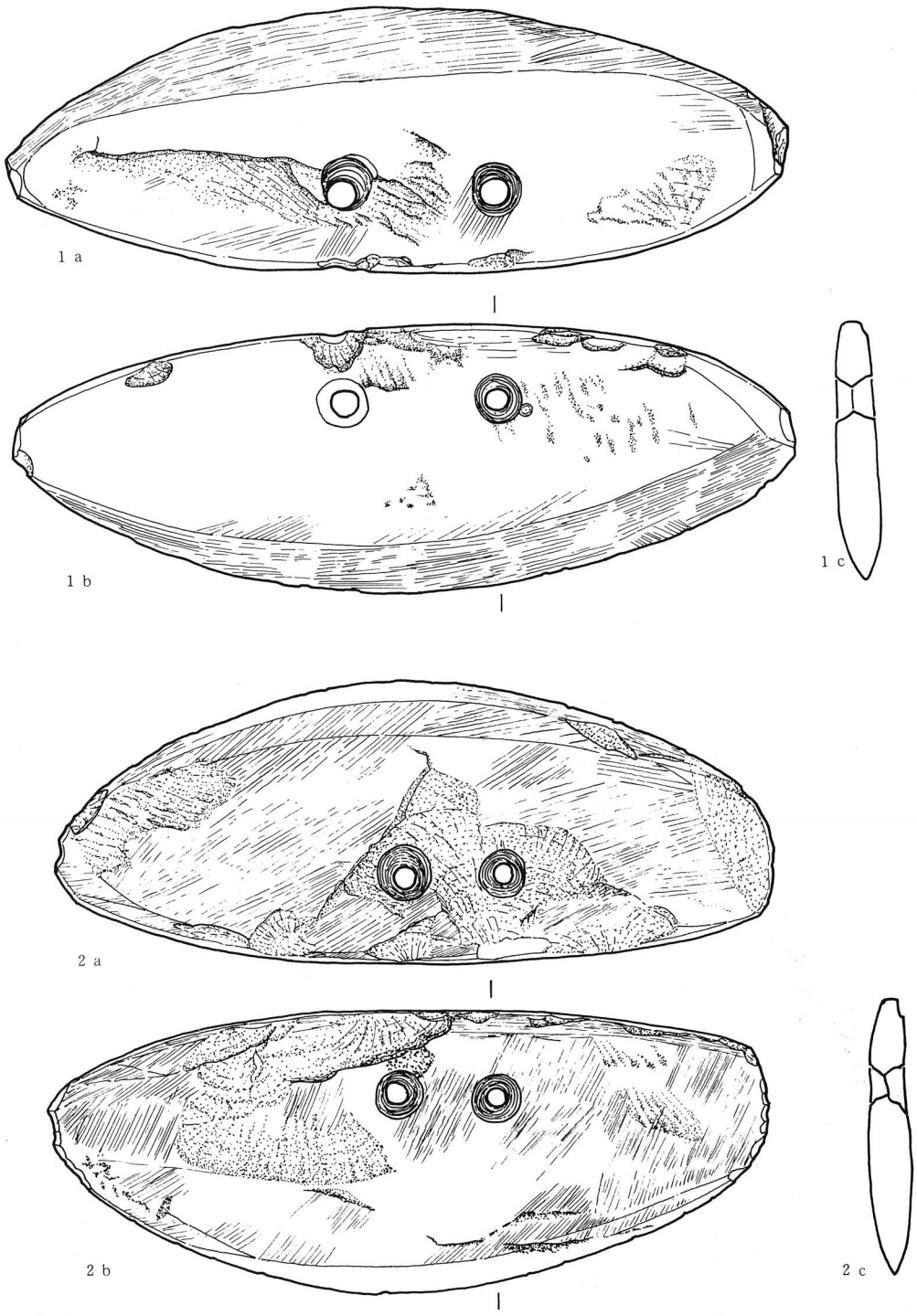
２点に共通する点をまとめ、若干の所見を述べる。

①　両面にほぼ同程度に光沢が広がり、強さも同程度といえる。従って、被加工物との接触度には両面の間に著しい差はない。

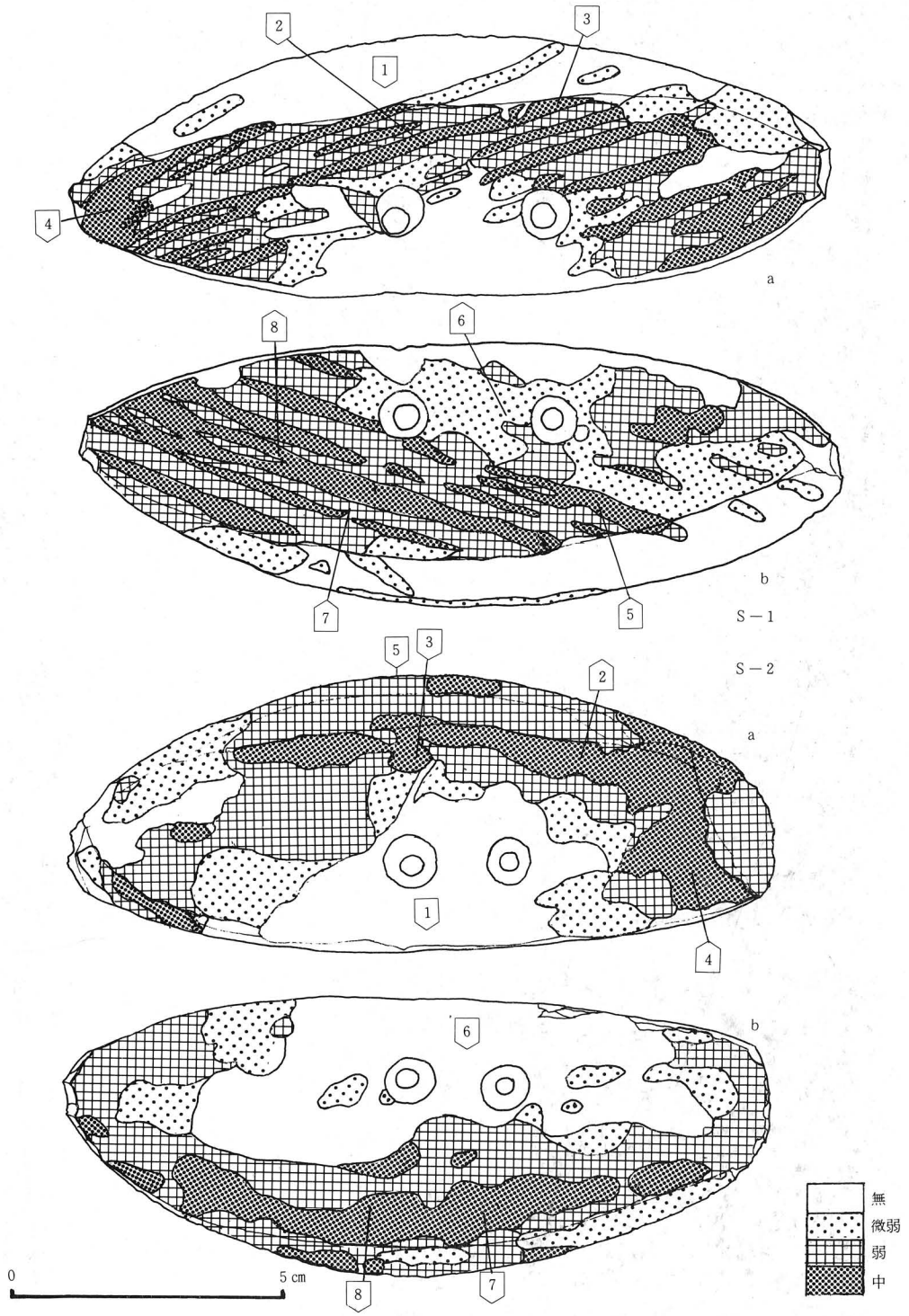
②　体部の下半（刃の側）に帯状に最も強い部分が広がっている。必ずしも左右対称であるとは限らない。そして刃部においては体部よりも確実に弱い。この強弱は刃部としての研磨痕の領域に（稜に）よく対応している。従って、刃部を研ぎ直していることは確実である。

③　紐穴の周辺部から背部にかけては両面とも著しく微弱である。一方、この石器は体部に非常に広範囲に光沢が発達するほど使いこまれている。この部分が被加工物であるイネ科植物との直接的接触が妨げられていた部分であることを示している。

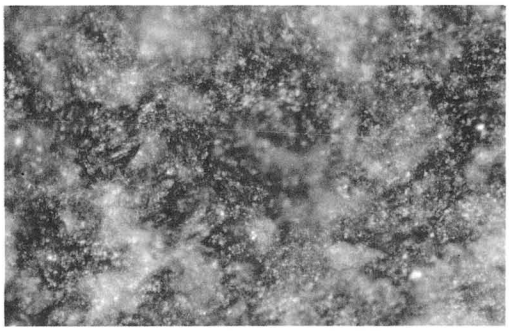
④　この石器の形態は、東北地方中部に分布する石包丁の典型である。２点ともに形態、大きさ、製作方法ともに強い共通性をもつ。石質に外見上の差異があるが、同一起源の原石を用いていると推定される。



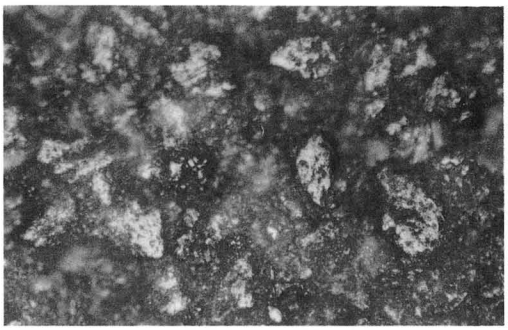

第24図　下ノ内浦遺跡ＳＫ２土壙出土石包丁実測図（Scale 4/5）
１、Ｓ－１石包丁、　２、Ｓ－２石包丁



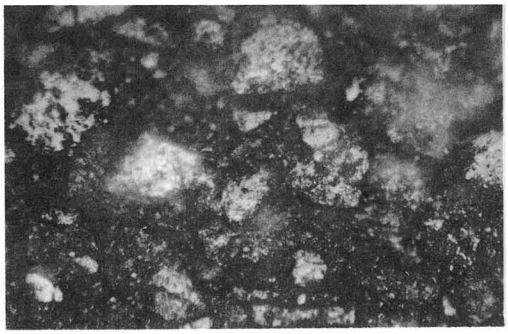

第25図　石包丁光沢分布図（撮影個所 ⬠ の上方三角部が写真画面の天方向）



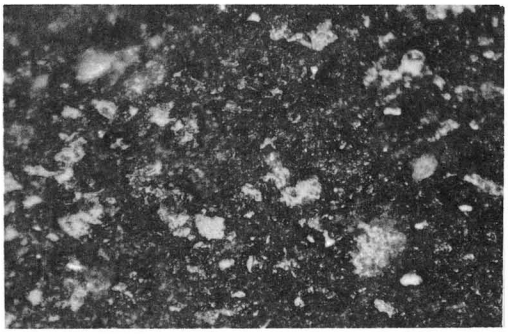
1



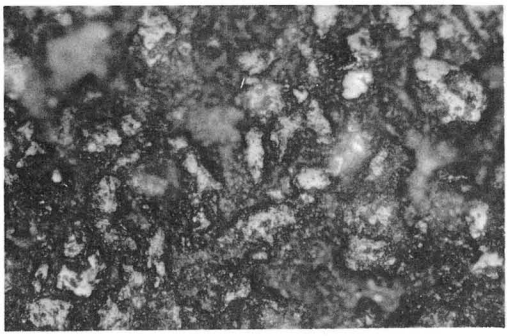
2



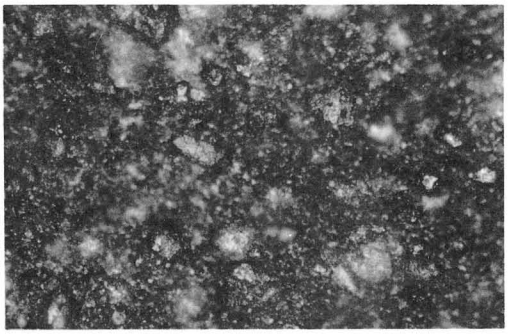
3



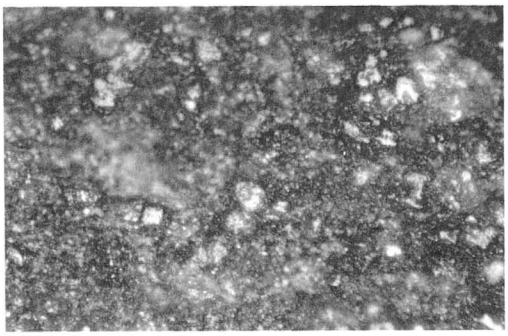
4



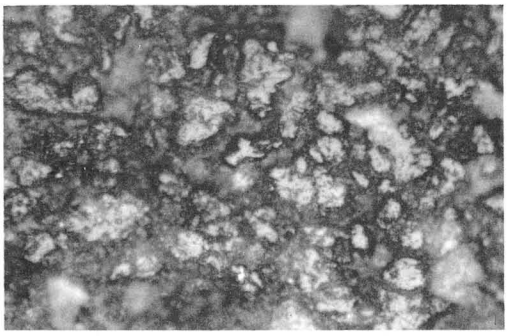
5



6



7



8

**写真50　石包丁S－1の使用痕**

（右上スケールは200ミクロン。番号は光沢分布図の撮影個所番号と一致）

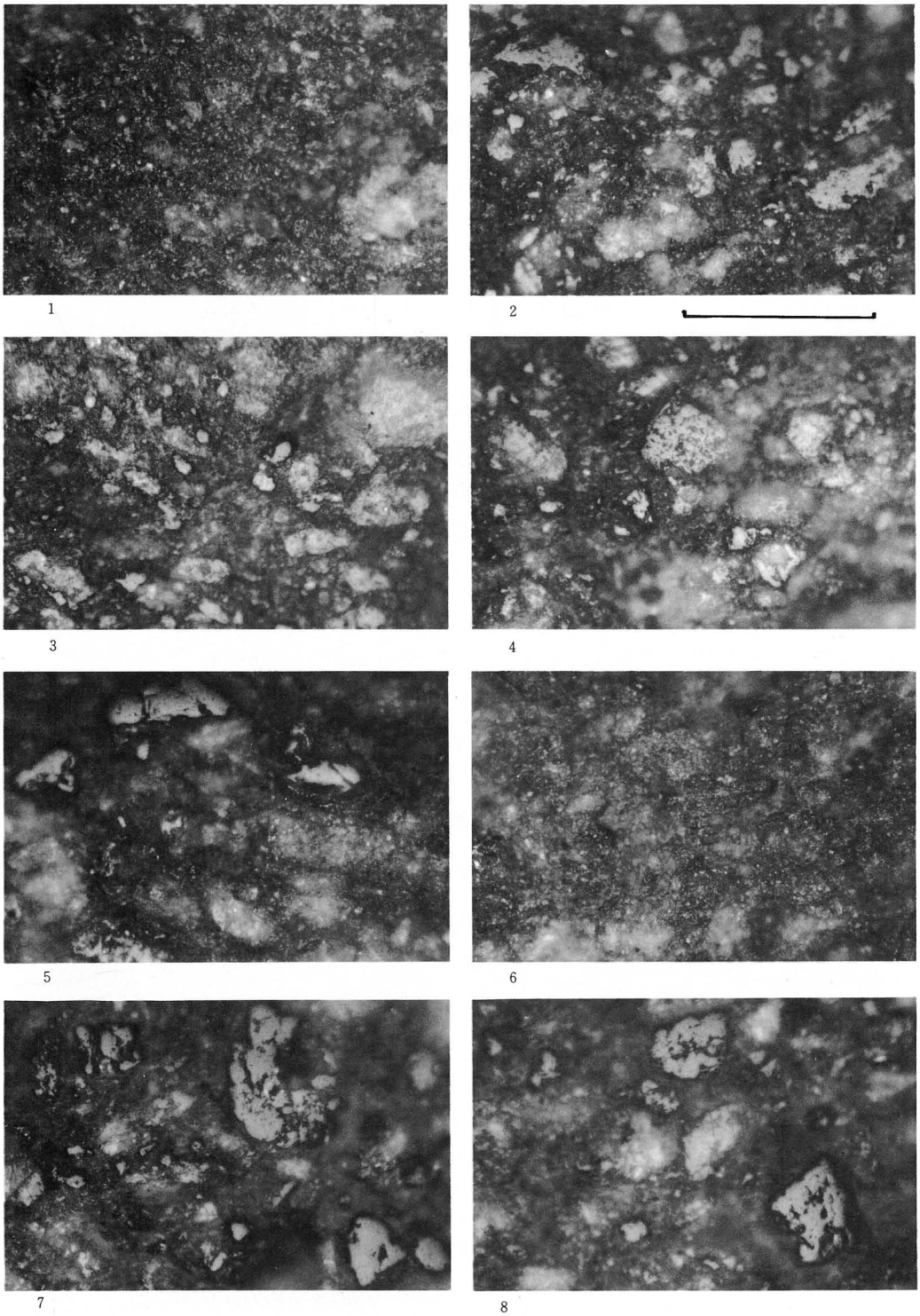


写真51　石包丁 S－２の使用痕

（右上スケールは200ミクロン。番号は光沢分布図の撮影個所番号と一致）

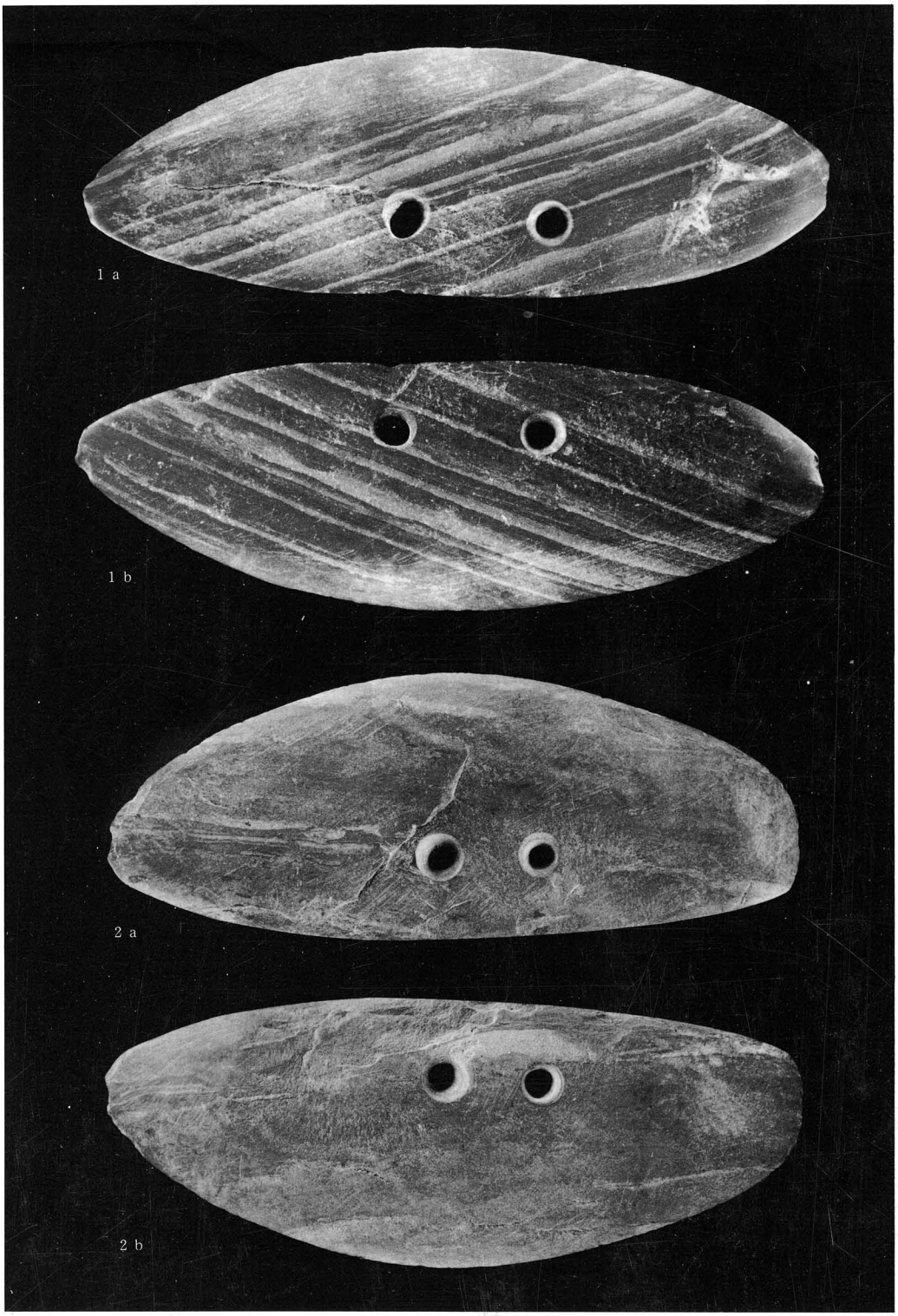



写真52　下ノ内浦遺跡ＳＫ２土壙出土石包丁（１Ｓ－１、２.Ｓ－２）

# Ⅵ．富沢水田遺跡(C-301)—鳥居原・中谷地地区—

## 1．遺跡の立地

富沢水田遺跡は、郡山低地[注1]の西半部のほぼ中央部に位置している。本遺跡は昭和57年の高速鉄道関係遺跡の試掘調査によって遺跡と認定され、翌58年6月3日に仙台市遺跡台帳に遺跡番号C－301「富沢水田遺跡」として登録された。

今回の鳥居原・中谷地地区の調査区は、東北本線長町駅の西方約1kmに位置し、主に広瀬川と名取川によって形成された後背湿地に立地している。盛土以前の旧地表面の標高は9.3～9.8mである。以前、この場所には秋保電鉄が走っていたが、昭和36年に廃止された後、盛土されさら地となっていた。高速鉄道南北線の建設終了後は、都市計画道路長町一折立線の一部として利用されることになっている。近隣の遺跡としては北方に金岡八幡古墳があり、南に山口遺跡・下ノ内浦遺跡・袋東遺跡が隣接している。中でも山口遺跡では、縄文時代早期末葉の土器等が出土しているほか、平安時代・中世の水田跡も検出され、沖積平野における遺跡を考える上で貴重な成果が得られている[注2]。

尚、一部に発表された「鍋田遺跡」は、富沢水田遺跡鳥居原地区と同一である[注3]。

## 2．調査の方法

今回の調査対象区域は、高速鉄道南北線の起点七北田より12.420km～12.560kmの（仮称）鍋田駅部分の西半分と、それに続く中谷地工区の12.560km～12.620kmの路線部分であったが、工事工程の都合上、(仮称)鍋田駅の北側の出入口2ケ所及び鍋田工区内の下水管を移設するための工区外の部分(以下、下水管移設部分とする)の調査も行なった。調査面積は、合計で約2400㎡である。また、昨年度の調査箇所に予定されていたが、工事工程上、調査のできなかった中谷地工区内の12.855kmの地点に6.5×6mの調査区を設け、試掘調査を行なった。

尚、調査は下水管移設部分の調査を終えた後、西方の中谷地工区部分から開始し、盛土のみを重機で排除し、その後、調査を行なった。

## 3．層位

昨年の概報でも述べたが、本地区で共通する層序は1層から8層までである。今回の調査区でも1層から8層までは共通して確認されたので、昨年の調査成果ともあわせると東西約300mに亘って追いかけられたことになる。

1層から8層までは、1層旧耕作土、2層シルト層、3層粘土層、4層以下の泥炭層[注4]からなる。4層以下の泥炭層は、時おり砂層や白色系統の粘土層を挟みながら、9層以下でも連続してみられ、ある層から砂層となる。付近のボーリング結果によれば、この砂層下には沖積層の基底礫層が存在する。

3層上面には平安時代に降下したといわれる灰白色火山灰(注5)が部分的にみられ、また、7c層で確認された水田跡より弥生土器が出土していることから、3層は平安時代、7c層は弥生時代の時期と考えられる。更に4層上面で確認された落ち込み中からは、奈良時代に属すると思われる土師器が出土している。従って、4層と7c層との間の層は、弥生時代以降奈良時代までに形成された層である。

## 4．調査の概要

### A．検出遺構

今回の調査では、平安時代の水田跡、それよりも新しい水田跡、奈良時代と考えられる溝跡7条及び性格不明の落ち込み、弥生時代の水田跡を検出した。このうち、平安時代の水田跡、弥生時代の水田跡は昨年度の調査で検出した2時期の水田跡である。

平安時代よりも新しい水田跡については畦を1条検出したのみであるが、畦の直下から陶器片が出土しているので平安時代よりも新しいものと判断した。

平安時代の水田跡は、昨年度の調査の結果と同様に3層上面で検出され、灰白色火山灰によって部分的に覆われている。検出した畦は3条のみである。3層より上位の層は、そのほとんどの部分で現代までの耕作が及んでいるため、その影響を受けなかった一部分でしか畦を検出することはできなかった。そのため水田の一区画の面積、形状等の詳細については不明である。

4層上面では溝が7条検出されたほか、下水管移設部分において性格不明の落ち込みを確認している。落ち込みの中からは奈良時代に属すると思われる土師器が出土しているので、4層上面で確認された遺構は奈良時代のものと考えられる。

弥生時代の水田跡は、7c層上面で検出された。昨年度の調査では時期決定ができるような資料が得られなかったため、時期について言及することはできなかったが、今回の調査で大畦の上面及びその中から弥生土器が出土し、弥生時代の水田跡であることが明らかになった。水田面は区画の基軸となる大畦によって大きく画され、更に小畦によって区画されている。水田面の標高は8.8～9.5mであり、今回の調査区の西方が高く東方へ向かって徐々に低下している。大畦の方向にはN－10°～42°－E、N－27°～87°－Wの2つの方向があり、その幅は下端幅100～260cm、上端幅50～120cmで、大畦の上面と水田面との比高差は1～12cmである。その断面形は非常に扁平な台形状を呈する。小畦は部分的にしか検出されていないが、大畦と較べると細く水田面との比高差はあまりない。幅は下端幅30～70cm、上端幅20～30cmで、小畦の上面と水田面との比高差は1～4cmである。断面形は大畦とほぼ同様である。大畦・小畦は周囲の土を盛り上げてつくられており、それらを形成する土は耕土と較べると、色調・土性において若干の差異が認められる箇所もあるが、ほとんど区別できない。小畦の方向は大畦と直交もしくは平行する傾向がみられ、企画性が認められる。その小畦や大畦によって区画された水田はほぼ

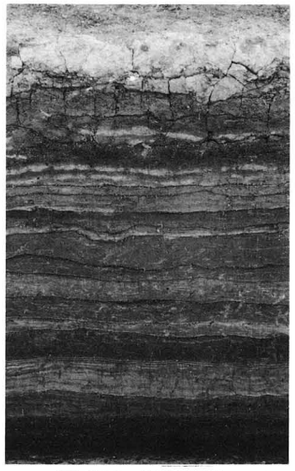
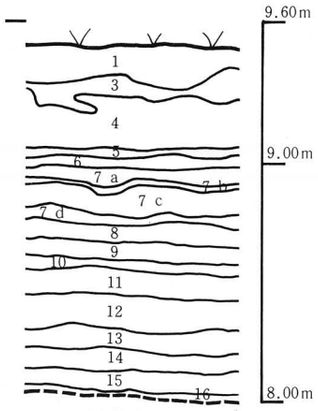
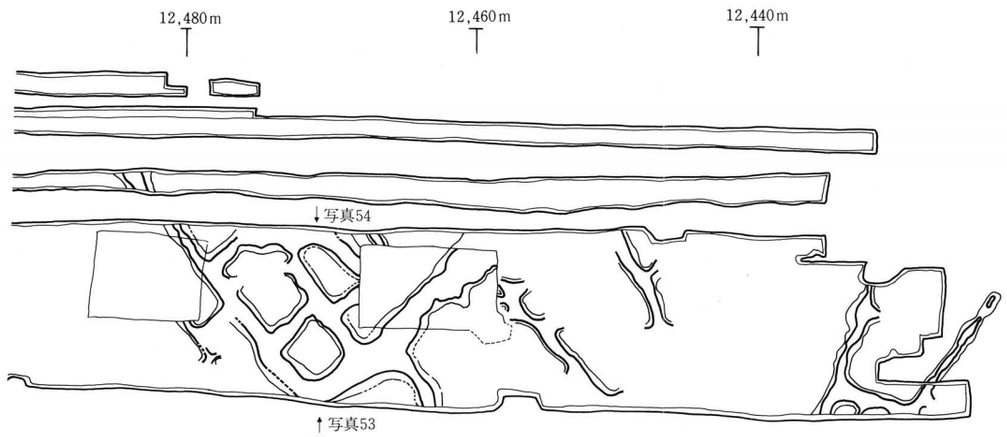
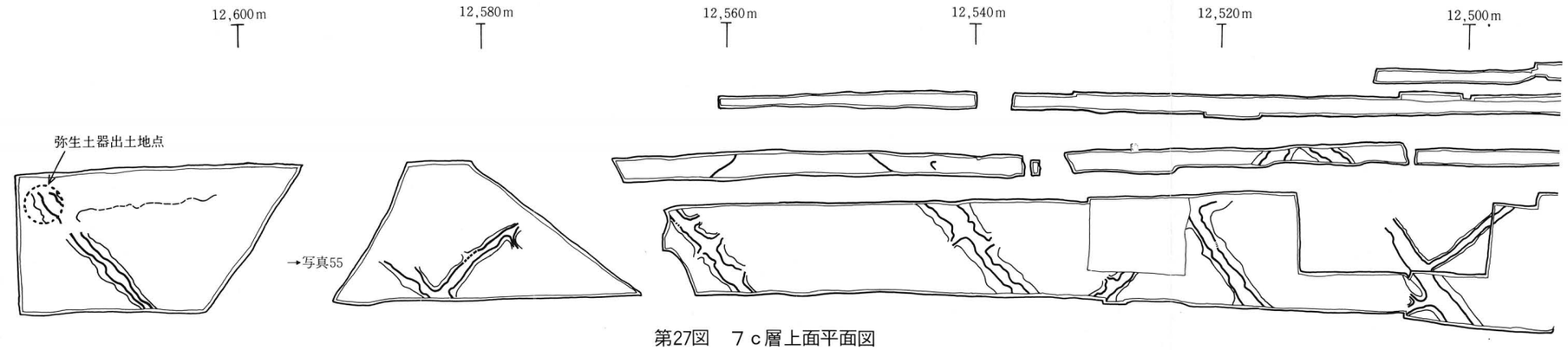


写真53　基本層位




第26図　基本層位




第27図　７ｃ層上面平面図

写真54　７ｃ層上面検出水田跡

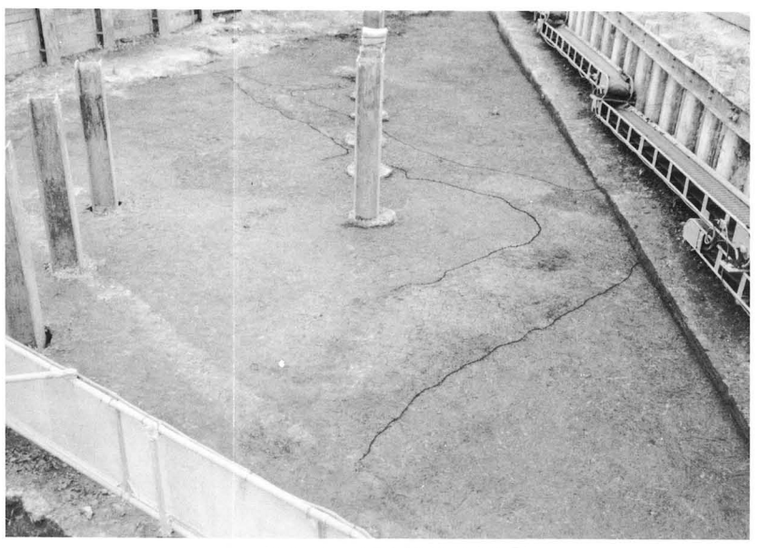


写真55　７ｃ層上面検出水田跡

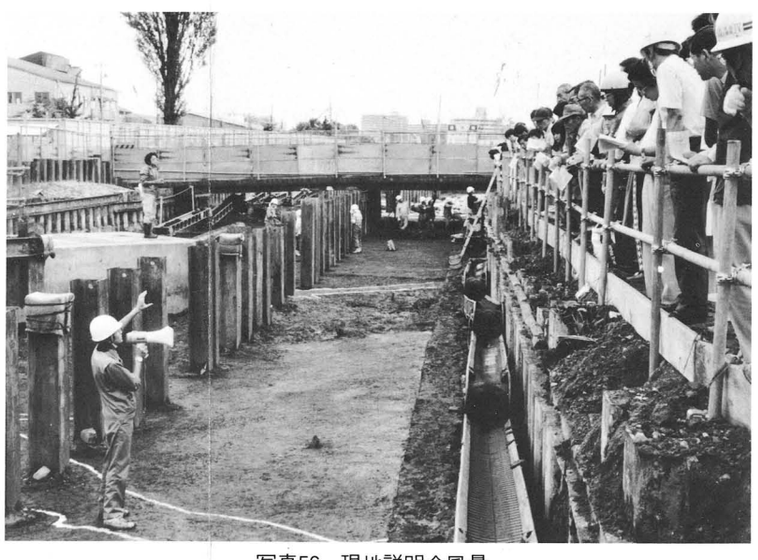


写真56　現地説明会風景

方形で、1枚の面積は昨年確認された水田の面積(6㎡～26㎡)と同様である。今回の調査区で検出された北西から南東へ延びる大畦は、必ずしも一定ではないが、15～16mの間隔をおいてつくられているものが多い。この水田跡では、灌漑・排水のための施設と考えられるような遺構は検出されなかった。

B．出土遺物

出土遺物については、前記のそれぞれの遺構の時期を決定する資料を中心に述べていくこととする。

第28図1・2は、最初に検出した畦の直下から出土した陶器片とその周辺より出土した陶器片である。この資料によって平安時代より新しい水田跡であると判断した。第28図2は中世の常滑の甕の体部破片であり、第28図1は近世のすり鉢の口縁部破片である。(注6)

平安時代の水田跡に伴なう遺物は、耕土中より出土している。土師器の破片がほとんどであるが、須恵器の坏の破片も出土している(第28図3・4)。土師器は製作にすべてロクロが使用されており、表杉ノ入式期に属するものである。須恵器の坏の破片(第28図4)には墨書が認められるが、上部欠損のため判読できない。

第28図8・9は、下水管移設部分の4層上面で検出した落ち込み中より出土した土師器である。特に第28図8は、体部中位の外面にのみ段を有するもので、伴出遺物とも併せて考えれば、国分寺下層式期に属するものと思われる。また、この層の上面で第28図10の木製品が出土している。工事のための鋼矢板によって切られているため完形ではないが、農耕具かと思われる。用途については共伴した木片と共に考えるべきなのかもしれない。

調査区の一部分には5層と6層が乱れ混じり合う部分があり、そこから木製の鋤が出土している(第29図1～3)。この鋤の柄と身は一木でつくられており、柄の端部(柄頭)は棒状に、身は細長い舌状につくられ若干弯曲している。第29図4・5は、西出入口の7a層上面で出土した木製品である。これも工事のための鋼矢板で切られているので全体の形状は明らかではない。前記の木製の鋤と7a層出土の木製品は、その出土層位より弥生時代から奈良時代までの間のいずれかの時期に属するものであろうと判断される。

弥生時代の遺物としては、弥生土器、石鏃、礫、木片、クルミが出土している。弥生土器は、大畦の上面及びその中から出土している(第29図)。出土した弥生土器は、何個体か(少なくとも2個体)の破片資料である(第29図6(ⅰ～ⅲ)・7)。甕の口縁部破片の1つ(第29図6)には、口唇部に縄文が回転押捺され、口頸部下端に左からの刺突による列点文が1列施されている。これだけの特徴から判断するのは難しいが、しいて言えば、その所属時期は弥生時代中期の桝形囲式期に属するものと考えられる。石鏃は耕土中より出土しており、5点を数える(第29図8)。基部はすべて有茎であるが、石質は多様である。この他に木片とクルミが出土してい

る。その多くは畦の上面及びその中、もしくは畦の周辺より出土している。木片には焦痕の認められるものが多いという傾向がある。

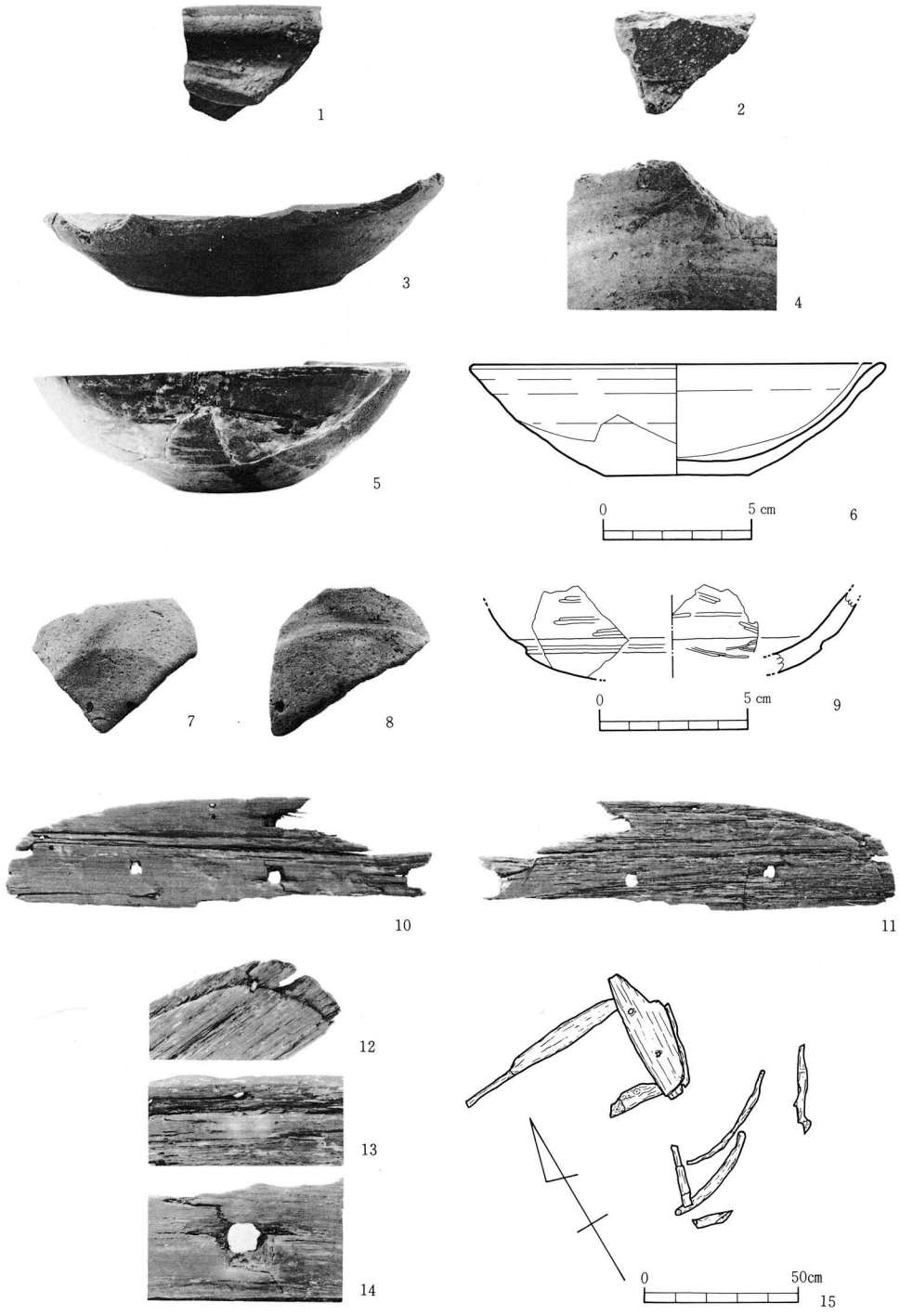
## 5．まとめ

今年度の調査成果は大きく3点に要約される。まず第一の成果として、昨年度の調査では時期不明であった7c層上面で検出された水田跡が、弥生時代のものであると判明したことがあげられる。大畦の上面及びその中から出土した土器より弥生時代中期に属するものと考えられる。東北地方の弥生時代の水田跡としては、青森県の垂柳遺跡が知られているが、本例はそれに次ぐ2番目の発見例となる。垂柳遺跡の水田跡と較べると全容が捉えにくいものとなっているが、これは調査区の幅が狭いこと、調査区内を東西に縦断する一部分がすでに下水管の埋設によって乱されていたこと、水田面を覆う堆積土が薄いこと、水田跡を形成する7c層を含む泥炭層の層厚が、その上位の堆積土や盛土の土圧による層中の水分の排出によって減じたこと（圧密[注7]と脱水収縮による）などが理由となっていると思われる。特に圧密と脱水収縮は、大畦・小畦の断面形に影響を及ぼし、更に小畦が部分的にしか確認されない原因となっているのではなかろうか。また、灌漑・排水のための施設は検出されておらず、水田跡は泥炭層によって形成されていることから、この水田跡は湿田であったと思われる。従って水田としては、初期的な様相を呈しているものといえよう。

次の成果としては、5層と6層が乱れ混じり合う層から木製の鋤が出土したこと、また、7a層上面からも木製品が出土したことがあげられる。今後、周辺地域の調査が行なわれれば、それらの層が形成された時点における何らかの人間活動の痕跡が確認されることは充分に予想できる。

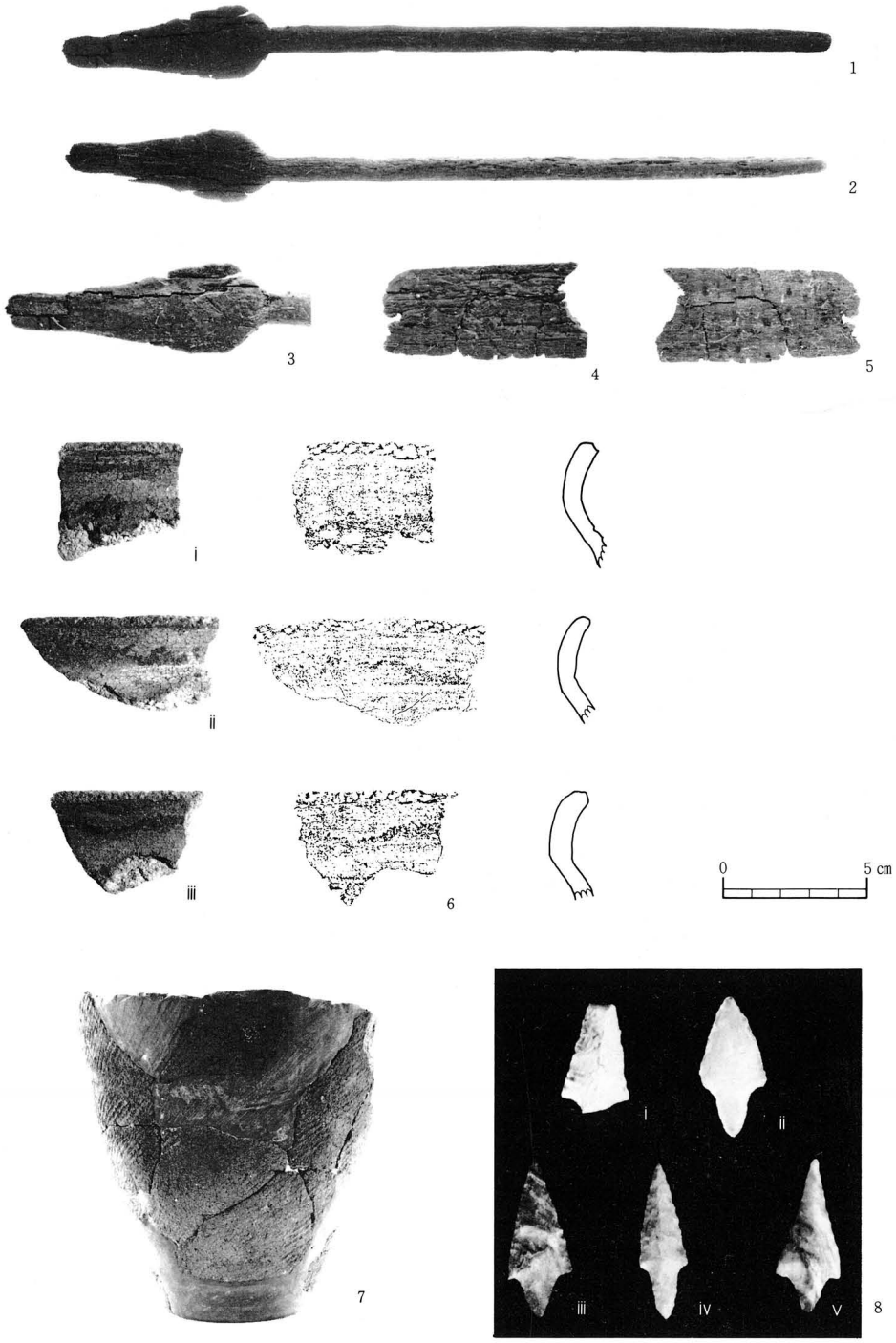
更に、4層上面で奈良時代と考えられる溝跡等が確認され、平安時代の水田跡、それよりも新しい水田跡が検出されたことも今回の成果である。

以上のことから、鳥居原・中谷地地区には弥生時代以降現代に至るまでの人間の活動の痕跡が連続して認められ、この地域は主に水田として利用されてきたことが明らかとなった。また泉崎前地区の調査[注8]においても弥生時代の水田跡が確認されたことから、富沢水田遺跡には弥生時代の水田跡が広く存在していることはほぼ確実といえよう。




1．2．中世陶器片　3．4．3層中出土須恵器（4は墨書部分）　5．6．3層中出土須恵器
7．3層中出土土師器底部破片　8．9．4層上面検出落ち込み出土土師器片
10～14．4層上面出土木製品（12～14は部分写真）

第28図　出土遺物(1)




1～3．6層中出土鋤　4．5．7 a層上面出土木製品　6．7 c層中出土弥生土器片
7．7 c層中出土弥生土器　8．石鏃（i・iii　7 c層中．ii 7 a層中、iv 7 b層上面　v 7 d層中）

第29図　出土遺物(2)

## 注

注１）　宮城野海岸平野の中でも、北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町一利府線によって画される低地部分をさす（経済企画庁1967、中田他1976）。郡山低地には、主に広瀬・名取両河川によって形成された自然堤防、後背湿地がみられる。特に郡山低地の西半部は、その半分以上が後背湿地によって占められる。

注２）　その成果については、詳細な報告書が刊行される予定であり、現在印刷中である。

注３）　昭和57年の試掘調査は、高速鉄道の建設工区毎に行なわれたので、最初はその工区名によって調査区を呼称していた。そのため、一部には工区名が遺跡名として伝えられている。昨年の高速鉄道関係遺跡の調査概報Ⅱの作成に際し、遺跡名を設定する必要が生じたため、とりあえずその付近の字名によって鳥居原・中谷地遺跡・泉崎前遺跡等とした。その後、仙台市では遺跡分布地図を新たに作成するため、この地域周辺の線引きを見直し、57年の調査成果を踏まえ、地形・標高等をも勘案した結果、富沢水田遺跡が登録されることになり、上記３遺跡は、この遺跡内に含まれることになった。このため、それぞれの遺跡は地区として、例えば鳥居原地区・泉崎前地区等と呼ぶこととなった。従って、一部で用いられた「鍋田遺跡」(畑中1983、工楽1983、須藤1984）は富沢水田遺跡鳥居原地区と同一である。

注４）　古地理学的観点からは、植物遺体が乾燥重量の50％をこえる場合に泥炭と呼ぶ（阪口1974）ということであるが、今までそのような分析は行なっていないので、ここで用いた「泥炭層」は、単に分解不完全な植物遺体を多く含んでいる層という程度の意味のものである。

注５）　庄子・山田1980、白鳥1980

注６）　佐藤洋氏の御教示による。

注７）　土が排水に要する時間的遅れを伴ないながら、徐々に圧縮される現象をさす(町田他編1981)。

注８）　広南病院建設に関わる発掘調査で、仙台市教育委員会が主体となって昭和58年４月から11月まで行なわれた。59年３月には本報告書が刊行される予定である。

## 参　考　文　献


阪口　豊　1974　『泥炭地の地学』p. p. 1～3

那須孝悌・市原壽文　1983　「「低湿地遺跡」および関連する用語の定義について」『考古学研究』118 p. p. 98～102

町田　貞他編　1981　『地形学辞典』p. 7

青森県埋蔵文化財センター　1983　『垂柳遺跡発掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第78集

乙益重隆　1984　「農具と農業経営」『考古学ジャーナル』228 p. p. 21～25

志間泰治　1971　『鱈沼遺跡』（1983年第２版）

畑中健一・三好教夫・山中三男　1983　「農耕史の花粉分析学的研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学　昭和57年度年次報告』p. p. 420～430

工楽善通　1983　「水田遺構発掘の経過と現状」『地理』第28巻10号　p. p. 31～42

須藤　隆　1984　「東北における稲作の開始」『考古学ジャーナル』228 p. p. 15～20

堀江門也　1981　「農耕の道具」『月刊文化財』218 p. p. 26～35

# 職　員　録

## 社会教育課

| | | |
|---|---|---|
| 課 | 長 | 永野昌一 |
| 主 | 幹 | 早坂春一 |

## 文化財管理係

| | | |
|---|---|---|
| 係 | 長 | 大沢隆夫 |
| 主 | 事 | 岩沢克輔 |
| 〃 | | 山口　宏 |

## 文化財調査係

| | | |
|---|---|---|
| 係 | 長 | 佐藤　隆 |
| 教 | 〃 諭 | 渡辺忠彦 |
| 〃 | | 佐藤　裕 |
| 主 | 事 | 田中則和 |
| 〃 | | 結城慎一 |
| 教 | 諭 | 成瀬　茂 |
| 〃 | | 菅原和夫 |
| 〃 | | 青沼一民 |
| 主 | 事 | 柳沢みどり |
| 〃 | | 木村浩二 |
| 〃 | | 篠原信彦 |
| 〃 | | 佐藤　洋 |
| 〃 | | 金森安孝 |
| 〃 | | 佐藤甲二 |
| 〃 | | 吉岡恭平 |
| 〃 | | 工藤哲司 |
| 〃 | | 渡部弘美 |
| 教 | 諭 | 渡辺　誠 |
| 主 | 事 | 主浜光朗 |
| 〃 | | 斎野裕彦 |
| 〃 | | 長島栄一 |
| 〃 | | 荒井　格 |
| 派遣職員 | | 高橋勝也 |

# 仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告２（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概要―（昭和58年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）

第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡Ⅱ―仙台市体育館建設予定地―（昭和59年２月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ―昭和58年度発掘調査概要―（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ―昭和58年度発掘調査報告書―（昭和59年３月）
第66集　年報５（昭和59年３月）
第67集　富沢水田遺跡―第１冊―泉崎前地区（昭和59年３月）
第68集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第３次調査報告（昭和59年３月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年３月）
第70集　戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第71集　後河原遺跡（昭和59年３月）
第72集　六反田遺跡Ⅱ（昭和59年３月）

仙台市文化財調査報告書第69集
昭和58年度
仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ
昭和59年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24―24　TEL63―1166